

旅路は美しく、旅人は善良だというのに

中田満帆

a missing person's press

2024

中田満帆

装帧——著者自装

澤あづさへ

もくじ

旅路は美しく、旅人は善良だというのに * 9

れもんの若い木々 * 39

愛についてのみじかく、そして淡いなにか * 53

ディック・フランスを読んだことがない * 58

家出娘 * 69

ひと殺し * 71

からっぽの札入れとからっぽのお喋り
*
80

インターネットと詩人たち
*
85

小説のあいまに
*
89

おもしろおかしく生きて死にたい
*
95

みずから書き、みずから滅びるってこと。
(Reprise)
*
112

オイルサーディンによって書かれた詩論
*
135

パンケーキの墓
*
141

エセ詩学の半ダース・パック
*
155

それはまるで毛布のなかの両手みたいで
*
162

光りに焼かれつつける、うち棄てられた冷蔵庫のブルーズ

*
181

著者略歴

*
202

あらゆる人生のなかでもっともけものじみた、むきだしの魂しいを求めて

旅路は美しく、旅人は善良だというのに

*

カウンター席に座って、横の止まり木を見る。小さな紙切れが名札のように貼ってあった。たしか、こんなふうなことが書かれてあったとおもう。――ふたりの少年がやってきて、おれのことと妹をつかまえていった。だからでていく。すぐにもどる。酒は置いておいてくれ――おそらくもどってはこないだろうし、連れ戻すこともあるまい。かれがどういう気持ちか、わかりたくないまま考えてから、はじめの1杯を撰ぶ。まわりを見渡してみた。かれを待つてそんな人間がひとりもない。立ち去っていったのだ。酒だってもうない。ひとたび哀れにおもい、かれを偲ぶためにも酒が必要だった。ついてきた女の肩を肩でこづく。察しがいいらしく、顔をあげて応えてくれた。

なにが呑みたいの？

少し考えて、あまりきざなまねはよすことにした。芋焼酎だ、湯割りの。かの女は年寄りくさいとつぶやき、そつぽをむいてしまった。しかたない、金のかの女が払うのだから、すきにいわせておけばいい。

ボックスに座った老婦人がしゃべるのをやってえらく高い声で耳に来てた。――待つてるのよ、あたしは。かれが来るのを。でもきょうだって来なかったわ！――なんていうひとなの？ 近所の子供を使いにしたりして！――待ちながら、いっぽんの木にされたわ。だからっていくともないのよ、あそこじゃあ。――しかも金持ちの男が来てね、あそこで話しかけんのよ。おれの眼鏡はどこ、だって。たがいにいくところがないのよ。妙ちきりんな召使いまで連れて、どこへいくのっ

てのかしらねえ。しかもめくら。

見たところ、かの女の相手はそれ自身のようだった。

なに見てるの？

あの婦人、ひとりで話してる。

めずらしくないよ。

よく見たの？

あの街じゃあ、よく。

まあ、おもしろいこっちゃないね。

おれだって変なのにかまれたし。

へんなのはそっちじゃあ？

ある本でみたことがある。ゆうらく町ってところでは60年代、首に札をぶらさげた老人どもがけっこうなかずでいたらしい。

そこには「わたしに話しかけてください」とあった。ゆくところを逸してるのはあぶれものだけではないということだ。

きみはこれからどうするの？

どうにも。

楽器なんて拾ってくればいいんだ、音色なんてあとからついてくるよ。

あんたには音楽ってわからないでしょ。

それだけ。

ああそうさ。作曲法も和音進行でけつまづいておわり。

単音ばっかでしかできないんだ？

安いもののソフトでいくつか書きあげただけさ。

そういつて、お情けもらいたいんだね。

ぼくは笑った。でなければやっていけない。かの女は笑わない。酒場でふたりともが坐りながら立ちつくしてる。旅なんざ、ろくでもなかった。長距離バスの夜更けはたちがわるい。室内灯が消えるころを過ぎて、いっこうに眠れなかった。小壘を呑み、脚を展^のばそうとする。できない。あたまをうつむけるか、うえにするかでしっこく験す。都市での失態が夢のようにあらわれる。そんなときはいつも主観ではなく、どこかべつの方向から撮影された映像にかわる。じぶんが場面の1部分にすぎず、だれかがつくった、ど下手な画面におもえてくる。ウイスキーの壘を握ってたら、隣の娘が肩を叩いた。窓からふりむいて、その顔をみる。化粧臭く、香水臭い。眼のまわりを隈取のような、墨絵のような、ほどこしが濃かった。舞台からそのまんま降りてきたような生身の女。かの女は壘を指した。

呑みますか？

黙ったまんまうなづく。唾なのかも知れない。ふたたび窓にもどって、壘が帰ってくるのを待った。

もつと持ってないの？

しばらくたってから声があった。壘はからっぽだ。

なんだってそんなものを？

さいあくだから。

さいやく、なにが？——いいから、はやくだして。

ちいさく幼い声にしたがっておしまいはいっぱんをやった。いやいやなのを見せつけてながら、かの女の手に落とした。

ありがとう。

それはどうも。――この地点でまだ、ひとつめの休息所からでてしばらくいったところで、午前6時まで5時間はある。酒の臭いがそろそろ車内に充ちはじめてた。

ずいぶん呑むんだね。

なにもいわないでかの女は呑みつけ、おれのぶんを失くそうとしてた。

もういいだろう、おれのがない。

黙ってて。

勝手にしやがれ。

してあげる。だから黙って。

箍がはずれたようだ。かの女は笑いだした。おれは壘をひったくり、その半分残ったのを干した。

のんだくれ！

笑いながらいわれた。塗りたくったマスカラのせいで、そのつらはあちらがわの笑みに見えた。地獄とか墓穴とか屠殺場とか夜の長距離バスみたいな笑みだ。

知ってるよ、

それぐらいのは。

呑んで喪ってきたばかりだから？

喪うのはわたしのほうがうわて。

それからすぐに膝を寄せあい、告白しあった。ばかもの同士でだ。

酔ってないでよく聞いててね？

どちらも脱出にとちって帰るところだった。ろくでもないことだ。ぼくは飯場にいた。おなじ年の、とても気さくなやつに逢った。かれは組長にいわれて流れてきたらしい。やくざものだ。ふたりしてビールを呑み、現場へいった。印刷会社のビルディングにはまだ壁もない。臭いはじめた夏が虻そのものだった。

ある夜、いい仕事があるとかれがいう。フロント企業のひとつで20万はかたい。まったくのぺてんで、あわや、けつを奪われそうになった。ぼくは文なしだから、母にねだって運賃をださせた。かの女といえば音楽やりたさにでていくも知りあった、とてもやさしいやろうにまきあげられ、やられてしまった。——どんなつらをしてこんな話しが聴ける？——どうだっていい。そうだ、どうだってかまわない。

それにしても眠れないね。

駅に着いたとき、足もけつも、うごかせなかった。窓枠に手をかませ、右足にちからを入れる。重心はそこだ。もちあげようなかたちでまごついていたら、かの女が手を貸してくれた。

すまん。

お礼にいつぼん奢ってよ。

女の子に奢るなんてとつてもきざだ。少なくとも21にもなる童貞のおれには。裸足で歩く男がコンビニエンス・ストアのまえで立ちどまる。森番にみせたそいつをよけ、ふたりは酒を撰んだ。樵は出はらってていなかった。女装のさなかかどううか？

高架下のルンペンたちにまじって、ポケット壘をまわし呑む。みんな敷物を片づけ始めてた。それでも、まだ寝てるのもある。いっぽんやって、それでまたいっぽん。帰りの電車賃がなくなった。あとはほうぼうでレコードや本を眺めた。たが

いの好みをたたいいあって過ごした。それがいいとかわるいとかはなしに、静かに。そのあいま、側溝を走るものをみた。どぶねずみだ。おたがい、はじめてだった。走る姿だけはうつくしい。なにもいわなかった。うんざりして、もうなにもいうまいだ。酒場の場面にそろそろもどろうか。

カウンターにケンタッキー・ウィスキーがきた。楽しい会話をねってみて、なにも浮かばないことに気づく。おれってやつはまったく、話すことに不向きだとおもった。ことばを憶えたって話せなかったころの空きを埋められはしない。こういつたとき、教室をおもいだす。どこだつていい。ただ教室であればおなじだ。さむぎむしい。むなしい建築、内装の賜もの。そこへいくといつもぞつとしたものだ。全身のどこを問わないで狙われてるとおもえてくる。グラスをひと息にやる。そのとき老人が入ってきた。まっすぐに紙切れのうえに坐る。ほかに空いてるのはいくらもあったのにだ。すでに酒がはいってる。

なあ、にいちゃん。

このまえ、S区で火事があったろ？

おれのどやのすぐとなりだった。

買いものから帰つてくると、

廊下や階段を犬どもや猫どもが走ってるんだよ。

だれかが隠れて飼っていたんだな。

ものすごい勢いで出口にむかつていった。

どこもかしこも煙しかなくて、そのなかを室にむかったんだ。

おれのものが無事か、あせったね。

おれの室には白黒のまんまのテレビがある。

眞の脂ですさまじいけどな。

おれはスイッチをつけて窓をあけた。そのむこうに
でっかい、おまんこみたいな炎がうずまいてたっけ。

かれの眼にある、黒い染みみたいなものにぼくは応える。

それはきれいでしょうね。

無視して老人は指をつきだすと、ここでクイズがあるといった。

さて、おれがなにをテレビで観てるとおもう？

皇室特集？

正解だ、おもしろいだろ？

なにがです？

白黒テレビをいまだに持つてるところがだ！

かれはいかにもしろいかを早口でまくし立て始めた。それからあたらしい売春宿、昔しからある売春宿、ひとの多すぎる老人憩いの家などについて語った。しまいはぼくのことを警官かとうたぐる。かれが沈黙をやぶりつづけることだけに感謝し、次の1杯をおもう。老人は顔を手で覆った。

おれはおもしろいのにだれもわかってくれないんだ。

忘れていただけですよ。

いいや、ほんとうはおもしろくないんだ。それにだれも話かけて来ない。

きつといそがしいだけですよ。

ふざけるんじゃない！

立ち上がってかれは、——おれのまわりで職に就いてるやつなんかいなよ！——あたり憚らぬ声でいった。店員には透明人間らしい。そのまま、からっぽのテーブル席へ移動するのにだれも呼びとめもしない。おれだって働いてなんかいな。ぼくは連れあいにいった、

たしかにあのひと、つまらないね。

かの女はいつのまにか注文したか、ビールを流し込み、

もうでる、——わたし、我慢できない。

*

初夏の夜だ。呑み屋通りを抜けて大きな本屋のまえへでた。ひと待ち顔の群れむれがやかましい。円柱のでっかい広告。派手なべべを着た女に表情なしでプロバイダを奨められた。その胸に手を当ててみたい。いつか、あれのねたに使おう。またふたりしてポケット壘をまわした。700円以上もした。黒いやつ。ぼくはときおり、かの女の顔を盗み見ては、化粧を落とせといいたくなつた。でもいまはこいつの金で呑んでいるんだ。下手なことはいえない。女はみんな意地がわるくて、悪意にはそこというものがないんだ。それを発揮されれば手に負えない。黙って離れるだけだ。つき合つたことはない。だがほかの場面でよくおもしろい知らされてるつもりだ。ぼくはチェイサーにビールを賞めながら、そういう場面をおもしろくしてた。

ああいう店にはよくいく？

まえはいったよ。

あんなところのどこが楽しくて？

べつに楽しくなんかないな。

酒は高くて量は少ない、

店主は無愛想だし。

知ってるひとが、

なんとかいうやつ朗読をやってて、

酒を奢ってくれてたから。

そのなんとかいうやつをそっちは読まなかったの？

たまには読んだ、うけ狙いで。

でも、おれは舌がよくまわらないから、

いろんなところでつかえて、みんなに笑われて、

そいつが酒になった。

ズブロッカってやつが好きだったな。

透明で、壘に草の茎が漬かってる。ぽーらんの原産らしい。

ぽーとあいらんどってあの港の？

いいや、ソ連の近くにある国らしいけど。

ばかみたい。

ばかそのものさ。

ぼさつと突っ立ったまま呑みつけ、そのまま21時を過ぎた。いろんな目玉がふたりをつけまわした。かの女をからかうものもいた。なにもできないことにただあきれてた、みずからへ。

うせやがれ！

このくそちんこ！

いいかげんにしないとその口をひん曲げてやる！

活躍したのはかの女のほうだ。しばらくして数駅先の暗い町で降りた。そこはかの女の地元であり、こちらがけつわって逃げた就職の、研修者寮のあるところだった。そこで2週間いた。せまい室は相室。背の高い、丸眼鏡の男が一緒だった。

その日の技能講習が終われば、そこらへんを遅くまで呑み歩いた。ただ金だけが減っていき、気がつくというぐあいですに乗っていた。ほんのひと月まえのことだ。もしかしたらまだ棄てていった荷が残っているかも知れない。ふたりは歩きながら入れそうな店を物色した。そこらにはコンビニエンス・ストアも、酒の自動販売機もなかった。暗い栗褐色の通りをゆつくりと歩き、なるべくなかの薄暗い、ふたりのひどく酔ったさまや、かの女の幼さの通らないところを探す。

どの店にもそれぞれ見覚えがあった。つまらないところもあったけど、親切でいいひとたちにもであった。あるところでは就職祝いに奢ってくれ、つぎの日にまた会いたいといってくれた会社員のおっさんもいた。生憎その夜には旅路に就いていたが。明るい店主の夫婦、それにかれらのだした焼きそば。

行きのがら空きの車輛でおもったのは、あたらしい空想のものがたりだった。おんぼろでも寛げるアパートメントと、なにかわからないが、なにかを産みだすおれ。生まれてこのかた、あたまのなかの、もうひとつの世界にぼくはおぼれて来た。

その穴ぼこのなかで傷みを忘れ、充ち足りてきたから、もの憶えのわるさも、からだの弱さも、みてくれのまずさも、つながりのなさも、咽もとを過ぎるのがあまりにも早すぎた。そうとも、おれはもつと苦しむべきだった。

女がうえを指差してる。

あれにしよう！

あそこがいい！

ちよつと！

どこ見てるの！

白にちがいはないけれど、かなり汚れたビルディングの上階に看板が掛かっていた。カラオケ居酒屋。まちがいない。いったことのあるところだった。その名もごくつぶし。ひまつぶしだった気もする。おれは断ろうとおもったが、かの女のはじめて見る、明るい顔のせいで、したがうままにしていた。4階まで螺旋階段をのぼる。扉をあける。赤黒い照明だか、内装のなかに半円状のカウンターと、ソファ席、カラオケ用のひくい壇がぼんやり浮かんた。まえに来たときとおんなじで客はおらず、中年過ぎの太った女主人が止まり木、若いバーテンダー姿の女が酒のまえに立っていた。ちがっていたのは若い女で、前回にいた、髪のみじかい、おれ好みの美人ではなく、目鼻立ちのはっきりしない青白いのがいただけだ。残念なのか、ありがたいのか。

女主人はひくいしゃがれ声で挨拶をし、ふたりをカウンターに手招きした。どちらともウイスキーの炭酸水割り。もうあまり呑めそうになかった。そいつを2度おかわりしてから、かの女は歌いだすといった。1曲が100円だ。おれはとめなかった。かの女の歌ったのが、なんという曲なのかわからない。けれどどこか、カントリー調だった気がする。歌はうまかった。ただ酔ってるせいか、舌足らずに響いた。ぼくはといえば、ひとまえで歌ったことなどなかった。

以前きたとき、古いジャズ歌謡ではじめて唄った。『女を忘れろ』というものだった。曲間のドラム・ソロが気に入っていた。女主人はそいつを聴いて音痴かどうかまいといった。この夜、どうやらぼくのことを憶えてないらしかった。わが恋人もどきはさらにもうひとつやって終わった。みんなで拍手を送ってやり、ぼくは口笛だって鳴らしてみせた。上機嫌でもどったかの女に、こちらがまだ口をつけていない酒を丁重にゆずる。そいつはいっきに呑み干された。

そっちも歌ってよ。

こんなひくくて鼻にかかる妙な声で？

いいとおもうからやってよ。

じゃあ、やるってやるよ。

ぼくはあまり考えもせずに席を空けた。酔っぱらっていて、もうなにかもが温かかった。それだからおなじ歌を、まえとおなじように書いていた。これでこちらのことがおもいださされるだろう。ダイス、転がせ。ドラムを叩け——就職と自立について語った口ぶりがいかにまがいものだったか、はつきりするだろう。やけにしんみりする夜だ。間奏のドラム・ソロにのって、からだをゆすり、いかにも悲劇的なつらをしながら歌っていた。忘れろ、忘れろ、あの娘なんかはよ。——みんな表情がなかった。おれは締めめのソロが終わるまえに席にかけ、からっぽの容器をつまみあげた。できるだけ粹に見えるように。もう1杯だけ。女主人がこちらを見据えた。

音痴かどうかまいわね。

それはどうも。

あんな古い曲、どこで知ったの？

映画ですよ。

そんな映画、いま観られる？

衛星でやってます。

でまかせを答えてばれるのを待った。あちらさんはそれ以上訊かず、ちがうところに水をむけはじめた。——ところでおふたりさんはいくつなの？ おれはどうってこともなかったが、かの女はちがった。大きいその眼をびくつかせてしまった。まったく、なにをいまさらおびえてる？

でも、女主人だって悪党じゃなかった。曰く、

安心して、

黙っててあげる。

なにもうらなんてないの。

あたしの友達がやってるホテルがあるのよ。

安くてきれいなのに近頃、

客足がにぶいのよ。

今夜だけでも泊まってやって！

ねえ！

*

安宿の主人も太った女だった。もしかしたら遠い親類かなにかかも知れない。これで3人めが、エクレアといっしょに現

れないことをわずかながら祈る。ほんの連想にすぎないのに、縁の薄い文庫本があたまのなかにあった。たしかモームの短篇だ。おれの恋人がどやよりも安い、ただ同然の小銭を払う。そしておれとおなじようにおれたちを車で送ってくれた女主人にふしぎそうなまなざしをむけていた。

どこかになにかが隠れていたっていい、そんなところだった。もとは近代的だっただろう、内装もひびと汚れと埃とかびで、そこらじゅうがやられていた。壁は黄色く、床には緑の敷物。まあ、小さくて目立たないところにある、この4階建ての昭和モダンはなかなか興をそそった。おれはそういうところが好きだった。どうせならジャケットと、中折帽子をかむって来ればよかった。そんなもの、持ってない。

提供されたのは、4階の小さな1室だった。かわいげのある狭さだ。ベッドカバーは深紅。色っぽいかもしれないが、いつ洗ったものなのか見当もつかない。寝台のわきに小さな鏡台と照明があった。テレビジョン、テーブルはなし。シャワーと便所のみ。かの女はまっさきからだを洗いにいく。どういうわけか、この階だけ窓硝子がない。かわりに緑やら赤の文字が入った合板が貼られていた。いや、打ち付けられていたんだ。おれは文字を見た。製造元のなまえだろう。かすれていて、どう読んでいいものかはわからなかった。でも、これとおなじものを実家で見ていたっけ。ねじの入れ方が執拗だ。

父は日曜大工に執り憑かれていた。もともと平屋で買った中古のわが家だったが、かれはそいつを20年以上、改築に費やしていて、おそらくそれに終わりはないだろう。いつもどこかをつくり、どこかつくったところを毀していた。通りがかったひとびとがおかしな眼で眺めた。少なくとも幼いころはかれについて。なんでもできる、すごい父だとおもっていたし、敬つてもいた。

しかし、そうしたことにつき合わされつづけるにしたがつて、けっきょくは狂気を学ぶために準備された、はじめての教材であると覚った。家すなわち、それは父だった。そして家にある以上、そこにあるものはかれの所有物だった。かれは毎

日、ひとり息子に手伝わせているのはほんの少しの、どうでもいい箇所過ぎないと声を荒らげた。日曜日の朝からひねもす、罵り声と金鏈の柄を味わい、御奉仕させられながら、しかしかれの息子はおもったものだ。マスはひとりでかくものと。

かの女はもう寝台になだれていた。スカートがもう少しでめくりあがる。酔いの醒めはじめたあたまで、そのさまをぼくは描いた。早いところ、そうなってしまえよ、な。なにかはじまる予感こそしたが、なにをしたものだろうか、まごついてもいた。なるたけ音を発てないよう、気配りながら歩み寄り、まだ17の女の子の横に坐った。化粧は落とされていて、はじめてみる素顔は素朴すぎたが、それがよかった。きれいで、お高くとまった感じが無い。薄目をあけながら荒い息をしている。

水をちょうだい、

炭酸水か、天然水で。

かの女の声がした。その通りだ。ぼくも欲しかった。さっそく階下へ急ぎ、フロントに声をかけた。まぼろしの3人めはなかった。どうやらまだらしい。安心した。エクレーを突っ込まれるのはぼくかも知れなかったけど。――ぼくはかの女の財布から金を払い、ふたつのペットボトル、炭酸と天然、自分用にジンの青い小壺を受け取った。急に怖くなったのだ、なにかが。もどってきたら音楽が聞えて来た。携帯ラジオをかけていた。半透明の赤い色。ストラップの紐があって、首から掛けられるようになってる。そんなもの、はじめてみた。

かつて好きだった3人組のバンドが、いまは4人になって、そのときにぼくには好きになれそうにない曲をやっていた。どうでもいいことだ。勝手に期待してうらぎられた気分になるのはまちがいだ。かの女はその曲が好きそうだった。鼻歌。おれはいつかは好きになれるかも知れない。ぼんやり受け止めながらボトルを2本、眼のまえにかざした。どっちがいい？

——炭酸がいい。蓋をあけてから手渡すと、ありがたいと小声でいつてから、ほとんどいつきに呑みだした。小さなボトルはからになった。かの女はもういっぽん、天然水も口につけた。こっちは少しづつだ。ぼくはべつの曲がかかるのを待ちながらジンをあけた。——なによ、それ？

もらったのさ。

うそつき、勝手に買ったくせに。いつまで呑むの？

だいじょうぶ、これで終わるよ。

いつまでもそっちの面倒見切れないから。

ぼくたちは黙ってラジオを聴いた。しばらくしてかの女がこっちをみた。

少しだけ吞ませて。

ぼくは直に呑んだやつをそのまま渡した。いぢわるのつもりだったが、むこうにはどうでもいいことだった。肩透かしを喰らってるはたで、青い壺を電燈にかざし、その輝きを眺め回していた。おれは訊いた。

きれいな壺だろ？

うん、ほんとに。

それ吞むと、青い小便がでるんだぜ。

きたない！

*

ほんとうの故郷はここじゃない。かの女はラジオに合わせてつぶやく。それがかの女の歌声だ。こちらはなんにも返さず、残り酒をちびりちびりだ。もうなにもわからない。酔っていない。でも酔ってた。あたまが冷静さを装ってる。いちばんたちがわるい。気持ちがいいのか、わるいのかの決まりもつかなかった。シャワー室から盥を持ってきて寝台の脇におく。手ぬぐいを枕のうえにかけておいた。

どうしたの？

げろするかも知れないだろ。

やめてよね！

被害に遭うのはこっちなんだから！

そっちだってそうとう呑んでるよ。

あぶねえのはおたがいさまだろ？

あんたほど呑んでないって！——ばかじゃないの！——脳みそが融けてるんだって！
うるせえな、くそつたれ！——くそがきは黙りやがれ。顎をひんまげてやろうか？

けんかもできなきや、働けないやつがなにいつてもおんなじ！

いいから黙ってろよ。

せつかくかわいい顔してんだ、もったいないじゃないか。

おれと愛し合おうぜ。

やりにやる、やってやってやりまくる！

おれはめんくいなんだよ、いつもいい女に惚れてきて、いつもきらわれてきた。

でなけりや、知られることもねえとくる。あんたとなら何回だって、——長々とせりふをいった。しょっちゅうつかえて、なにをいつてるのかもわからないところが多かった。恥ずかしいくらいに訛ってた。大きな近畿訛りだ。かの女はしばらく表情もなしにおれを見あげてた。こっちがいい終わるのを待って仕返しにする。そいつはこんなかんじだったとおもう。

ふざけんなよ、醜男。

あんたは甘ったれてるだけ！

じぶんを掴まえてくれるのを、

バスみたいにならずと待って、来ないまんま死ねばいい。

あんたって死体が歩いてるみたい。

わたしとちがって夢も目標もないし、だれかに出会おうって気力もない。

わたしは失敗はしたけど、学ぶことはできる。あんたとちがって！

くだらないものが脚のあいだにくっついてるからって偉そうに。

男はどうしてそうなの？

じぶんだけは賢いなんて、じぶんだけはばかだなんて、

どうしてたやすくおもう！

ラジオが飛ぶ。こちらに飛んでくる。あたらなかった。あたってのは合板で、外装を少しちらして床に転げた。ノイズもまた音楽のひとつだ。それを聞きながら寝台に坐る。床で寝ろとはいわれなかった。しかしそのおもざしは反対だ。

きみのいうとおりだ。ぜんぶ。

おれはじぶんがいちばん賢くてばかな死体だとおもってるよ。

展望もなんもない。

ただただ好きなものがあっただけだ。

それをまねしてばかげたことをやっただけ。

笑えない。

わたしは、とかの女はいいかけた。いいかけてやめる。わたしは、——ほんとうにすぎだったか、わかんない。音楽のこと？

でも、あなたはそれが好きなんでしょ、ほんとに。

しがみついてるだけかな。

お幸せ。

それはどうも。

その、なんとかっていうの、楽しかったの？

いや、ただひとに遭いたかった、誉められたかった、話したかった。

でも話すことなんかにもなかった。

ぜんぜん見つからない。

言葉を憶えるのが遅すぎてしまった。

喋る自信ない？

どもりがある。

ぜんぜんないって。酔ってるからでしょ。

いまでもつかえるんだよ。あつ、とか、えつ、とか。

そうしてからじゃないと反応できないよ。

そういえばそうだね。でもひとまえじゃ、なにか読んだんでしょ？

あつ、いろいろとね。

そのころから呑んだくれ？

幼いころからだよ。母方のじいさんがよくビールの泡を吞ませてくれて、

酒はいつもあこがれだった。

しょうのないこと。

わかってる。けどわかってない。

なにそれ？

格言。おれの。

ちつともおしろくない。そんなんでいったい、なにが書けんの？

もうなにも書かない。

じゃあ、どーすんの？

倉庫作業かな。

その身体で？

体力いるでしょ？

出庫係でもしようかな、品物のかるいところでね。――鼻で笑うというのをおやじのほかにもみた。くだらない自己暴露をやりたくていつもおれはうずうずしてる。いま酔ってからよけいにそれはできた。「わたしは死ぬか、隠れて暮らしたい。でもそのまえに」――不運な女はきらいだ。うつくしくない。耐え忍ぶ女もきらいだ。うつくしくない。でもやり返そうとする女はよかった。これで運さえ、ついてくれば文句はない。でもそれはどこにある？

そういえば、だれかがいつてたよ。

〈秋風や人さし指はだれの墓〉って。

「おれはどういうことだかわからなかったけど、それってすんごくさみしいことだよな」――だれもが手に墓つけながら歩いたり、笑ったり、もの喰ったり、くそしたり、2段階右折したり、列にならばされたり、鉄条網のむこうにいたり、病院に入ったり、ベストセラーの本を読んだり、面接官に呼ばれたり、検察官を接待したり、呼びだし喰らったり、出荷伝票とにらめっこしたり、しょんべんしたり、帰るところがあれば帰って、なけりゃ陸をひき、好きなやつにきらわれ、好きでもないやつと笑いあい、歌を唄ったり、働いたりするんだからな。

それでも、いきつくところがいつもそこにあって、

秋のかぜが吹いてるなんてきれい。

すんごくきれいにおもう。

きれいなのはきみのほうだよ、なんだってあんな化粧してたんだ？

すべてが怖かったから。

だれにも近づいてほしくなかったの。

ナンパとかされるんだろう。

あなたはできないでしょう。

じゃあ、おれに話しかけてきたのは？

いったらわるいけど、そっちがあまりにもぶさいくで、

暗くて冷たい顔してるから急にからかってみたかっただけ。

それで？

それでって？

うまくいったの？

*

午前3時をまわっても、ふたりは起きていた。横たわっているだけで、ラジオに耳を傾けたり、とぎれとぎれな会話をし
てなにもせずにいた。どっちかで手を握るか、頬を撫でてみるか、何通りもの、着想があつたが、どれもやれなかった。や
っぱりおれは童貞だった。天井の灯りを消して、スタンドに切り替える。靴下だけを脱いで床に抛る。かの女はじつと眼を
あけて、ラジオのほうを見ていた。ひとりでやるようにシャツとズボンを脱ぎ捨てる力がだせなかった。そとの路地から自
動車の音が聞えて来る。やがてそれは真下で停まった。

「ところで、女の子とつきあったことあんの？」——あるわけないだろう。——好きになったときって、モテないのはど
うしてんの？——想像力のないやつだな。——わるかったね。で、どうすんの？——好きなのがばれてきられるのを待つ
だけさ。——どんなふうにきらわれんの？——黴菌扱いされたり、ものを盗られたりだよ。小学生のころだった。——仕返

ししないの？——そんなこと、どうやってできるんだよ、相手は女、わるいのはぜったいに男さ。

みじめだね。

きみはどうなんだ？ だました男に復讐しないのかよ？——いつか、ぜったいにしてやるわ。あんたとちがって叩き潰してやる。——つよい女だな。ますますそそってくる。

気持ちわるい。

死ねばいいのに。

ああ、殺してくれよな。

いや！——じぶんでやって！

かの女が眠りに就いてから、その顔をコンパクト・カメラに収めた。それからぼくも眠った。酒はかえって眠れなくさせた。やがてかの女の吐く声が聞え、合板のすきまから入る光りが眼をあけさせた。まだ6時だ。かぜが路地裏から吹きあがって塵をいっしょに室に入れてる。だいぶ酔ってから、盥をあらかじめ、そばにして助かった。3度吐き、指を汚す。まだ残ってる炭酸水でしたたかにうがいをし、もういちど眠った。3時間経ってた。

また酔いが残ってた。ふたたび水を呷り、どうにかしようとする。どうにもならない。かの女はいなくなってた。窓辺の床にラジオが転がってる。スピーカーの積みたところは何本か折れ、散らばってた。横つづらにも罅がみられる。ひろいあげ、とりあえず鞆に入れる。カメラが失せてた。紙片がいちまい、寝台のうえに見える。——はじめにきた駅で待って。ふたたびこみあげてきて洗面台に走る。盥はいっぱいだった。くるしさはいつだって新鮮だ。おなじ階をまわってもかの女はなかった。階をあがってみせる。室の戸のひとつひとつを検分にみせてふれる。そのなかにひとつだけ、半開きのを見つけた。断りを入れ、そのうちかわをうかがう。まず砂っぽい、よごれた足もとが覗いた。そこには入って左の壁に背を

あずけた女の子が立って、こちらを見あげてた。寒色の、柄のあるワンピースを着て、かすかに笑む。その衣もどこかしらうすい汚れがあった。髪がおれの好みにみじかく、黒い。歩きまわって確かめる。どこにもいない。

なあ、——ワンピースのがいった。ここからでえへんの？

連れを探してる。

見なかった？

かの女はかすかに顎をふった。

車でたどこやし。

なにもいわずにしばしを過ごす。訊きたいことはあった。ばかりしくおもえた。しかしこれが現実でなくてなんだろう。

なあ、裏口の場所教えたげる。

あんたのこと、ママがよんでるから早くしたほうがええで。

待ってるから。

黙したまんま降りていったら、さっそくでぶに腕を掴まれた。敷物のうえから犬が吠え声の支度をしてる。

あんたの女、どういうつもりだ！

見てみてよ！

あいたまんまの金庫がある。ダイヤルがふたつと、錠のひとつの銀の箱で、あけられたまんまのむこうがわにお情けのよな札がのこされてる。赤いカーテンが室の温度をぐっとおしあげ、ぼくは床を見、敷物の柄を憶えようと努める。おそらくは5分あまり、そのままうごかずにした。

どうしてもらおうかな。わたしのお金ちゃん。

なにも持っていないんです、すみません。

そんならどうやってかたをつけんのかな？

働いて持てきますよ。

あんた、住所あるの？ 働いてるの？

なにもありません。

いまからかたをつけてもらうわ。

そうとうにまいってたから胃腸液と迎い酒を頼んだ。赤い眼を干してから、ぐっと脂肪に近づく。これは芝居だから大
事には至らない。それでも演技者なのだから。寝台にたがをからませ、おかみのちからをぼくに充たす。寝台は少し湿つて
る。ながれかかるとき、たつぷり憎んでやるつもりで乳房に両の手をむけた。でぶの片脚がぼくを蹴りあげる。そして蹴る、
さらに蹴る。おおきな笑いが熾った。火事の匂いがしてきたから、ぼくはいっきにでぶの腹におもてをうずめ、その肉に
抱きつく。さっさと終わりが来たらいい。

おかあさんといって！——唾液が降りかかる。もう驚くこともなかった。蒸留酒とパプリカの臭いがおもぎしを漏らして、
あたらしくもないだろう、絵画技法になった。青年にのしかかる水牛の時間。

とてもものろくさい時間がたくしあげられる襞のあるスカート、緑のパンティを脱がせ、あたらしい酒を空けさせた。指示
通りにそいつを口移しにする。スコッチの錘がふたりを線画にする。平手打ちがあざやかに決まった。ぼくの頬に温く。ふ
いに勃ってきた。もういちど口うつしにしてから、おれはでぶの横腹と左肩とのど仏を見舞った。けれど酔っていて痛みど
ころではない。カーテンのすきまから洩れだした朝日が美しい。その美のうちに杯はまわりだし、やがてでぶは、ぼくの權
にくちづけをしてきた。だからだ、一撃を喰わせてしまった。

立ち上がってまたぐらをなおす。傷はない。痛みはある。かぞえもせずに金庫のをねじいれたら、壇をふたつばかり盗ってホールへでる。もういちど階をあがり、くだんの室にむかった。女の子はまだそこにいた。ぼくはじかに壇にくちつけた。かつこいいつもりで。

殺してくれたんでしょ？

ああ、ばっちり。

案内してくれ。

かの女のみてくれを消えた少女と較べながら降り、裏口をでる。荒れた庭にいつぽんの柳が植わってた。これからどこへいくん？——とりあえず、あの駅だ。

表へでて、通りを進むまえにいま1度、宿を見る。陽ざかった宿のうえ、4つめの窓に立ってるのがいた。広い一對の窓の、左右に若い男と女が見おろし、こちらをとらえてる。なんにも入ってない両の眼。それはこちらを見る。のっぺらぼうみたいだ。表情なく、恋人同士にもおもえない。そこをはなれ、列車に乗り込んだ。中心街がみえるとほっとして、少女を見た。ホームにおいて通勤客のあいまを歩いてるとかの女がいう。

ありがとうやけどな、

酒呑むひと、きらいやねん。

そのうちひどい眼に遭うから。

どっちも。

それきりいなくなつてぼくはもといたところにもどってきた。駅で待つといつても広すぎてどこにいいのかわからない。とにかく歩きまわつてると、構内の本屋のまえ、老婆が箱のうえに坐ってた。和服に正座を決めこみ、背筋をのばしき

り、まえを見る。おそらくは往来だろう。そのまなこがこちらをむいた。まっすぐに射るものをこちらからも、まっすぐに据える。もしこれで耐え切れなければ、かの女は来ないかも知れない。うしろからだれかが見えてる。1分が経ち、勝ちにおもえた。2分経ち、負けにおもえた。3分、4分が経ってまた勝ちにおもえた。さらに5分経って負けにおもえた。そうして15分はしてやっとうきを変えた。こっちのほうだ。

*

カウンター席に坐って、となりの止まり木を見た。そこにはこんな紙片があったのを憶えてる。――あれは妹なんかじゃない。だれも気づかない。なんでありつがなにもかも知ってる？――そのとき皺でできあがった男が入った。となりの紙切れのうゑに坐る。こちらにむかって話し始めてた。それを聴きながらひとつの詩ができあがっていった。なんの苦しみもなにかわりに、それはしらじらしいじぶんの、へたくそな写し書きのようだった。いまいちど再現してみよう。

解きほどこれた夜のほどろに立っている男たち

かれらに勝ち目はない

おおきな鳥と

小さな鳥がきて

かれらやぼくを食い尽くすから

それははじめ

輝かしいようにおもえた

雨に融けだした聖母像のように

広告塔の少女のようにみせて

羽が朝を切る

よくよく見てみればなにもかもが衰えているし

まったくのかざりごとでしかないのだけれども

まったく愛しくおもえたものだった

安ホテルの汚れたベッドのうえ

ラジオが毀されるみたいに

かの女が喪われたから

もはや美はうごけないものたちの砦だ

すべてのあこがれと

すべての窓枠が燃えつきたのち

すべてのさまよいがはじまるだろう

けがれきつたものでさえ

光りを持つてると感じるのはもつともさみしいとき

ぼくはあなたといたかったのだ

けれど大急ぎで

とまったまんまの劇が

ある朝終わって

ひきつぶされてゆくはいっぴきの黒い犬

そのかたわれがいまのぼくだ

書き終えてポケットにしまうと、まだ皺でできた男が話しつづけてた。

おれはおもしろいのに、

だれもわらってくれないんだ。

だれも話しかけてこない。

話しかけてこない、

話をさせてくれない、

話せない。

話すことがない、

話させてくれない。

きのうもおとついても、

会社にいたときにだつてだ。

友達なんか、くそ。

きつといそがしいだけですよ、だれも。

だれも？——だれもだつて？

だれもだれもだれも、

わしのまわりで働いてるやつなんかいねえよ！

くそつたれ！

熱くなるのも醒めるのはい。かれは席をかわった。だれも話しかけるものはいない。おれだつてそうさ。テレビ画面の宇宙遊泳を観てた。音を消されてる。宇宙船内をマラソンしてるひとりの男が、おなじ環のうちに走ってる。かれはいたい、どこへむかつてるのか、顔また顔の通過、鳩尾と背中への痛みがやってくる。それでもとまらなかった。給仕が猫のようにおれをおもてにほうりこんだ。そうだ、そのとき、あの詩を側溝に流したんだ。——いま午前5時、見憶えのあるような太陽のぞきはじめてたところ。

れもんの若い木々

*

初秋だった。北部の田舎からでて、金が尽きてしまい、更生センターで寝てた。『ブルックリン最終出口』を読みながら。そこでは夕方の5時から朝の8時まで泊めてくれる。駅のすぐそばにあつて、建物は小さいけど、心地よい清潔さがあつた。労務者たちか、あるいはルンペンたちが、それぞれのスタイルを持って、畳ベッドに休んでる。まだ午後7時、消灯まで時間があまつてゐる。ぼくが便所に立って、もどつてくると、大柄な若い男が、ぼくのまえのベッドで力なく、うつろな眼差しで天井をみてた。ぼくは気にしないふりを決めて本をひらいた。

きみは本を読むんだね？

ええ、そうですよ。

ちよつと話を聴いてくれないか？

身の上話だろうとおもつた。まあ、それだってわるかない。いずれ小説のねたになるかも知れない。ぼくは坐つてかれに顔をむけた。かれは話しはじめ、それはこんなものだったとおもう。

*

おれはこのあいだまで港で働いてたんだ。港湾労働ってやつで、荷降ろしや荷積み、品ものの仕分けもやってたんだ。もちろんフォークにも乗ってな。それがきのう馱になっちゃった。きっかけは黒人の船員だった。やろうと知り合っておれはすぐに打ち解けた。ジャズの話をしたんだ。ドルフィーとか、モンクとか、オールドロンなんかについて下手くそな英語で語りあったんだ。ちょうど休憩時間で一緒に飯を喰ってた。そんなときだった、やつはおれに見せたいものがあるんだっていった。それでおれは仕事が終わったあとにやろうについてったんだよ。やろうは倉庫の裏手の、だれも来ないようなところからシートにかぶさったなにかを運んできた。

なんだよ、それは？

タイムマシンだ。

もちろん、そんな与太を信じるほどに螺子はゆるんじゃない。ただやろうはいったんだ、こいつを騙してレポートを書けば、60万はかたいてな。

あんたがやればいいじゃないか？

ああ、でも残念がらおれは健康診断で落ちたんだ。

だから、日本人のおまえに頼むんだよ。

おれはやろうの眼を見た。やろうはシートをはぐってモノを露わにした。そこにあったのはアイス・クリーム売りの屋台車だ。——こいつはいかれてるか、ふるってる。あるいはふるって、いかれてるにちがいない。

金は山分けた。

わかったよ。

やろうは解説書を渡すと、「あとは頼んだ」といって呑み屋街のほうへ消えてった。いったい、何者なんだ？ おれは屋台

車を調べた。後部にタラップとレバーがあった。そしてブレーキも。おれはタラップに両の足を乗せ、レバーを引いた。かくして屋台は走りだし、ひとびとの注目を浴びながら帰ったというわけ。つまり、そのころはまだ棲むところがあつたんだってなわけだ。屋台のどこに次元転移送置があるのか探した。そいつは冷蔵庫のなかにあつた。おまけに時限ダイヤルもある。ただしその発動には燃料がいる。おれは酒と売女をそろえて、次の日にでも買いに行くことにした。すさまじい夜だつた。たぶん金が入ったら、もっとすさまじくなるだろう。かの女の通り名は《蠍》だつた。おれは仕事をさぼって市場へと繰り出した。肉屋の店員がおれに近寄ってきやがる。

いらっしやいませ。

燃料が欲しいんだ。

うちは肉屋です。

スタンドなら表通りにあります。

3年まえに潰れましたが、バイトの女の子はけっこうかわいかったですよ。

いや、そうじゃない。鶏肉が欲しいんだ。

なんてひどいことを。

あんた、売る気あんの？

もちろんいい挽肉がありますよ。赤身で。

あいにく挽肉じゃあだめなんだ。

きょうは挽肉むきの1日だとおもうけどねえ。

曇りだし、雨も降りそうだ。

わたしなら挽肉にしますよ。

いや、だめだ。やめとく。おれは社会によって弄ばれる悲しい生き物なんだよ、たぶんこれからもずっと騙されてるって知りながら踊りつづけるんだ。わかるだろ？

わかります。——じゃあ、なにがいいんです？

レバーを100^{グラム}鞍^{サドル}牢^{ラウ}。

なんと怖ろしいことを。

それでもけっきょくおれは鶏のレバーを手に入れた。肉屋は不安そうな、落ち着かない素振りですばらくこっちを見つめてた。どうだっつかまうもんか。おれはタイムマシンで別の世界にいつてやる。過古を変えつつ、世界線を移動しつつ、おれが最高の人生を送れるだろうところへたどり着いてやる。レポート？ そんなものはケツ喰らえだ。

帰ってきてマシンに肉を投入した。しばらくして焦げるみたいな臭いと、咀嚼音が聞えてきた。いったいなにが始まるってんだ？ ダイヤルをセットしたがマシンはうごかなかった。おれは酔っていたし、庭のれもんの木にションベンして眠った。明くる日、ブンヤの知り合いに電話した。かれは最近競馬を憶え、おれに8千円の貸しがあった。

もしもし、おれだ。

金ならいまないし、おまえのくだらない短篇だって載せてやらないよ。

金も短篇もどうだっていい。

おれはタイムマシンを手に入れたんだぜ。

なら、とつと幕末時代にでも消えてくれださいな、だ。

まあ聞けよ、——おれは話した。ことのあらましから、報酬のことまで。少し喋り過ぎてしまったのかも知れない。かれ

は時間が空き次第、マシンを見に来るといった。

やっぱりデロリアンなのか？

いいや、アイス売りの屋台さ。

またしてもずる休みをして室にいた。トム・ウェイツの『バッド・アズ・ミー』を大きな音で鳴らし、隣の親子喧嘩を聞かないようにしてた。26歳の息子と67歳の父親が、もうずっと諍いのなかにあった。世相もよろしくない。吸血鬼のような政治屋どもが、それぞれの縄張りについてうだうだとやってる。こんな世のなかにあっても投票にいくやつはいるし、それでなにかが変わるとおもしろいこんでる痴れ者で世界はいつぱいだ。他者を変えようとするのは不毛だ。おのれを変えたほうが手取り早い。——そんな浅ましい考察を繰り返してるうちにブンヤは、いつのまにやら、おれの室に入り込んで、おれの非加熱麦酒を呑んでた。楽ちんだ、挨拶の必要もねえ。

犬のアインシュタインは元氣？

生憎と犬は飼ったことがないんだ。

だれが先に乗るんだ？

8千円のほうだ。

わたしは冗談はきらいだ。

気が合うな、

おれも冗談はきらいなんだよ。

それとも利子をあげて8万にしてやろうか？

かれは観念したみたいで、おれの冷蔵庫を勝手にあけて、おれのカナディアン・クラブをおれのグラスに注いでくれた。

そしておれの机のうえにおき、おれのほうへ差しだした。これで答えは決まった。おれたちは乾杯をして酒を呷ると、外階段を降りて駐輪場のはずれにある繁みへと歩いた。シートをかぶったマシンが隠してある。おれはそいつを引っ張って、かれの、やつのまえまで滑らせた。

本気なのか？

とりあえず説明書を読めよ、燃料は入れてある。

原発でも襲ったのか？

そんな必要はない。

肉屋で売ってるんだ。——おかしい肉屋だったが。

おれたちは説明を読み、操作方法とレポートの書式や提出期限について確かめあった。まずはやろうが実験台だ。おれは見物と決め込もう。

まあ、3日だな。

それくらいあれば充分だろ？

ああ、そんなところだ。

健闘を祈る。

ブンは屋台を押して帰った。おれがどんなに勧めても、どうしてか乗らなかった。まあ、いい。おれはれもんの若い木々に小便をして、室にもどった。親子喧嘩はまだつづいてる。おれはふと親父のことをおもいだした。やつは廃材で拵えたおかしい家に棲んでいた。おれのことを召使いのように扱ってた。いまではブンペンで身ぐるみを剥がされ、乞食をやっていると聞いた。10年もまえの又聞きだから、ブンペンではなく、セゴビアの刑務所にでもいるのか知れない。

隣室の狂騒にぴったしの音楽はなんだろう？ レコードラックを眺め、おれは股ぐらをさすった。そろそろ女の子を用意する時間だ。きょうは水曜日だから、本来なら《蝸牛》が来る。でも、そんな気分じゃなかった。あんな感傷主義者とはごめんだ。というわけでダイヤルをまわして《鋸鮫》に頼んだ。ちよいと攻撃的だが、知性のある女なんだ。それから3時間もあと、その女を後悔してるおれがいた。どこで機嫌をわるくしたのか、女はなにもかにも当たり散らし、持って来た映画を鑑賞しだした。それもホラー映画だ。おれはそいつがきらいだった。

なあ、それはないだろ？

きょうはそんな気分じゃないっていつてるでしょ！

カタツムリのなにが気に入らないのよ！

カタツムリとやりなさいよ！

したかなくおれは映画につきあった。そそのものはなにもなかった。それでもかの女とシャワーを浴みるころには、わるい状態からどうやら快復したみたいで、冷えたシェリーを何杯かやってから、かの女のなかに突っ込んだ。

また今度！

もちろん！

電話が鳴った。ブンヤからだった。えらく昂奮してる。なにをいつてるのか、はじめわからなかった。よくよく聞けば、時間旅行に成功したらしかった。でも、なにかがおかしかった。

おい、こいつのおかげでいい記事が書ける！ なにしろ、なんでもわかるんだ！——それから長ったらしい歴史の講釈が始まった。帝銀事件？——下山事件？——北関東少女連続誘拐殺人？——小学生の売春組織？——おれにはどうだってよかったが、ともかくマシンは無事だったらしい。帰って来れたんだ、おなじ世界線ってやつに。やがてやつ声が遠のい

てった。通信がよくないんだろう。

レポートはまかせたぜ。——そういつて電話を切った。

そろそろ仕事にいかなくてはならない。おれは残業を含む10時間にむかった。帰ってくると、だれかがおれの室にいる。それはまちがいなく《蝸牛》だった。泣きながら、おれのベッドに坐り、背中をこっちにむけてる。ハートランド・ビールをあけて机にむかい、いうべき科白を小一時間、探した。

おれが憎いんだろ？

女は首をふった。こっちを見ないで。

おれがわるかったよ。

ビールを片手にベッドに近づいた。そして女の背中に唇を寄せ、慰めるように吐息を吹きかける。じぶんでも陳腐な場面だったが、女を怒らせるとか、敵にまわすとか、下手な刺激を与えとかして生き延びた野郎は有史以来存在なんかしてない。おれはそれを心得てる。

助けが欲しい。

ようやく女がこっちを見た。乱れた髪の中かで青痣のある頬が見える。

なにがあつたんだ？

弟が家で暴れてる。

働きもせず、酒に酔って、父とわたしを撲ったの。

《蝸牛》は大学院に通いながらからだを売ってるといつか聞いた。弟がいるのも知ってる。なんでもそいつは生まれつきの落ち零れで、文学だの藝術だの与太を飛ばしながら、金も稼げず、のたくらやってるそうだった。でもそんなことはおれ

に関わりがない。どうだっていい。ただこの状況をうまく使えばただで1発できるはずだ。

今夜は泊まっていけよ。

そうじゃない、そんなことで来たんじゃない。

じゃあ、おれはどうすればいい？

あなたに頼みがある。この痣じゃあ、しばらく客はとれないからわたしを囲って欲しいのよ。

だってお金がないと学費も払えないし、

わたしは将来、アイ・ビー・エムに入る人間なの！

おれのなかでなにかが壊れた。黙って女の腕を掴み、そのまま戸口まで引きずった。

でていけ！

うすぎたねえ女のくせしやがって！

アイ・ビー・エムなんざけつ喰らえってんだ！

青ざめた顔で娼婦は駆けだし、やがて軽自動車で走り去った。おれは隠し金を確かめた。よし、大丈夫。非加熱ビールをもう、いっぱい開け、音楽をかけ、みずからを慰めた。またしても罨にかけられてしまった。あの女はきつと仕返しに来るだろう。おれは生きながら滅びるというわけだ。それでもタイムマシンの報酬がある。そいつを独り占めにしてこの土地からずらかってしまおう。3日後のレポートが愉しみだ。

朝になって電話がかかって来た。まずは《蝸牛》からで、曰く「高学歴の女を抱けるだけでも感謝するべき」、「ぜったいに赦さない」ということだった。好きにするがいい。次いでブンヤからだった。

こいつは凄いぞ、これで出世できる！

馬で負けることもない！

ありとあらゆる不正と謎を暴いてやる！

それでレポートはどうなんだ？ 進んでるんだろ？

あんなものはどうだっていい、マシンは買い取ってやる！

え？

わたしは世界を救う、わたしはじぶんの人生を救いだすんだ！ いままで味わってきた苦痛もなにもかも変えてやる！ やつは正気でなかった。——わかった、わかったよ。とにかくマシンを返してくれないか？

だめだ！

こいつはおれのものだ！

おれはやつの職場に電話をかけた。いかれてるか、ふるってる、それもふるってていかれてる。やつはもう何日も出勤しなかった。未明、やつの家に忍び込み、マシンを取り戻した。その祝いにあたらしい女、《蟋蟀》を呼んだ。かの女と酒を買って帰る。——ねえ、これなに？

駐輪場のマシンを見てかの女がいった。

タイムマシンだ。——なにいつてんの？——これはどうみたってアイス売の台車よ。

いっこうに《蝸牛》は仕返しに来なかった。2発決めてから、おれはマシンを起動させた。肉の焦げる臭いが、またも鼻を突く。燃料はあたらしく入れた。とりあえず、こいつで過古にいつて自身の存在でも消してやろうか。もうそろそろ、この人生にはうんざりしてた。仕事があろうとも、金があろうとも、大した未来が待ってないのはとくにわかってる。もはや自身に情熱も野心もないことはあきらかだった。ばかげたアルコールとばかげた女どものなかですべてが擦り切れ、かつ

ての夢がおれを苦しめる。そんなことにはあきあきだった。おれは時間をセットしてスイッチを押した。そして30分待った。なにも起らない。さらに1時間待った。なにも起らない。あきらめてトラップを降した。

翌日、おれはアイスを仕入れると、ある夜、台車を走らせた。町を見下ろす丘。夜景を眺める山出しのアベックたちに売りさばいた。なかなかいいアグリだ。みんながおれを写真に撮った。手をふつておれは丘をくだった。

レポートはじぶんで書きあげた。――《コノ機械ハ出来損ナイデアル》。タイムマシンだって？――聞いて呆れるぜ。おれはあの黒人を探して港をほつつき歩いた。やつはいなかった。いったいどうなってるんだろう？ おれはれもんの木々にシヨンベンをかけながら考えた。

やめないさい！

ふりかえると女家主が立ってた。守銭奴の老婆に見つかってしまった。

水をやってたんですよ。

ふざけないでください。あなたのことは近所で噂になってます。

いろんな女性を連れ込んだり、おかしい屋台を運転したり、とても迷惑してます。

もうしませんよ。

いいえ、いまからでてください。警察を呼びます。

わかりましたよ。

あのくそ屋台はどうしよう。おれは荷物をまとめようと室にもどる。だれかがおれの室にいる。それはまちががなく《蝸牛》だ。女はひとりじゃなかった。《鋸鮫》や《蠍》はおろか《麦畑》までいる！

いったいどうなってるんだ？

聞いたわ、あんたが《蝸牛》をむりやり犯したって。

《鋸鮫》がいった。どうやら罠に嵌ったらしい。

だったらどうなんだ？

開き直るつもりね。

あんたがどれだけわたしたちを傷つけてきたか、おmoi知ればいい。

かの女たちがいつせいに手斧をふった。おれのものを毀し始めた。机やレコードラックやプレイヤーがはじけ飛ぶ。おれは黙ってみてた。こうなっちゃ、どうしようもない。ただこっそりアイスの売上げをポケットにねじ入れた。

なにかいったらどうなの！

《蠍》がいった。

べつになにもないよ。

好きなようにやりなよ。

おれは椅子に坐って莚を吹かした。もうなにもかも、どうだっていい。生活にも人生にも飽き飽きだ。ただ飯を喰ったり、通りを歩くためにしなければならぬこと、手に入れなければいけないものが多すぎる。ここから去っていけるなら、この世からだって去っていけるにちがいない。おれは寝台で仰向けになって天井をみた。女たちはやがて静かになり、ちっとおれを見る。——もう終わりか？

なによ。

あんた、いつもとちがうじゃない？

どこもちがわないよ。

なんか、落ち込んでる。

そうじゃない。

具合がわるいの？

そうじゃない。

臙首になったの？

そうじゃない。

じゃあ、なに？

おれはもう疲れたよ。それにおれはきょうここをでなきゃならないんだ。しかも文無しでだ。そのとき、ブンヤから電話がかかってきた。マシンを返せと、わめきたててた。おれの職場にも電話をしたらしい。しばらくしてほんとうに臙首になったのがわかった。女たちが見守るなか、おれはマシンで港をめざした。嗤われ、うしろ指を差され、のろのろと埋立地へ。タンカーが見えてきた。巨きな貨物トラックや、荷降ろし場が見えてきた。おれはもう疲れ切って声もでない。そのとき、あの黒人に出会した。おれはやつにレポートとマシンを渡した。

「どうだった？——時間旅行は？」——生憎、こいつは使いものにならなかったよ。——そいつは残念だ。——金はどうなる？——わるいな、きょうは渡せない。——おれはアパートに帰った。もうだれもいなかった。大家が警察を呼び、かの女たちは連れていかれたんだ。——「とりあえず歌おう、——賛美歌42番！」——これは神の怒りによって滅ぼされる人類を唱った陽気な歌であるといい、男は厚生センターで大声を張りあげた。

*

かれは狂ってたのかも知れない。男は職員たちに連れてだされ、やがて警察を呼ばれた。ぼくは毛布に包まって眠った。そして朝の港まででかけてった。第4突堤の食堂で定食を喰った。するとひとりの黒人が近づいてきた。真っ白いハンチング帽をかぶって笑いかける。

ヤア、見ナイ顔ダナ？

おたがい片言で語りあった。文学のはなしだ。リロイ・ジョーンズ、リチャード・ライト、ラングストン・ヒューズや『ぼくのために泣け』や、なんかについて。——「ちょっと見てもらいたいものがあるんだ」——船員はいった。かれについていくと、シートに包まれたなにかが倉庫の裏手にある。

「なんだい、これは？」——タイムマシンだよ。——かれがシートをはぐった。タイムマシンだって？——でもそれはどうみたって新聞配達のカブじゃないか。——こいつをちよいと試してほしいんだ。

「ギャラは弾むよ」——ぼくはさっそくエンジンをかけてみる。肉の焦げるような臭いが鼻を突つつく。黒人はにやにやしながら、じつとぼくを見てる——いったいなにが始まるんだ？

*

愛についてのみじかく、そして淡いなか

*

夜は若かった。かれらはそうでもなかった。車を走らせながら女たちを見た。酒壺をかたむけ、声をあげる。やがてひとりの女を口説いて連れ込んだ。かの女はなにもいわなかった。そのとき、ガラスのわれる音がした。なにかを毀したらしい。でも、その3人は気づかなかった。薄汚いアパートで1発やっちまおうとあがった。いっぽう隣の室では、メキシコ人の母子があたまを抱えてた。仕事がなくなり、就労ビザは切れ、でも娘は日本語しか喋れない。噫。――眞下は女を椅子に坐らせ、米村はベッドに腰かけた。木山は酒をつくり、テーブルにならべた。

「この娘は静かにやりたいらしいな?」――米村がいう。かの女はなにもいわずに3人を見てる。眼はうつろだ。らりつてるのかも知れない。眞下は酒にくちをつけた。アード・ベックだ。なかなかいい。木山はスケッチブックをひろげ、かの女をデッサンした。でも、みんな酔い過ぎてて見れたものではなかった。――とにかくおれがいちばんだ――米村がいう。

――おまえは女に手荒なんだよ。――眞下がいった。――だからいつも逃げられるんだ。――おれに文句があるのか、このやろう!

眞下はかぶりをふった。好きにすればいい。おれは次の番を待つさ、そいつがあるのならな。――やがて米村が女を抱き寄せ、ベッドに運んだ。――さあ、かわいこちゃん、おれのコックを味わいな。きみのような美人にはその値打ちがあるんだぜ!――やつがかの女の長い足を膺にむかって嘗める。そしてスカートの襷にたどり着き、そいつをおもいっきり、たく

し上げた。今度は上半身を愛撫し、それから顔を撫で、口づけをした。はあはあと喘ぎ、ズボンを下ろす。いちもつを入れようとしたときだった。

「おい、大変だ！——来てくれ」——ふたりが来る。「この女、おまんこがないんだ！」——なんだって？——工具箱を持って来い！——木山は呆然としてる。眞下が小突いていった、——米村医師の緊急手術の時間が来たぜ！——木山は工具箱を持って寝室にいった。米村は女のおそこに穴を拵えた。これでできるようになったぜ、かわいこちゃん！——やつはさっそく女にぶちこんだ。悲鳴が聞えた。2人が寝室に入ったとき、床には血が飛び散り、女の首は折れていた。——なんてことをしたんだよ、おれたちの女神に！——木山が泣きそうな顔でわめいた。米村は拳でいつぱつやつを撲った。

「うー、なんてことだよ。おれのおそこがずたずただ」——医者に行くか？——いけるわけないだろう、この女をまず片づけなけりゃ。——眞下は救急箱をやつに渡した。ともかく女を始末しなけりゃいけない。3人は女を蒲団で包み、車のトランクに押し込んだ。そして運転はいちばん酔いのましな眞下がすることになった。山道をいく。いまはキャンプの時期でもなく、車もひとまなかった。もうじき溪谷だ。大きな河もある。そこから流せば大丈夫か。米村は眞下の隣で、大きなからだをふるわせてる。ふるえるたびに酒を呷った。そして眞下に一撃を喰らわせた。理由？——そんなものはない。車は脱輪し、うごけなくなった。

ちくしょう、どうしてくれるんだ！

おれにもわからねえよ、くそつたれ！

JAFでも呼ぶか、それとも死体担いで歩くか？

そんなときだった。1台の車がゆっくり走ってきた。やがてかれらを見つけると停まった。降りてきたのは若い男だった。どうかしまりましたか？——いいえ、脱輪しただけです。——それは大変ですね。手伝いましょうか？——なにを手伝おうって

いうんだ？——脱輪ですよ、道具もあります。——男は車からジャッキを降ろし、落ちたタイヤにかました。そして車体を2人で押し、もどした。眞下がいった、ありがとうございます。——こっから早く立ち去るべきだ。顔を見られてしまった。——男がいう。

あなたたちはどちらへ行かれるんですか？

溪谷を眺めに。

こんな夜にですか？

ええ、キャンプがてらにね。

奇遇ですね、ぼくもキャンプなんです。

ご一緒しませんか？

んー、それは大変ありがたいのですが、テントを忘れたみたいでね。きょうはすぐに帰りますよ。

それなら大丈夫です、ぼくのほうも友人たちが来れなくなってテントも余裕があります。

男はどうしてほっておいてくれないんだ。——眞下はしかたなくうなずき、かれの車についていった。林道から砂利道を下り、駐車場に入る。やつが眠ってるあいだに逃げよう。そうおもって車を降りる。かれの車からテントやバーベキュー用具を降ろし、河のほうまで運んだ。かれはテントを組み立て、寝袋をならべ、料理の支度をした。手早かった。火を眺めながら3人は語り合った。いまの仕事について、結婚について、趣味について。酒は、ジョニー・ウォーカーの緑だ。

「ぼくは警官なんです」——男がいった。3人とも飛び上がりそうになった。「少しまえに辞めました」——なにかあったのか？——米村が聞く。フライパンのソーセージとベーコンを転がしながら。

「ぼくにはつきあってる女の子がいました」——でもかの女は未成年で。それが親から通報で明らかになってしまいました

た。かの女との恋愛にはやましいものはなく、とてもうつくしいものでした。けれども発覚した途端、かの女は冷たくなつてはなれていき、同僚たちも淫行野郎となじつて、もうどうしようもありませんでした。上司たちは辞職するようにいいました。ひどい仕打ちです。ぼくは辞めました。警備会社に天下りするという話もありました、でも断りました。きょうのキャンプは何ヶ月もまえに考えていたことなのに、あの娘とのことで友だちもみんな離れてしまったんです。米村はベーコンを齧りながらいった。――女なんてみんなおなじだ。くだらない穴のために身を落とす必要なんかない。あんたは裏切られたんだ。でもそれが女の性質ってもんだ。おれにはただただ未成年とやれていつとき幸せだったってくらいにしか、聞えないね。――なんてひどいことを！

男はうつむいて涙を少し流した。――ぼくのことをわかってくれるひとが欲しかったんです。かの女は期待に応えてくれ、一緒にいるときは最高でした。非番の日にはデートにいき、よく映画を観たものです。かの女も映画が好きだった。でももはや会うことはできないし、かの女のほうもぼくのことを面倒にしかおもっていないみたいです。これからどうすればいいのか、わからないまま、日を過してます。いつか笑えるようになるまでずいぶんとかかってしまうでしょう。

眞下はため息をついた。こんなやつと一緒にではいつまでもかかってしまう。そのうちに腐敗臭がするだろうし、だれかが通報するかもしれない。眼のまえにいる元警官はただのまぬけだからいいとして、いったいどうすればいいのか？――そのとき、木山が声をかけて来た。あたりに聞えないように耳打ちする。

「あの女ってもしかして人間じゃないのかも」――なんだって？――おれたち酔ってたろ？――ああ――ショーウィンドウをわってマネキンをつれだして来たような気がするんだ、たしかじゃないけど。――眞下は立ち上がって車にもどった、そしてトランクをあける。たしかにそこにあったのはマネキンだった。一気に緊張が緩み、笑みさえ溢れる。キャンプにもどってスコッチをがぶりとやった。

おれたちは安泰だ！

元警官は感情の高ぶりに声をあげていた。救いようもない。そのとき駐車場のほうから人影が現れた。しだいにちかづく。その首にはあたまがない。——あんたたち、よくもやってくれたわね！——このミソジニスト！——かの女は首を元通りに復元した。そして男に近づく。——あなたはほんとうの愛が欲しいのね？——ああ、そうだ。——わたしが人間になってあなたのもとにいくわ。——マネキンはずっくり人間の女に変わっていった。肌は艶めかしく、瞳はあざやかに。冬のあたらしいスタイル、絶賛発売中！——そして男の手をとって唇を重ねた。3人は眺めているしかない。ふたりはテントのなかに入ってコトをはじめた。もうどうにもとまらない。かれらは互いをみやった、粗野な男たちが立っているだけだ。「おれたちもほんとうの愛を探そう」——かれらは車に乗って、町をめざした。盛り場を、あるいは美しい留置場を。

*

数ヶ月後、元警官のかれは悩んでいた。妻のふるまいに。——あんた、いつになったらまともな仕事を見つけるの？——あたしだってまえのようにマネキンじゃないのよ、まったくこんな安物の化粧品を買わせて、見てみなさいよ、肌がくすんでるんじゃないの！——さっさと職安にいったよ、このグズのロリコン！——かれは最近競馬を憶えだした。競馬場に入ったり、場外馬券場にいったり、あるいはA・P・A・Tを使ったり、金がなくなっていく。やっぱり警備会社へ天下りすべきだった。そうおもいながらかれはむなしくなり、書いているおれもむなしくなって来たところだ。じゃあな。

*

ディック・フランスを読んだことがない

*

あわやぶちこまれそうになった。——どこに？——留置場ではない、救済所でもない、失業者相談窓口でもない。おれのけつの穴へ、銃口でもなければ、パイプでもパイプでもないもの。骨のない、やわらかくなったり、かたくなったりするのが、皮と肉と管によってできてて、おれやあんたの股のあいだにあるやつがだ。

「おい、おまえ。そこでせんずりしろ！」——なんでだ、手品はどうした？——これも裏切らせないためだ。——おれは寝台へ、全裸でよこたわり、またぐらをしごきはじめる。やつはそれをじっと眺める。そして鞆からおもちゃのあひるをとります。「これがなんだがわかるか？」——おもちゃのあひるだ。——おもちゃのあひるです、だろうが！——すみません。——こいつが怒りだすまえにいき果てろ。わかったか？——やってみます。

「おまえ、紫色の公衆電話の話、知ってつか？」——いいえ。——まあいい。おまえにいったってしょうがねえ。——ポルノがテレビから流れてる。さえない代物だ。おれは勃つんじゃない！——そう自身へいいつつけてた。——はやくしろよ、それとおれがしごいてやろうか？——しびれを切らしたか、小男はおれのを掴んだ。立ちあがっておれの背後にまわる。

おれが入れてやる。

痛くはない。

それだけはやめてくれ！——おれは哀願し、なんとかその場を通れた。いったいなんのためにおれはこんなところにいる

んだろう。

*

工場は米の投入役を求めてた。採用された。ミラーの『冷房装置の悪夢』を持ってた。ふたりの若い男が退職をひかえて嬉しそうだった。仕事は単純だった。いやなやつがひとりいるらしい。そいつはリフトを運転してた。リフトが運んだ米袋を開封し、脱穀機へながした。父が勝手におれの鞆をあけた。ミラーを見て激怒した。職場に本などもっていくな！——というのが新しい訓示だった。理由を聞いても答えない。従わないことでおれは、その謎を解こうとした。しばらく経って、やつは気に入らないことに怒ってるだけなんだと合点した。福知山の脱線事故のあとだった、「たつや」の女将から電話があった。おれが巻き込まれたのか、心配してくれてた。あの事故で亡くなったひとで知ってるのは、小学生のときに通った床屋の女将だけだ。

仕事は粉塵による鼻炎がひどく、2週間でやめた。米の粉が吹きあがって来る。マスクをすればよかった。三田の駅前で電話をかけた。やめますといい、途中で切ってしまった。それでも金が入って来た。おれはもういちど東京へむかった。とりあえず路上に坐った。老いたルンペンがよってきた。

よお、あんた、どっから来たんだ？——神戸からです。なにしてる。——いまはなにも。仕事を探してます。——おれはきょう金が入るんだよ。そのまえに飲みもの、奢ってくんねえか。あとで返すから。痩せたからだに半袖を着て、金はなさそうだった。それでも、おれは老人を信じて飲みものを買った。見返りのためじゃない。かれは亢奮ぎみに「おまえに11万やるよ！」といった。11万は来なかったが、かれがよくしてくれた。もとはやくぎで、移民2世、妻が死んでから路上に

入ったといった。菓子パンやスピリタスをわけてくれた。2日たっておれはいった。

なにか仕事はありませんか？

ホストなんてどうだ？

あんた、いい顔してるしなあ。

あるいはシンナーでも売るかだな。

しかし最近じゃあ警察がうるせえからなあ。

飯場とかないですか？

倉庫とか？

そういうのならいっぱいあるよ。

翌朝、地下道でかれは手配師にひきあわせた。話しはすぐに決まった。小さな路線をひきつぎして飯場、加藤組へ来た。そこは八王子の住宅地のなかにあってトタンで覆われてた。まずは食堂に招かれ、ひさしぶりに飯を喰う。つぎに湯に浴みだ。『東京流れ者』を口にしてしていると、湯加減はどうかと声がする。

問題なしです。

室は大部屋で数十人との共同だった。莚に黄ばんだ壁をながめてると、男らが帰ってきた。かるく挨拶をすます。あとはなんにもできることがない。10時の消灯までうごけずにいた。ノートを広げて発想を待つ。観察されてるようなさわりがあった。たしかにだ。このまえにも所沢の中村組という飯場にいた。室が決まるまでコンテナハウスのなかに入れられた。室は、3人組の相部屋で、室の入り口にはアニメキャラクタの等身大パネルがあった。初日、中目黒のアパートメントに行かされた。基礎工事の手元作業。コンクリートの打設のため、鉄骨をブラシで洗った。地上へは仮設階段がある。昇り降り

するたびに揺れ、怖かった。昼食、おれは弁当を忘れてしまった。それを察したのか、老人が菓子パンをくれた。夜、仕事から帰って来ると、室の長らしいのが凄んだ。——おまえ、挨拶もできねえのかよ！——ぶっ飛ばされたいのか！——こんなところにはいられない。あたまのいかれたおたくやろうなんざごめんだった。おれはさつさとでた。

村下渉に出会ったのは、翌々日だった。やつはワゴンの窓際でだけだるそうにしてた。現場は大日本印刷・事務所ビル。黒い鉄骨をむきだしにした陰茎のようにみえる。からだがまるでうごかなかった。足場を組むのを手伝ったり、ガラだしをやってるあいま、倒れそうになる。不安定な仮設階段はめくらむ揺れをくれた。

そこのおまえ、足場を組め！——おまえ、おれより喰ってるんだろが！——もつと動け！

ひよろ長の男が罵声を浴みせるのを黙って聴いてた。こいつを叩きのめして、スコップの味見をさせてやりたい。休憩のとき、おれは氷をタオルに包み、頭にあててた。雨季をまえにして夏は来てる。地下の詰め所に降り、じぶんの飯場の卓を探す。そこにはあのちびっこがいた。——大丈夫か、あんた？——じぶんでもわかるほど顔が青くなってた。坐って相手を見た。160センチ、あるかないかのちびだった。でもこいつだって要領よくやってるんだろ。涼しい顔してる。どんなことでも抜かりなしといった様子だった。おれは自身を憐れみ、ただ腰を降ろした。——歳は？——今年で21だよ。——おれとおなじじゃないか！——やつは笑って蔑をさしだした。いっぽんとして喫む。つまりねえ代物だ。酒を吞みたかった。やつは村下渉と名乗った。

「おれはじつはやくざなんだよ」とやつはいった。14歳からかかずかずの非行を重ねて来たとか、もとは金髪だったとか、年上の女と実家で暮らしてるとか、医者にハルシオンを要求して拒否されたとか、そんな与太を喋った。じぶんには別に仕事があつて、そこは高給で楽ちんだ、おまえも来ないかといった。

なんでこんなところにいるんだ？

「しくじりをやらかしてよ、組長の命令で来たんだ。どうだい、こっちをでたらいい仕事がある。——のらないか?」——おれは警戒して遮った。いや、おれもでたら用事があるんだ。わるかったな。——おれは警戒してた。こんなやろうとは離れるべきだ。それでもだんだん。ふたりで話すようになった。晩酌のビールをやつとわけあい、やつが仕事についておれをフォローしてくれることもあった。しかし飯場にも労働にもあきあきしてた。とてもおれのからだに合わない。詰め所ではやいた。

もうやめるよ。——やめてどうする?——地元に戻って工場にでも戻るよ。——戻れないだろ。——さあな。——おれの仕事についてこいよ。来週の金曜日に満期なんだ。——どんな仕事だ?——それはいえない。でもあんたのことが心配なんだよ。

ある晩、どぎつい仕事を終え、公園にいった。やつがおれを待ってた。——とりあえず、組長に話しをつけてきた。月20万はかたいぜといった。——それでどうすればいい?——まずは組長のままで手品をしてもらう。——仕事の内容は?

「電話をかけるだけでいい。多重債務者にだ。それでおれたたちが肩代わりして利子を儲ける。あんたなら1ヶ月はなにもしなくてもいい」——いい出会いに恵まれてる。うれしくおもった。やつの満期で飯場からずかることにして室へもどった。盆休みになった。8月12日、金曜日。やつは満期。おれは酒壇を鞆にしまいこみ、やつのを追った。やつは遅いといった。手元には盆休みの5千円あった。まずはバスに乗って駅をめざした。やつがさえずる。聴くに耐えなかった。

「おれはまえにいちどバスの運転手をしめてやったよ。おれが1万しか持ってねえっていったらよ、そいつ、そんなじゃ支払いにならねえと抜かしやがった。おれはバスからやろうをひっぱりだして、停留所の看板でぼこってやったよ!——あれは傑作だったなあ。土下座もおまけだ」。

そんなことがやつにできようとはおもえなかった。おれはやつから見えないように酒を口にした。——おれたちは環状線

に乗りこんだ。雨脚はつよくなり、やつは落ちつかず、いらだちをもろだしにしてた。そして目的とはちがう飯田橋駅で降りてしまった。おれたちはパチンコ屋に行くことになった。雨が降りだした。帰ろうかとおもった。どこへ？——やつがいうに金を作るといふ。おれが店内をうろちよろしてるとやつがおれの肩を小突いた。——おい、来る気ないだろ！——いや、あるよ。——手品の道具がいる。ビニール紐とばちちよんカメラを買って来い！——やつが千円札を1まいきり渡した。追いついてられるようにおもてへでた。商店街を見つけ、紐とカメラを用意した。やつが喰わせものとはわかってたが、20万のきらめきは、なかなか消えてくれなかった。パチンコ屋のまえで2時間待っていたらやつがあらわれた。黙ったままだ。換金の列にはくわわり、なにがしかを受けとった。いずれおれはこのことを書くんだ。やつをしっかりと見る必要がある。でも、おれのほうも焦ってた。ようやくにしてやつの地元にきた。上野だ。

ここじゃあ、おれもそれなりの顔だ。敬語で話せよな。

ああ。——ああ、じゃねえよ。わかりましただ。

わかりましたよ。

*

観月荘の4階に室をとった。古い宿だ。寝台がふたつ、姿鏡が1枚、冷房、テレビ、便所、廊下にはビールの自販機。室に入ろうとしたとき、やつは「バイバイ」と手をふった。どうすんの？——やるよ。——なんでおまえのホテル代まで払わなきゃならねえんだよ！——どうすんだよ。——やり場を喪い、シャワーを浴びた。——その態度じゃ、うちの組長も切れんべ。金が欲しいだけなんだろう？——うちの会社、入ったからには、それなりの働きをしてもらわねえといけねえんだよ。

おまえから金貰いたいぐれえなんだよ。おまえ、甜めてるだろう、こっちはやくざなんだよ。おまえなんてすぐに殺せるんだからな。すぐ、ふてくされるしよ。——耐えかねて、やめるとおれはいった。——それじゃあ、おれの面子はどうなの？——ホテル代は払います。——兄貴や彫り師は呼んであんの。払わなかったらどうすんだよ。怒られるのはおれ、なんだぜ。室の頭金も払ってんの。払えよ。身分証なんかなくなつて探せるんだぜ、てめえの家族に取り立てるぞ！——やつは激昂して捲し立てた。うんざりだ、おれはおまえを信じてたんだ。しばらくしてやつも大人しくなった。たがいにビールを流し込む。やつが話した。組長が今夜これないという。かわりにここで手品をやつて写真にとるといった。

おまえまず、裸になるんだ。

裸で手品をやるんだよ。

戸惑つておれが脱ぐ。やつがおれをビニール紐でしばりつける。しかしそれだけだった。あとは要領を得ず、紐はけつきよく切られてしまった。おれの全裸をやつが写真に収める。いったい、こいつはなんなんだ？ 問いかけのしようもない。おまえ、そこでせんずりしろ！——おい、手品はどうしたんだ？——裏切らせないためだ。

テレビが光りを放つ。ポルノだ。おれはいつまでも勃たなかった。いやものを浮かべて勃たないようにした。父の顔や、クラスでいちばんの醜女をおもいうかべた。やつは痺れを切らし、おれのうしろに立った。やつはズボンを降ろして態勢をつくった。

おれが入れてやる。

痛くはない。

それだけはやめてくれ！——あわやぶちこまれそうになった。やつはしぶしぶ、じぶんの寝台へもどった。おれを睨む。坊主頭で、やせぎすで、しかし態度と声だけはでかい。いっぱしのちんぴらやくざにふさわしい声色じゃないか。おれは怒

声を浴びてゐるしかなかった。けつを奪われかけて寝台のうえで正座した。

まぢめにやれよ！——すみません。——まぢめに働く気もないんだらう！——樂して金が欲しいっておもってるだろ？——もう仕事の話はなしだ！——聞きながらおれはじぶんがなぜこんなことになったのかをおもいめぐらした。たしかにおれは樂がしたかった。大金を得たかった。まぢめでもない。でも、おれはじぶんの居場所が欲しかった。

だからっておまえ、逃げるんじゃないぞ、おれには調べがつく！

逃げればおまえの家族だってただじゃおかねえからな。

おれが紹介するから、おまえそこで働け。

それとも金持ちババアのヒモにしてやろうか？——金はいいです。とにかく帰してください。

このホテル代だっておれが払ってるんだぜ、そうはいくかよ。

やつはおれの鞆からノートを引き抜き、なにやら店やひとのなまえを書きだした。ひどい悪筆かとおもえば、きちがいみたいにかいいたな楷書だった。地階の電話で、飲食店だかの番号を調べた。104に何度もダイヤルし、そいつを書きとめた。見つかからない店のほうが多かった。わずかな答えをたずさえてもどった。

おれの先輩がやってる店がある。おまえ、そこいけよ。ボーイの仕事だ。

一生懸命働いて母親に仕送りでもしてやれ。

そうしたら前に仲がわるいつていつてた親父ともよくなるだろうしな。

休むときはちゃんと連絡してこういうんだ、明日はがんばりますのでお願いしますすつてな。

そうすりゃ認めてくれる。——さっきまでけつの穴にぶちこもうとした相手にいう科白か？——おまえには夢とかないのかよ？——詩人だ。——なんだそれ、小説とどっちがうんだ？——なにもおもいつかなかった。——まあ、おれも駅前

で酔って買ったことがあるけどな。いいちゃいいし、よくわからん。——ただただ時間が過ぎるのを待つ。——飯場できらないやつはいなかったか？——いないよ。おれはうそをついた。これ以上ややこしくなるのはご免だった。やつの説教を再発させたくはない。おれにきらいなやつがいた。茶色のパーマの男。長い髪で、ジョン・レノンそっくりのやつが。くそ狭い銀行支店、たしか三菱だったとおもう。そこではじめて一緒になった。気性の荒いやつで、おれを追い払いたくてたまらないのだ。どけだの、うせろはあたりまえ。でも、ちがう現場でのことだ。無言でやつのいうことに従ってたら、ひどく困ったつらで「頼むから返事してくださいよお」——弱い声をだした。——明日は早いんだ、もう寝ろ。

やつは灯りを消した。肛門が痛みだした。やつは眠ってる。おれはまたしても急性胃腸炎にやられた。便所で嘔吐し、いきんでもいきんでも腹はおさまらず、夜通し便所にいた。肛門がただれるように温く、それはきつと紫をしていたにちがいない。逃げだすこともならず、紫色、それだけがあつた。朝、ホテルをでる。具合はまだわるい。やつもまだ不機嫌そうだ。——これ、おまえが処分しろ。おれの裸を撮ったカメラだった。やつはやくざでもちんぴらでもなく、ただのおかまやろうかも知れない。その鞆、ロッカーに入れろよ。まるで家出してきましたっていつてるようにみえる。

「でも」——おれはためらった。——でも、じゃねえよ。

「ロッカーの金あるか？」——金はない。

*

やつは朝餉を喰いに蕎麦屋に入った。おれは自由になったというわけだ。でもやつの裏切りは淋しかった。とりあえず駅の商店や古本屋を見てまわった。飯島耕一の『アメリカ』という救いようもなく、つまらない詩集があつた。そのあと、も

しものときをおもって交番へいった。とんでもないでぶの警官がいた。不機嫌な顔して立ってた。女房や子供に豚呼ばわりされたせいかも知れない。おれは話した。けつの穴と手淫のほかを。

それであな、裸の写真を撮られたんだね？

なんの抵抗もしなかったの？

仕事が入るならと。

カメラは？

返してもらいました。

ちよつと署のほうで、もういちど話してくれるかな？

ふたりしてちかくの警察署へいった。若い刑事は軽装で、半袖のボタンシャツにジーンパンだった。おれは取り調べのせまい室に入れられた。かれは20代らしかった。おれはもういちど説明した。飯場でのこと、やつの素性、仕事のことやなんか。犯された女のような気分だった。恥ずかしく、そしてけつの穴がむずむずする。警官は諭すようにいった。田舎に帰って仕事を探せ。でぶと一緒におもてへでた。

高校はどこ？

有馬高校です。

名門じゃないか。

定時制であることはいわなかった。おれは高架下のルンペンたちに会いにいった。かれらは眠ってた。おれに気づかないふりをしてた。母から金を無心しながら2日、3日を路上で過ごしたあと、夜行バスに乗った。窓をながめ、去っていく町をみる。そのまま夏は終わりにかけてた。

*

家出娘

夏がようやく店頭から失せ、秋がささやかな絵看板になってあらわれたころだ。灰色がすべての、顔のない路次の途中、女の子がじぶんの服を売っていた。それも毎日、犬や猫が食堂へでかけ、ひとのすがたも同じように見えなくなる時間帯に決まって。ぼくがはじめてぶつついたのは雨のあがった木曜の午。往来のないところをぶらついていると、傘を展げた娘が着ている服に値札をつけて立っている。別段気にも留めず、その日は通りすぎた。

翌週、がまんならない朝の光を避け、その路次にいく。かの女はまた立っていた。服は少しずつ売れるのか、初秋といえ、肌寒いかっこうをしていた。大昔のひっぱりや、あばずれならこんなことも平気かも知れない。でもかの女は耳環もせず、髪は黒、青白い肌でかたく口をつぐんでいるのだ。なんだか狂おしくてたまらないものがあつたから声をかけてみる。――なんでそんなことを？ かの女はいう、家出してきたんだと。金がなく、宿もない、梨の木のおもいだけがあるだけよ。

さらに翌週来ればかの女は裸になっていて、ふたりの男が運びあげるところだった。そしてすぐそばの店に連れていき、ショーウィンドウに設置した。そこへ若い女たちがまったく事務的な態度をもってして、かの女を着飾らせ、非人間的ななにかに変えていった。まるで人形なすがたに恥ずかしながらぼくは見惚れしまい、いつかきつと大枚を叩きつけてかの女を

買ってやろうとおもった。あすも職がなく、金もない、梨の木のおもいだけだ。

ひと殺し

*

かれにとっていまましい月曜日の、早い時間というのにもかかわらず、子供が誘拐された。仕事にでられず、さんざあたりを走りまわって、いやな汗をうんとかきながら気も狂いそうになる。だれだってそうなるに決まってる。そうでないというやつがいるのなら、かれはそいつのつらくそのまじったクリームパイを投げてやるだろう。週明けには入荷量が限度を超える。しかも1月だ。手いっぱいというところ、さんざ時間というやつに追いまわされ、ついに通報しようとした矢先だった。犯人がわかった。かれの妻だった女だ。子供の母親だ。かれにとって月曜日はいつもなにかが毀されて、それをもともてしまうもの。

「もしもし、うちの子供の様子がおかしいんです。それでいちど病院へと」——出勤できそうですか？——ええ大丈夫です。午前からむかいますので。すいません。——次からは気をつけてください。

離れたい、別れたいといいだしたのは女のほうだ。家事もやらず、子供に関心も持たない。パートタイムの仕事には執心で、昼も夜も遣い果たし、みてくれのいいやろうを捕まえていった。元ストライカーのスポーツ気狂いと。夜の試合が好みで、そのほか大勢らとやじを飛ばすのをなりよりの快楽としているらしい。かれはそのやろうをいちどだけみたことがある。いつかの月曜日、近所のスーパーマーケットにでかけていったときだった。深夜、終夜営業のその屋でベーコン、卵、香料、ライム、ウオトカをそろえていると、酒の売り場をふたりが立っていた。でもかれはなにもしなかった、——いえなかつ

た。かれにしてみれば、ずっとばかり女のが好きだった。ぜんぶかれが惚れてはじまったまちがい過ぎない。かれにとってはあのばかたれ女が、かれのお姫さまだった。とても大事なものはずだった。かの女はきれいだったし、多くのやつらに抱かれてたことは知ってても赦すことができた。機嫌がわるいとき、かれはどうかかの女を慰めようと手を尽くした。

かの女も少しづつであるが、かれのわるくないところもみてくれた。だのにそれが出産でおかしくなっていた。はじめはたんに産後の体調がよろしくないんだらうっておもってた。でもちがう。とにかくよそよそしい。せっかくの子供にも興味がないみたいだった。どうなってたのかはいまわからない。でもいまじゃどうだっていい。

いいたいのは、かの女にはあきらかに悪意があったってことだ。かれのような安物の労働者を朝からひっかきまわすなんていかれてる。狂ってる。まったく、でたらめでなんの意味があるのかもわからない。どうすりゃいいっておもった。でもとにかく遅刻の連絡をしたあとで、さらに欠勤の連絡を入れた。正后はとくに過ぎていた。ばかげていることだとはわかってる。でもいかなきゃならなかったのだ。あの女のところへ。——いつてどうなるというのか。

もちろんあの女がいかにくそったれかを子供のまえて明かしてさっさと立ち去ることができればいい。かれは詩を書いていた。言い回しには自信があるはずだった。称賛するひとびともいる。でもほとんど女なのがかれには不満だった。男色というのではない、ただそれまで女に受けた屈辱であたまでどうかしている。まるで賛辞を送られても、拍手の仕方がへただといって責めているようなものだ。だれともわかりあえはしない、ひとはひとを遠ざけるためにいる、かれにとって結婚がそういった考えを甦らせた。それまでは少しだけでも通じあえるのがあるだろうという、あやふやさのうちに暮らして来た。だというのに手を触れあったもののためになにもかもが瓦解していく、瓦解している。なにをどうすればいいのかがわからない。子供が連れ去られた。それでもいまはもう顔が冷たくなっていた。通勤経路を大きくはずれ、駅がみえてきた。車を

走らせ、女の家に向かう。私鉄付近のアパートメント。そこへ入っていくまえ、とりあえず知り合いに電話をかけた。

「なあ、これから女に——元妻へ1発かまそうとおもってるんだ——離婚したんだろ？——関係ないじゃないか？——聞いてくれよ、朝っぱからやつは子供を攫いやがった。おかげに仕事に穴だ。——わるいけど、おれは働いてないんだよ。ほかのやつに電話してくれて。——おまえしかいなかったんだよ。——ちょっとしたいやがらせてわけだ？——ところでおまえの女はどうしてる？

「おれのか？ なんの問題もないね——通話をあきらめてゆつくりと扉のまえに来た。なかからいそがしい子供たちの声、かの女が叱る声がしている。若い元妻、そして中年のやろう。3回ノックしてようやく女がでてきた。子供はもちろんかれをみて喜んでくれた。ひと安心してふうだ。もう2年育ててきたのだ。あの女よりもおれのほうが親としてなってるはずだ。肩をいからせてみて、まるでちからの入らないのを覚った。暖房の効いた室で下着みたいになかつこうでかの女がかれを見あげ、ゆつくりとなかに招いた。なにもない起こつてはないのだ、かの女のうちではいつもどおりの1日が歩いていく。かれは居間で腰を降ろすとき、あたりを見渡した。くだらない装飾でいっぱい、ものが溢れ、そこらじゅうに転がっていた。

「なにか用なの？」——なにか用だって？

かの女は長椅子にだらしなくなって、かれのほうはみない。子供は、娘はお気に入りのおもちゃをかれに教えてあげる。少女のかたちをした人形、その笑みがとても白々しいものに映り、声がつまる、舌がとても渴く。どういう意味だ？——その通りの意味よ、あなたばかなの？——ながいあいだなにもいえなかった。どうにかして舌や歯を震わせてると娘がかれの胸に顔を埋め、それでやつといえた。

「誘拐は犯罪だ——」——じぶんの子供を連れていってなにが犯罪よ？——娘の手がかれの肩を掴んだ。まだまだ、なにもはじまつてはいないというのに対話は、もう終わりかけている。かれは抗おうとして、

「ふざけやがって、聞け」——うまいぐあいに相手の悪意を指摘しようとした。なんども車のなかでかつこのいい科白を練習していた。直前にいったコンビエンス・ストアでも店員相手にだって、空想のなか、なにかことばでやつつける練習をしていたのだ。でも実際にむかいあったらなにもいえなかった。まえとおなじようにかの女をお姫さま扱いしてるじぶんがいる。

いきなり連れていかれたら、こっちだって困まるじゃないか。

でもお母さまには伝えてあるわ。

うそはやめろ、あけっぱなしだった、裏口が。

それはそっちの問題。

仕事さぼってまでここに來たんだよ。

それもそっちの問題。

お願いだ、少しはおれのことと考えて欲しい。

それもそっちの問題。

「卵を突き落とすようなまねはやめてくれ」——なにそれ？——ハンプティ・ダンプティ、卵男。どういう意味？——だからマザーグースは好きじゃないんだ。——わたしことはどうなの？——わからない。——まだあたしに気があるの？——わからないよ——わたしはあんたのその、文学者きどりがきらい、いまもそれでむかむかしてるの、もう終わったのを蒸し返さないでくれる？ ねえ？ 聞えてる？ なら答えて！ あんたはいつつも黙ってるばかり、ほかのひとからいわれなきや動けないもしない、できそこないのあほ！ それでぬけぬけと好きだとか愛してるとかいってて恥ずかしいとおもわないの？ コウガンムチってあんたみたいなやつのことをいうってわかった。少なくともそれだけはよくわかった、はつきりと。ね

え、知ってる？ 塵は塵箱に入れるの。お解り？ ねえ、ねえって！ ちゃんと喋ってよ！

科白につまった役者みたいに、その場に立ったまま、かれはおもった。こいつには勝てないんだ。まったく、あんなくそつたれだというのに。ぴっちりとした服がそる。長い脚にも。なんでこんな気分になっちゃうんだ？ なにもいえずに立ちつくしてると、かの女が微笑んだ。ずっとまえ、婚前の日のようだった。おれはまだ惚れてるのか？——けっきよくみてくれが好きだけだったんだ。ほかにはなにもないのに愛していると勘ちがいしていたのだ。

そのとき、男の声がした。巨きくて荒っぽい。

「いい加減にしてくれ、又ケサクども。時計みてみろよ、ばかたれ、おれの室だぞ！」——寝室からやろうはやってきた。身の丈のある、ちょうどパンサー戦車みたいなからだをしてる。12ヤードを3秒で飛び越えそうな足が、胴体部分から生えてた。蹴られでもしたらどうなってしまうだろう。壁といっしょに再婚するはめか、テーブルのうえで散乱か、ともかくやっつけるなんて無理だ。かれには時計をみるしかない。

「いま12時35分です」——声がでた。女が笑う。男は笑わない、長椅子にかけ、珈琲を呑みはじめる。ぜったいにこいつとやりあうべきなんだ、倒すべきなんだ、辱めてしまうんだ。かれの中身が回転しながら、——子供を連れて帰る、おれのこととはそれだけだ。——けっきよく逃げを打った。男はテーブルの雑誌入れから紙束をひっこ抜いてうえに投げた。ゴールがひとつ決まった。大きな顔が丘のようにかれのうえにある。

知ってつか？——おまえの血なんか入ってない。

冗談はやめて欲しいですね。困ります。

おれの児だ。わかったか？

ようやく男が笑った。突き刺さって抜けなくなるような声を聴きながら、かれも笑ってみせた。無理くりつくった表情は

痛む。かれは紙を眺め、唇を閉じた。鑑定結果やなんからしい。それがなんだっていう？ まるきり将来を契ってくれるものみたいにそんなものを投げやがって。ゴールはそこなんかじゃないはずだ。だのにますますかれの声はつまり、つまりは古便所だ。フィールドからはずされ、予備隊にも入れない役立たずのやろう。もうどうだっていい、こんな連中と話なんかできやしない、——いや、まだなにかが。「もう帰ってよ」——みえない蠅を払って片腕をあげた。つづまりながらふたりに語りはじめていた。でもそれだっただうにもできやしない。

「でも、考えてもみてくれって。ほんとうのおれの児じゃなくなたって、2年も暮らしてきてる。それじゃ、もうおれの子ってことでいいだろ？ もちろん戸籍にだってそうなってるんだから。なのにどうして？」

正直にいつてもう答えなんか欲しくもなかった。けつくらえだ。もうどうでもよかった。とにかく仕事がある。もういいやつておもった。子供づくりなんて不幸の培養だ。最悪の行いだ。そうルーマニアの狼狂もいつていたっけ。娘はまだかれのそばにいた。なにかいっているが、なにをいつているのかはわからない。人形を戦闘機のようにふりまわし、上昇と下降でぶるぶるしながら朝日の浴みてる。それでも薄昏く、日当たりはあまりよくない。逆光のうちでかれは自身の顔を匿った。たやすいことじゃないか！ すぐにこっからでていけばいい。それでまた品番との決闘やなんかにもどれば、少しくらい癒されるものがあるのかも知れない。

「わたしにとっていま子供が必要な。あなたはそうじゃない。あなたにとってわたしがお嬢さまでも、あなたはただの倉庫作業員よ」——仕事はたしかに必要なだ。——おれみたいな人間はけつきよくだれかに雇われ、命令されてなけりや喰っていけないのだ。わかるだろ？ だれかが使ってくれなけりや、生きていけないんだ。おれにはなんの才能もひらめきもない。神の啓示なんて受けてない。そもそもおれにとっての神なんかいない。神はいたところでつねにどっかの共同体の味方でしかない。おれの生活に機能なんかしてない。頼むからおれから職をとり上げないでくれ、お願いだ。派遣のアルバイ

トで入って、ようやく正雇用になったのだ。照明会社の下請け倉庫。いやな上司。あいつはいつだって他人の陰口ばかりいってるし、つまらないジョークにひとをつき合わせる。どこにでもいるんだ、こういった手合いは。つねにだれかを虚仮にしてないとじぶんを保てないくそったれがだ。たしかにおれは追いつけない。朝っぱからの入庫で、棚づけにまどってる。どこにどの製品があるかなんて把握しきれてない。でもあの倉庫だってでたらめだ。どかどか品は入ってくるのに置く場所はない、ロット確かめて順番そろえるのだってひと苦労じゃないか。残業がばかみたいにつづく。娘にはもう表情がなかった。

「バイバイ」

かれはそのまま家へ帰ってきた。運転が荒い。車庫へとつづく傾斜に自動車を後退させる。勢いがつきすぎた。悲鳴が耳を射る。母が飛びだしてくるなり、大声をあげた。猫を轢いたのだ。まだ息はあった。車から降りて確かめる、はらわたを口から漏らした猫が空をじっと見てた。なんてこった。母が家から飛びだしてきて、タイヤの下にあるものを見つけた。掴みかからんばかりだ。——ちくしょう。

「あんた、猫を殺したのよ！」——なんでちゃんと家のなかにおかないんだよ——うるさい！——あんたは猫殺しのろくでなしだよ。子供を奪われたはらいせにこんなことしなくたっていいじゃないの！——子供は関係ない。——ただの注意不足だよ——なにいつてんのよ、あの児の面倒だってあたしにまかせつきりだったくせに！——あんたはいつもそうよ、被害者ぶりがうまいだけの息子よ！」

なにも言い返せない。かの女はまちがってない。車庫に隠しておいた酒壺をとってひきかえすと、車に乗って走り去った。近所の連中がみな顔をそろえて死んだ猫について話してる。失せやがれてんだ、くそったれのダニども。猫を殺したって、なんどもなんどもなんども、なんどもだ。——あいつら全員、始末したい。ひとりひとりに似合った塵箱を与えて、なかに

入ってもらって、あとは廃棄場への旅行。——ありきたりの毒を吐いて酒を呑んだ。道はほとんどからっぽだった。対向車も後続車もない。ほとんど見えなくらいのところに先行車のかげがうつすらとしてる。

かれは走り回った。酒を呑みまくった。気がついたときには安全地帯で停まったまま、眠りこけてしまった。こういうとき、警官たちはすばやい。おとなしすぎるかれにとまどいながら、連れ去っていった。身元引受人に母がやってきた。かれの顔を一切見なかった。なにもいうことだっていなかった。ただそのまま家に帰ってきた。とうに仕事は失って、もう月曜日の、過剰な入荷に耐える必要もない。かれは電話をかけてみた。元妻にだ。——お姫さま、聞いてくれ。

「豚箱じゃなかったの？」——もうでたところさ。なかなかいいところだ、おすすめしとく。おれをくそみそにしてくれでありがとうよ。これから女を買いにいくよ。おれ好みの、愛くるしいバイタの女の子を探しにな——いますぐに死ね。——切られてしまった。どうせそんなものだろうとかれはひとりごちた。無免許のまま自動車をだすと、有り金といっしょに走りだした。できるだけ、遠くの辺鄙な場所がよかった。山麓バイパスを越え、燈りの失せた通りをいく。もう7時を過ぎていた。とりあえず車を小売店の駐車場におき、ウイスキーの水割りを買う。

暖めますか？

一瞬ホット・ウイスキーにでもしてくれるのかとおもった。ただのいいまちが이었다。それを呑みながら倉庫街にむかって歩いていった。もうどこも終業していて防犯燈があちこちでまたたいているのがわかるくらいだった。なんだってこんなことになるのだろう。

黝いなかをゆつくりと歩いた。犬のようにつきまとう自身のかげが、かれをよりいっそう不安にさせた。もうなにもない。かげなんかなければいいのにな。道はやがて真っ黒い倉庫街にきてた。ここでひと休みしよう。かれが莚を啜えて、吹きはじめたかぜと、それにつづく塵のなかに眼を細めたときだった。音がした。土囊のくずれるような、ゆるやかで重みのある

やつだ。マッチ箱を握ったまんま、そのほうへむかっていく。わずかな燈しがみえる。フェンスでかこった小さな建屋。その裏口のまえて男の肉体がくずれてた。その隣で立ってる女はうつむけて、そのやろうを見つめてる。かれは一呼吸おいて、莧に火をつける。それでなるたけ静かに歩みを入れた。若い女だ。そんでわるくないおもざし。きれいだとおもった。白くていい服を着てる。でもそれは返り血が散りばめられ、そのまま着てるのはあやうい。つかまっちゃまう。もしかしたらか的女は威嚇のつもりだったのかも知れない。やるつもりもなかったのかも知れない。かれは声をかけた。

「寒いだろ？ 送るよ」

女はかれをみた。いい女だ。かれの望み通りだった。かの女は振り返るなり、そのままかれの咽を切り裂いた。迸る血に驚きながら、路上も世界もないにかもがかれにやさしさを示し、はじめてかれは世界と和解した。

*

からっぽの札入れとからっぽのおしゃべり

*

雑役仕事と金が尽きて、もうしばらくになる。おかしなもので足りないときほどしたくなるものだ。創作や自読、どちらも空想と実感を一致させてゆくという点でよく似ている。台所には甘味料、香辛料、油、肉などなし。あるのはしなびた野菜のいくつかと、わずかな麺類。そしてとうとうあいてしまった靴の孔——そこへ公園のベンチがこちらに近寄ってくる。

おかしなものであまっているときはこういった苦痛について、おそろしく鈍感で、まえにも遭った、経験済みの苦痛をまたしてもやらかしてしまう。反復また反復、おそらく精神医学じゃあ、とつくに名札のついた動きなのだろうが、こちらとしてはどうにもならない。それを知ったところで日雇い事務所から電話がかかってくるのだとか、自作の絵葉書が売れるわけでも詩が売れるわけでもなかった。

それもやがてはいまは昔し。遠近法にしたがって痛みは小さくなり、ちがった現在がふくれあがってゆく。そのひびきを待ちながら、わたしはこれを書く。

なにものかになろうとするものの、魂しいの餓えは、現在のじぶんと自己実現を達したじぶんとあいだに接点を見つけられないことによるものだ。それはつまり、おのれの生涯をあまりに連続したもの、巻物のようなものをたどっていつてい、あるいは展げられていくように捉えてしまい、つねに現実でも夢想のなかでも「劇的」なるものを見逃してしまっているからではないだろうか。

だからこそ書かれる作品もおのずとそれにしたがって、巻物のようなものになる。たとえば実現実の描写に終始してしまうことや、風景を喪った観念と情報の記述にかたまってしまう。こんなことをいうのもわけがある。わたし自身がつねに過去に囚われ、それを連続したものとして捉えていたために不足——なにも為せなかった年月と余剰——した欲望とにふりまわされ、飲酒癖に落ちこみ、可能性を狭めていたからである。さらに痛苦や屈辱の復讐を記号的体験のなかで晴らそうと躍起になっていたからだ。

ほんとうに「人のサイクルは、いくつかの劇的エポックを核として生まれかわってゆく、不連続の複数の人生の集積である（寺山修司『アメリカ地獄めぐり』1971）」ならば、かつて教室で味わった疎外も、社会での孤立も飯場や病院や旅役者などを介した放浪も、すべてはまたべつの人生たちである。「去りゆく一切」がほんとうに「比喩」であるなら、過古という他国には今後いっさい、渡航しなければよいのだ。それをわたしは反省という名札にすりかえて密航したうえ、おのれを苛み、他人をうらんできてしまっていた。だから森忠明の指摘するように書くものにもおこないにも品性が失われたのである。——話をすこしもどそう、「だから書かれる作品もおのずとしたがって巻物のようなものになる。たとえば実現実の描写に終始してしまうことや、風景を喪った観念と情報の記述にかたまってしまう」。

インターネット上の詩人きどりの作品と、詩誌における詩人きどりの作品を比較してみるとよくわかるかも知れない。前者の多くは、過古と心情という情報によって書かれ、後者は観念と知識という情報によって書かれているようにわたしにはみえる。かれらはおもいうに孤立した密告者たちの横1列の集まりだ。だがそのネタを引き受けるものはほとんどいないのだ。そのなかでやってる、小さな旗振り合戦ときたら、なんとむなしいことか。生前、吉本隆明の発言でたったひとつうなづけるのは「最近の詩人の作品には風景がない」ということばだ。しかし最近とはいわず、ここ数十年はそれでまわしているようなさわりがある。青森県六ヶ所村について歌いあげるHもアメリカ人夫妻と夕食をとにしたというNも、完全にあちら

がわをいつてるYにしろ、ブログで充足ぶりを語ってるKにしたって、あるのは密告だけだ。おなじように若いやつらも密告者ぞろいだ。かれらはそろってあたまがよすぎる。なにもかれら個人のことをわたしはいつてるのではない。かれらのものをみるにつけ、文章技法に問題がないということのほかに誉めようがないし、憶えてもいられず、ましてや強く揺さぶりを起したり、ひっぱたいたり、撲りつけてもこななければ、なにものかを焚きつけもせず、やさしくささやいてもくれない。糞づまってるんだ。つまることは。

おなじことは政治についても社会問題についてもいえる。ひとの見える場所で鼻をほじってるわたしにもひどく露骨に映る。なにもにおいてもつねに必要なのは想像力だ。しかしそれにしろ、喰わしていくのは容易ではないから、大多数のひとびとは想像力を他人に預けることで日日のわずらわしさをすこしばかり、小銭ほどにやわらげているが、その結果がどこにむかうかについてとても無関心におもえる。べつにだれかをばかにしようってわけではない。じぶんだってそのなかのひとりに過ぎないという話した。そのいっぽうで現実はずねに現実だ。世を忍ぶ仮の——などいうものはない。あたらしい仕事をまわしてもらえないのも、いまポケットに数円しかないのも、作品が売れないのも、世間では底辺にすることも見過ごしてはならない。わたしの現実だからだ。現実にはばかり縛られるのは苦痛を伴う。しかし夢想や観念のうちにいれば、いずれはそれに踏みつけにされるだけにほかならない。

すれちがう他人、遠ざかる風景、近づいてくる物体、それらをも含めて現実とは、そこに生きる人物は構成されている。だから詩のなかでは本来「他人事」などあつてはならない。すべてがじぶんをつくりあげているとおもいこむに至らなければ、ほんとうに詩情することはできないだろう。どこぞのだれかが書いていたが、その通り、わたしはふるい型の書き手である。いまだにポストモダンなるものがわからないうえに、読む本のほとんども四〇年はふるい。しかしわたしの狙いは時代遅れであるということではなく、均一なるものに抗いたいということだ。インテリ諸君にいいたいのは、だれもがポストモダン

以後を生きているわけではないということである。そんなものは一部の階層のやつらにしか通用しない。きみたちはみずからの内的思想地図とそこから吸った体系をあちらこちらでひりだしているだけだ。塵紙すら使わないまんまでだ。わたしは正直くそれを喰わされるのはもうたくさんである。ますます狭まる世界観、情が失せて詩だけが残った塵塚、そのなかについて現れて来る、あたらしい詩人はどんなやろうだろう。

少なくともジョン・ウィリアム・コリントンの、「ある意味で、詩は芸術のなかでも野蛮さを持ち合わせた存在でありつづけるだろう。——いや、そうあるべきだ。感動を与えず、美的センスもない詩は、もはや詩とはいえない（Charles Bukowski and the Savage Surfaces' in Northwest Review, 1963）」ということばに適ったやつを望む。ついでに映像を喚起しない、五感を刺激しない詩というのもごめんだ。

余剰と不足が悪であれば、詩はますますたちのわるいごみくずで、悪臭を放ちつづけるだろう。詩人そのひとが、まがいものか、ほんものかの区別をつけるのはだれなのだろうか。それはいまのところ詩人本人以外にはいない。わたしはなりたいのものだ。死んだ詩人のなかで最高の部類に、——息をしたままで。実のところ、ふるくさい書き手といわれるのがことのほかよろこばしい。最新のぴかぴかしたものは苦手で、居心地がわるいから。

カレンダーが

ひびわれの壁で

笑いながらぼくを見る

はがしてしまえばどんなに楽なことか——モップス「夕暮れ」1972

時間と日は間断なく、わたしを含めひとびとを嘲弄しつづけるだろう。そのおもざしにむかってどれだけの裏切りをやりとおし、既存とはちがう、わたし自身の時間軸によって生き、創作するのかが現在の課題である。情熱と方針のしっかり持つことだ。しっかりと。あとは運をつけること。——そろそろこいつを冷ましに冷蔵庫をあけるとしよう。あともう少しはたえられるはずだから。

*

インターネットと詩人たち

いわば情報社会における人間相互間のスパイである。

寺山修司／地平線の起源について（『ぼくが戦争に行くとき』1969）

小雨の多い頃日、わたしは自身を哀れんでいる。あまりにもその浅い、この27年の妄執と悪夢。なにもできないうちにすべてがすりきれてしまつて、もはや身うごきのとれないところまで来ている。あとすこしで30になるというのにまともなからだもあたまもなく、職までもないときている。そのうえ、この土地——神戸市中央区にはだれも知り合いすらない。もつとも故郷である北区にだつてつながりのある人物はほとんどない。

わたしが正常だったためしはいちどもないが、日雇い、飯場、病院、どや、救貧院、野宿、避難所——そんなところをうろついているあいまにすっかり人間としての最低限のものすら喪つてしまい、もうなにも残つてはいないような触りだ。ようやくアパートメントに居場所を手にしたが、ここまできて正直をいえばつかれてしまった。回復への路次を探そう。

考えるにインターネットは人間の可能性への刺客——同時に人間関係への挑戦状であつて、その接続の安易さによつておくの創作者をだめにしている。しかも偶然性に乏しく、なにか出会うとか、現実反映させることはむずかしい。広告としての機能はすぐれているが、単純に作品を見せるにはあまりにも余剰にすぎるのだ。

無論、巧く立ち回っているものもいるし、もちろん、これは社会生活から、普遍から脱落してしまったわたしの私見に過ぎないのだが、この際限のないまっしろい暗がりのうちでは、なにもかもが無益に成り果てる。作品のあまたがあまりにも安易にひりだされ、推敲はおろそかになり、他人への無関心と過度な自己愛を、悪意をあぶりだされ、あらわにさせる。せいぜいがおあつらえの獲物を探しだし、諜報するぐらいではないのか。創作者のなかには好事家もおおく、無署名でだれそのの噂話しをしているのをみかけた。

そのようなありさまで現実でのあぶれものは、やはり記号のなかでもあぶれるしかないのである。身をよじるような、顎を砕くようなおもいのうちで意識だけが過敏になっていき、あるものはその果てにおのれをさいなむか、他者に鉋をふるうしか余地がなくなってしまうのだ。やはり現実の定まりをいくらか高めたうえで、少しばかり接するほどがいいらしい。

寺山修司は映画「先生」について述べている。曰く《先生という職業は、いわば情報社会における人間相互間のスパイである》と。先生をインターネットにおきかえても、この一語は成り立つだろう。おなじくそれは《さまざまな知識を報道してくれる〈エクスベリエンス過 去〉の番人であるのに過ぎないのである》。ほんとうはもつとインターネットそのものに敵意を抱くべきなのだ。それは生活から偶然を放逐し、あらゆる伝説やまじないを記録と訂正に変えてしまった。しかし、《ストーリー実際に起こらなかったことも歴史のうちであり》、記録だけではものごとを解き明かすことできないのである。《ストーリー過去》のない、この記号と記録の世界にあつて真に詩情するというのは、現実と交差するというのはいかなることなのか、これに答えをださなにかぎり、ほんとうのインターネット詩人というのは存在し得ないし、ネット上に——詩壇——くたばれ!——は興り得ないだろう。俗臭の発ちこめる室でしかない。

わたしはあまりにもながいあいまにこの記号的空間にすわりつづけた。そのうちで得たものよりは喪ったもののほうがおおい。現実の充足をおろそかにし、生活における人間疎外を増長させたのだ。詩人としての成果といえ、中身の乏しい

検索結果のみである。あとは去年いちどぎり投稿した作品が3流詩誌に載ったくらいだ。原稿料はなし。

わたしはいやしくとも売文屋や絵売りや音楽屋や映像屋になりたかったのであって、無意味な奉仕に仕えたいわけではなかった。しかし、この敗因はインターネットだけでなく、わたし自身の現実に対峙する想像力と行動力の欠如にあったとみていいだろう。けっきょくは踊らされていたといわけだ。このむなしさを克服するにはやはり実際との対決、実感の復古が必要だ。想像力を鍛えなおし、歩き、ひとやものにぶつつくことなのだ。そうでなければわたしは起こらなかった過古によってなぶられつづけるだろう。不在のひびきが聞えてくる。いったいなにが室をあけているのかを考えなければならぬ。対象の見えないうちでものをつづるのはなんともさむぎむしい営為だ。創作者たらしとするものは、すべからく対象を見抜くべきだ。見える場所を見つけるべきなのだ。わたしのような無学歴のあふれものにとっては技術よりも手ざわりを、知性よりは野性をもってして作品をうちだしていききたい。というわけでいまはわたし自身による絵葉書売り歩いてるところである。そのつぎは手製の詩集だ。顔となまえのある世界へでていこう。

それははからずもインターネット時代の、都市におけるロビンソン・クルーソーになることだ。——小雨のうち、いま2杯めの珈琲を啜る。午前10時と13分。ハウリン・ウルフのだみ声を聴きながら。詩人を殺すのはわけないことだ。つまりそのひとのまわりから風景や顔や声を運び去ってしまえばいいのである。そしてすべてを記録^{エクスペリエンス}Ⅱ過 去に変えてしまえばいいのだ。文学はつねにもうひとつの体験であり、現在でなければ読み手にとっても書き手にとってもほんものの栄養にはなりえないだろうとわたしは考えているところだ。

夏の怒濤桶に汲まれてしづかなる——という一句があるようにインターネットはあくまでも海という過古を持った桶水の際限なき集合であり、現実や人間の変転への可能性はごくごく乏しいものなのである。

ひらけ、ゴマ——わたしはでていきたい

スタニラス・ジェジー講師

わたしの気分はこれそのものにいえるだろう。まずはネットを半分殺すとして、ぶつぶつとひとのうわさにせわしない、好事家よりもましなものをあみだす必要があるだろう。また紙媒体の急所を突くすべをあみだすことだ。ともかくこれからなにかが始まろうというのだ。最後にもしもインターネットになんらかの曙光があるとすれば、そこにどれだけの野性を持ち込めるかということだろう。集団や企業によってほぼ直かにいてこまされることが前提となっている、あるいはだれにも読まれないことが決まってる、記号的空間のうちにとれだけ、もうひとつの現実を掴むことが重要な段差として展びていく。

——けれどそいつはほかのやろうがひりだしておくれよ。

わたしはいま、しがない絵葉書売りに過ぎない。ふるいアパートメントの階段がしつとりびていき、その半ばへ腰をおろすとき、はじめに見るのはわたしの足先だろうか、それとも鉄柵よりながれこむ光りだろうか。

小説のあいまに

名も知らない少女に

秋も深まりをみせている。いまだ蚊の残党をみることもあるが、いなくなってきたことはたしかだった。鈴虫がようやく現れ、おもてにかすかな歌を供す。わたしはそれに耳を傾けてみた——こんなふうにはたまにはきれいな書きかたをしてみる。わたしはきれいなところのもち主ではない。穢らわしい、うすよごれたもののひとりに数えられる。あるひとによくいわれたものだ、あんたは酒でだめになった、下品になったと。しかしそれはちがう。誤解だ。公園で寝たり、イエローハットのごみ置き場で寝たり、吞まず喰わずで飯場をめざすようなことが、ものすごくみじめでくだらないことが、多すぎたためだ。それにどうもわたしは幼児体験から脱出できないでいるらしい。というのもわたしはすべてのものごとに晩稲なまぬけもので、しょっちゅう学窓たちの標的にされ、くそ桶にされ、悪意の放出先になっていたから、いつかじぶんが強くなって、やりかえしてやりたいという妄執にこの齢になっても濡れているのだ。みじめなものである。

避難所はそろそろいっぱいになる。浮浪者の数が統計200人という、ここ兵庫県でさえ、せまい施設がひとつきりだ。その名も更生自立相談所。だがそこでは更生の手助けも自立の支援もそれらについての相談もしてはくれない。ただ1晩泊めてくれるだけだ。ましなところとはいえば、毛布がしょんべん臭くなく、寝台の出来もまあまあで、8時まで眠れ、食パンをくれるところだ。そこは大阪のとちがうだ。わたしはろくでもない行動ばかりとって、この数年ろくに書くことをしなかつ

たし、本も読んでことなかった。ただたまにちょっとした詩を書きつづり、インターネット上の暗闇に投げ込んできただけだ。金がなくて詩誌に送れなかった。いまも。

よし、うすよくれたものを書こう。地震があったとき、わたしは天下茶屋の天牛堺書店で古本をみていた。そこにはけっこう掘り出しものがある。みているとふいにからだに定まりがなくなり、重く、ゆっくりとしたゆさぶりがつつみこんだ。わたしは病気に罹ったのかと思った。なにか脳にでっかい危険が起きたのかと思った。次第に周囲のひとびとの顔から、これは自分だけのことではないとわかった。それから酒害教室に出向いた。まあ、地震のことなどどうでもいい。おれには関係ない。あまりに遠い出来事だ。

それからしばらく経ったある日、本屋でわたしは現代詩手帖をみた。買ったことは過古に2回のみである。後悔の種だ。震災の特集を組んでいた。でかでかと。以前にもかれらは四川大地震の特集を組んでいた。ふだんは詩の先端をきどり、決して情緒には動かされないぞときどっているひとびとが、人間味の無い、しかし濡れた書きものを披露していた。おそまつなかぎりである。かれらは災害のときぐらいいしか、社会についてしゃしゃりでてくることができないのだ。この高価な雑誌を毎月、万引きもせずに手に入れている人間がどれくらいいるのだろうか。どうせならばおなじ棚においてあるミステリ・マガジンを買って、新訳の短篇を読んだほうが栄養になるのではないか？ そう思わずにはいられない。まあ、こんなものごとも時間の浪費だ。するとしばらく経って今度は佐々木幹郎が中原中也の詩を引き合いにだして、災害ネタをやりだした。中也の詩に復興への福音が聞えたんだとさ。笑えない旗振り役だ。

べつにわたしは情緒や感傷や精神の慰撫が根絶されるべきものだといわない。実際に被害に遭っている市井のひとびとがなにものかに救いを求めるのをわるいことだというつもりもない。しかし詩人や文化人と称する、数々の名のある山師の皆さまがたが、特定の出来事を種にして自分の露出に利用したり、また状況を歪めようとしているのはいただけない。情緒に

よって塗抹してしまうのは見るに堪えない。

被災者たちの個人的な精神的活動は許されるべきだが、まだほとんどなにも片づいていないうちにプロに属する作家たちが、いたずらに言の葉を遊び、情緒に酔っていて、しかもそれで金を得ている。もの書く人間なら、こんなときこそ醒めているべきだろう。醒めて歌え。甘いロンドを奏でるなら、少なくともあと2年は口を噤むべきだ。しかしああいった手合いはどれもこれも黙っている方法がわからないのだ。詩情以外のことにはほとんど盲しいているからだ。おれはかれらのものをもともと読まない。かれらはあほであるが、それはおれがまた種類のちがったあほに過ぎないということだ。

地震は起きた。それはしかたがない。自然現象というものだ。くそがでるのと変わりはない。問題はそいつにひとびとがどう動くか、その1点に限られている。それにじっくり眼を凝らすことだ。でもそれはおれの役目ではない。当然ながらおれは作家ではないし、ある筋の情報によれば人間ですらないという。おお、神々よ！——楽しいことはいろいろある。道端にも、路地裏にも、公園の横になれない長椅子にも、落ちている新聞にも、拾った腐りかけの果物にも、脂で汚れた老人たちの指にも、おれをつけ狙うおかま野郎どものうしろ姿にも。

とにかくおれは小説を書こう。詩だけしか書かない人間はほっておく。おれは人間や風景を感じさせるものを読みたい。甘ったるい、情緒に濡れたものも問題だが、わざわざ高い金を払って、プログラムやスク립トが産み出したような作文を読まされるのはうんざりである。おれはなにに対しても怒ってなどいない。ただうんざりだ。現代詩手帖に掲載された作品（投稿欄も含めて）を眺めると、ある光景が浮かんでくる。そのうち現代詩生成のフリーソフトが現れて、かれらの書いたものを軽々と追い抜く光景がだ。きつと数々のくだらない賞だつて総なめだ。

*

以前、つまらないテレビジョンに女の詩人がでていた。ふたりもだ。ある夜のおそい時間、いっぽうは「明日の視点」に、もういっぽうは「朝生」という一種のプロレス番組にだ。Hは台湾の詩人について語り、M（詩人兼社会学者だとか）はなんだかはつきりしないことをいっていた。どちらの女詩人もなまえこそふざけているが、あとは普通だった。なにかおかしい挙動にでたり、突然歌いだすとか、未来を予言するとか、視聴者をゆびさし、おまえを****にしてやるともいわなかったし、カメラをぶちこわしたり、プログラム・プランナーを批判したりもしなかった。詩人でなくともいえることしかいわなかった。つまらない女どもだ。かの女たちはいったい、そのふざけきったなまえでなにを主張し、ひとにどういった態度をとってもらいたいのだろう。意味不明だ。おそらく退屈なことのほかにできることがないのだ。おのれが先鋭だと、芸術家だと勘違いした女の姿はまことに見苦しい。30ちかいルンペンで、2ヶ月もおなじ下着を履いているおれからしても、それはまことに哀れというほかはない。だが詩壇とかいう、いまひとつその存在がはつきりしない、顔の見えないものからすれば、このおれこそ無教養のふざけた人間なのだ。どこにも属していない人間はなにもいう権利などない。おれは属するというのを小学校であきらめてしまった男だった。おれには仲間がいない。恋人がいない。こころのつながった相手というのはいない。べつに愛や恋は欲しくない。欲しいのはいくばくかの金と冷静さだけである。

えーっと、なんの話しだっけ？——そうつまり、つまらない有名詩人についてだ！——おれは詩人をあたらしい道化役や活動家と考えてはいない。ただ少なくとも、かの女らの話しにはかの女らの固有のスタイルは微塵もなかった。これだけはつきり記憶している。もう何ヶ月もまえの話である。あまり突っ込まないで欲しい。ひとつっておきたいのはかの女たちの再就職先である。役所がお勧めだ。生活保護課のケース・ワーカーになって、おれのようなルンペンを追い払うのがお似合いだ。一考することだ、黙って。

こんなことを書いていいのだろうか？——だめに決まってる。このありさまではどこも引き受けてはくれない。小説を書くための柔軟体操にと思ったが、いささか楽しみすぎた。これでは執拗に臀部をつつく死を払いのけることはできそうになり。おれ自身のことを書くとするべきのう、拾った蜜柑を喰いながら歩いていたら、女学生に出くわした。なかなかいい娘だった。おれが同級生なら教室で悶絶しながら、ちら見しているだろう。声をかけてきたから、なるべく陽気に応えてやった。へらへらした笑いが癪にさわるが、それ以外はなんともない。わたしはかの女が差し出した箱を受け取った。

「くれるのか？」——はい、どうぞ。使ってください。

おれはなんだかわからずに礼をいった。かの女は小走りに駆けていき、友人の群れの溶けこんでいった。夕日の差しかった上り坂である。おれは避難所をめざしながら、ゆっくりとその箱をひらいた。なかに入っていたのはあつあつの下着だった。惜しむらしくはそれにうんこがかかっていたことだ。おれは逡巡した。こいつを洗って使おうかと。もちろん、自洗である。しかしあまりに臭すぎた。おれはあきらめてちかくにある学校の、郵便受けに入れた。まったくあの娘は官能と悪意の同居した、すばらしい娘だった。たいていの女には後者しか存在しない。欲しい。おれはいささかの身ぶるいを憶えながら、仮のねぐらへ入っていった。

老人たちが娯楽番組を観ていた。お笑い芸人と称する中年男たちがわめきちらしていた。詩人は思った。どうしてかれらはいちように小汚くて、いちように格好つけていて、いちようにつまらないだろうかと。することなすこと、発想の根本が一緒だ。鞆をあけてセルビーの『ブルックリン最終出口』をだした。おもしろい本だ。しかし文章がくどい。冗長に感じる。読んでいてすぐに疲れてきた。まったくおれは熱意というものが欠如している。

あすはどうなるのだろうか。もう2、3日生きられるだろうか。そろそろ飯場に逃げこもうか。いずれにしたところで袋小路は変わらない。とりあえず、この文章をいろんなところに送りまくろう。それにだれかが腹を立ててくれたら最高だ。

窓のそとを車が通る。ここは半分地下になっているから、タイヤのあたりしか見えない。白い壁に白い床。おれは便所のほうを眺めた。そこらへんは薄暗がりになっている。まだ若い男がひとり立っていて、床にそつと小便を始める。

おやすみ。

*

おもしろおかしく生きて死にたい

地のレベル——犬の視点——から世界を見ると、どのように見えるのだろう。

イアン・ジェフリー『写真の読み方』

モリエールはおもしろくない。おかしくもない。少なくともおれをふるいたたせてはくれないから7階の窓から放った。『いやいやながら医者にされ』だ。あるいはシェリダンの『悪口学校』を。地上の小屋のうえをおれの投げた塵芥がみえる。チーズの包み、サーデインの罐、領収書、よごれきった下着、嘔きだしたもろもろたち。仕事はない。なにもなかった。やることといえば近所のどでかいスーパーマーケットで喰うものをかっぱらいにいくことだった。午に眼を醒ますと、いつも弁当はない。ひどい飯場だ。入って1ヶ月もまるまる食い扶ちをまわしてもらえない。新聞の求人があまりあてにならないことはわかってる。大阪駅前ビルの地下でそれをおもった。「アスホール・パワー」の人足寄場から多くのひとがでていった。ここに仕事なんかねえと。でもおれはしがみついていた。これ以上どっかにいくのに疲れてたし、金がなかったからだ。軽作業の名目で門真まで連れてかれた。せまい室のなかにマットレスのない寝台、テレビがある。扉には覗き窓があった。おれはいつびきの、どでかい蠅を見つけた。そっと手をのばした。しかしそいつは地獄よりもすばやかだった。まるきりつい

てない。おれは廊下へでて、その出口に立つ。頭上の扇風機がかすかにかぜを起してた、夏のさかりにはどうにもならない。

ああ、しかたない。また店へいって商品を見てこようか？ きょうあたりはジンが呑みたい。さてどこを狙おうか。

夕暮れ、食堂へ降りた。事務所にはおれの仕事が来てた。トラックの運転、それも相野まで。面接でいったはずだ。運転は不得意だと。ちゃんな耳輪をした男がほかにやれるのがないといった。なんの保険もなしに他人の車を乗るほどおれもばかじゃない。朝になって断りにいった。それが恨みを買った。まったく仕事をもらえなくなった。おれは服を着て夏帽をかぶり、階下へと降りた。セメントづくりの小屋で老人夫がシャワーを浴びてる。窓ガラスもないからはつきりみえた。

あんたも仕事なしかい？

ええ、入ってひと月もね。

おれは3回だ。これじゃあ、どうにもならん。

そうですね。まったく。

とんこしようかとおもってるよ。

いちばんちかいショッピング・モールの防犯はずるぬけだった。おれは盗むことに馴れすぎてしまった。監視カメラの死角を見つけ、棚の配列に注意する。そして手に取ったものを上着で隠した。気分に変わりはない。まずはスパゲッティをやって、障害者用のひろく清潔な便所で喰う。つぎに酒屋へいってミニチュア壺を3本はいただく。そしてしまいにチーズを1袋。仕上げに本屋でブレヒトは「三文オペラ」をすつとばした。しかし、まだ午過ぎだ。おれはいったん引揚げる。そうしてオペラを嘗めながら夜を待つ。とてもじゃないが、仕事のある連中といっしょに飯を喰う気にはなれなかった。わいわいがやがや、どこにだってそんなやからがいる。盗賊が乞食の娘とねんごろになったとき、おれは階下へ降り、事務所を覗く。どの釘にもおれのなまえはぶらさがってない。くそ色の髪をした、管理人は、ちゃんな耳環をゆらしてこちらをみた。

こちらもやつをみた。

すみません、明日ありません。

ちびのことばに顎で応え、おれは狩りへでた。まずはいささか遠いスーパーマーケットで酒の肴を仕入れ、パンと鯨のベークンを懷にし、ふたたびモールへ。酒のコーナーで唐辛子入りのジンを手にして寮に帰った。むしあつい夜だ。かつばらいと読書にあけてるうちに1ヶ月は過ぎて、寮費の無料期間がなくなった。1日3千500円がおれにのしかかる、おれ用の水牛だ。こいつをどかすには、トンコするか、待つしかない。そんなときだった。ようやく仕事がお目見えしたのは。しかしあまりよいことにはおもえなかった。寮の無料期間がきりぎりしに迫ったころ、ガラス工場の仕事が入った。機械の移転前に、手作業で材料を運ぶ。室内は暑く、休憩は20分ごとだ。分煙用の仕切りがある小屋のなかで休んだ。休憩室のテレビジョンは子殺しを報せてた。またか、とだれかがいった。おれにも憶えがある。公園で母親にやられたのがあったつけ。今度は雨のなかで少女が死んでたという。雨のなかのひと殺し、——レイモンド・チャンドラー。どうだっていい。

どうせ、また母親がやったんだろ。

ああ、そうに決まってる。

女ってやつは歯止めがきかねえんだよ、まったく。

しかし雨のなかったのは、あまりにも——。

水を呑みながら始業を待つ。飲みものを買う金もなかった。拾いものの、ペットボトルに水道水とくる。まあ、どうだっていい。とにかくガラス工場は機械を入れ替えるあいま、手作業で材料を運ぶやつらを欲してた。うなりながら熾き火を秘めた釜のまえに、天井からダクトが降りてる。材料のガラス片はそこから落ちてきた。はじめは少しづつだったのが、しだいに大きな流れになった。スコップではどうにもならなくなって、ベルトコンベアがおれたちの手で運び込まれた。流れて

くる材料をスコップでさらに奥へと掻きだす。高熱のなか、ひとつきりの幸運は20分ごとの交代だった。おれはすぐにばててた。きらめくくず山を見つめ、呼吸を整えようとする。そのとき、老人が怒鳴る。――おまえも動けよ！――休憩室で声をかけられた。――きみ、いくつ？――24です。――若いってことがなにか罪悪のようにおもえた。男の顔は赤黒く、疣があつた。ちいさな疣だ。

ほかに仕事なんていくらでもあるだろうに。

ないですよ、宿なしじゃ。

夢とかないの？

詩とか短歌とかでなんとかやっていきたいですね。

小説は書かないのか？

ながい文章は苦手なんですよ、書きたいのはやまやまですが。

その日のことが終わると、下着まで濡れてた。びたびたと皮膚にくっつき、歩きづらい。われわれのワゴンの隣には、ラリー仕様のミニ・クーパーが深緑して坐つてた。これみよがしの態度。女のいやみのようなやつだ。おれは水を呑み、べつの男が喋るのを聞いた。車は南にむかって走る。――おれがきみの齢のころはあぶくでな、どこにいても大金で雇つてくれた。面接で「おまえ、いくら欲しいか？」訊かれて、「50万！」っていったら、むこうは「雇つてやる！」――そんな調子で毎晩、高級な酒場にいつて味もわからねえたかい酒を呑んだ。家も2件建てたし、息子もできた。なにやってもうまくいく、いい時代だったな。かれはまるで今日の一切がないかのように話しつづけた。かれの家族がいまどうなってるのか、どうやって飯場に落ちたのかがおれのあたまに残っただけだ。

きみはまだ若いんだ、

パチンコ屋の棲みこみになればいい。

おれはほほ笑みで応え、眼をそらした。これ以上、我慢ならなかった。寮にもどるとふたたび狩りにでた。5つもまわって曇いっぽんと、パン1個しか得られなかった。そろそろ潮時らしい。おれは食堂にいつてカレーライスを喰った。だれかが見てるような気がした。事務所へいつておれは前払いのぶんをとりにつた。2千が手に入るはずだった。

まだ1回目の出勤ですよね？

ええ、そうです。

それなら前払いは千円になります。

5回以上出勤すれば2千円だせますよ。

こんなわけで逃げだす金も得ることはできなかった。翌日もおなじところに派遣されたが、それきりだ。まだ何日もその仕事はあったが、おれだけはすされた。営業曰く苦情が来てるという。いくら力を使ったところで、ないものはどうしようもないことに気づいた。なんとかあたまをさげておれはうんと遠くの、廃棄物の処理にあてがわれた。飛び交う蠅たちのなかで塵芥を仕分けるのだ。まずは空き罐だ。とにかく臭かった。くさった液体がそこらじゅうを流れ。おれの顔に飛びかかる。そこへ蠅がおれの口や耳の穴にむかってくる。——さておつぎは家具や靴や買取不可のおもちゃどもだ。材質ごとにつかい箱にわけていく。ウイスキーを見つけた。でもだれかが持てってしまった。とにかくおれはのろくさかった。たった1日、北へむかったただけでお払い箱にされた。仕分けられたのはおれ自身だった。

おれは町へでた。図書館があった。万引き対策の本を見つけた。たしかこんなことが書かれてあったともう。——犯人は世間とはずれた、あるいは汚れた服装をしている、とあった。おれは便所へいつて自身を鏡にみる。靴がそろそろお役ごめんだ。その夜さつそく靴屋にでむいた。手に入った。

昏い室に入り、とがった皮靴を磨きながらおもった。これは生きた気分じゃない。死んだものの気分だと。入寮以来はじめてテレビジョンをつけ、夕べのニュースを眺めた。自殺の話はない。靴屋の話もない。そしておれの明日についての報せもなかった。よい気分ではないが、そうもわるくない。死体もわるかない。おれはズボンを降ろし、シャツを投げた。じっくりとまたぐらをつかみ、おもしろいかべた。むなくそのわるくなるほど照明の効いた室で、まず装飾つきの木椅子がおかれる。2脚だ。いっぽうにおれが坐る。そこへ20歳過ぎの童顔の女が現れる。とにかくばかげた、幼稚なかつこうをしてる。

お帽子つき。少女めかした、そのおもぎしがおれをやさしく蔑む。ふいにかの女の御足がカツとひらめいた。ぬかるみを通ってきたかの女の白い運動靴がおれのまたぐらをしつかりとらえ、おさえつけてる。おれはそのまたたきに茎を温くさせられてしまい、——あとはかの女のされるがまんま、しかし仕返しはたつぷりとくれてやる。2回戦。引き分け。薄洋紙がなくなつた。疲れているときに無理な射精はしてはならない。それを忘れてた。肛門から痛みだして便所へ駆けこんだ。いきんだ。なにもでない。いきんだ。なにもでない。でそうなさわりがある。この症状のなまえを教えてください。24歳、男性、当方無学。だが1時間ほどでそれはやんだ。手加減してくれたんだ、だれかが。

残つた酒をきめ、もういちどかの女と姦りあおうとしたが、勃たなかった。身を横たえて深夜まで眠った。戸を叩く音で起きた。そこに中年が小男が立つてた。おれが黙つてるとやつはささやきはじめた。

きみ、仕事全然ないんだってね？——ええ。

おれら、会社に抗議しようとおもつてんだ。

むだですよ、そんなの。

とにかく数でいきやあいんだ。

そんなのですかね？——そう。労基だつてうまくいきやあ、動くし、金だつて入る。

それでぼくはどうすれば？——いま、会合やってる。とりあえずでて欲しい。

そのまんまおれはついていった。ふたりして階段を降り、4階の室に招かれた。そこでは男が4人、狭いなかで話し合ってた。みな中年のぎらついた男たちだ。そのすべてが憐れなる落伍者なのだ。おれだって？ おれだってもちろんのこと、そのうちかわさ。もういきようがなかった。

かれは？——首長らしいのがおれを指した。連れてきたやろうが早口に説き明し、さっそく話しが始まった。おれはできるだけ、加わらないように、加わってないようにみせた。

すでに追い立てを喰らってるやつもでてきてる。

はやくしないとこつちにまで来ちまう。はやくバックをつけないとな。

おれはほうぼうの非営利に電話して反応を待ってるところだ。

でも待ってるんじゃないにもならねえよ。

あちこちでおなじようなことが起ってるからな、忙しいんだ。

いつそのこと、全員で生活保護受けにいけねえか？

ばかやろう。——いくらそういうのが多い、この土地だろうと、

宿なしは施設をたらいまわしにしておわりだ。

おい、若いのおまえ、なんかいい案はねえか？

おれはくびをふった。ありませんです、だ。

やっぱ無理なんじゃないですかね。ここの全員が事務所や本社にぶつかっていかないかぎりには使えないやつだな。

もつとあたまを遣えよ。

こわいんじゃないのか、おまえは。

おれにはかれらに協力するつもりはなかった。ただ与太を飛ばす、5人の男にでくわしたただけだとおもった。かれらは罵りあい、褒めあいながら時を過ごす。食堂や教室にいる手合いと、ほとんどなにもちがってはなかった。だから午前3時をまわったころ、おれはその場を無理くり退け、じぶんの室にもどった。酒はなかったが、ありがたい孤立だけは健在だった。さつそくメツキー・メツサーの気分で本をひらいた。

そのあとの3日間、おれは会合を断った。ほかの口入れ屋にいつて仕事を求めた。どこもくそつたれな携帯電話を要としてた。そんなもの、持ったこともない。近所にパナソニックの工場があった。どこもくそつたれな携帯電話を要としてた。そんなもの、持ったこともない。しかし面接のことをうっかり営業に話してしまった。

つまりここをでたいということだね？

いいえ、それではどこもやとってはくれないので、

あくまでここにおいて金も貯めて寮費も清算したいのです。

でもきみは苦情がですぎる。

都合よすぎるとは？

しかし生きていくには仕方ないですよ。

でもきみはまだ若い。

ほかにだって当てはあるじゃないか？

ぼくだって、広告に「軽作業」とあったからここに来たんです。

文なしでそとにでたら死んでしまいますよ。

でもこちらだって苦情のする人材は欲しくない。

なら給与、払ってくださいよ。

もう寮費でなくなった。

死にやがれ。アスホール・パワーのばかどもよ。黙っておれは7階にひっこんだ。ふたたび温くなった、またぐらをもみしだき、勃たせようとした。しかしおれの内なる女らは、みなそっぽをむいてた。しかたなく、階下へでると、狩りにでかた。その日は白葡萄酒を呑んだ。贗キャビアもおまけだ。翌日になって営業の男がおれを訪ねた。色黒で髪を逆立てた、眼の鋭いのが、おれを見据えていった。——いま、何人ものひとにいつてまわってる、——退去してくれるひとを。芝居がかった、癪な喋りだった。

でもぼくは文なしですよ。

男は財布をだして千円札をだした。——これはおれのポケットマネーだけだ。おれは受け取ってしまい、おまけにやつのだした、自主退寮者のリストにもなまえを書いた。なんてこった！——その日のうちにでていかなければならない。しばらくして雨が降りだした。おれはまたでかけてウォトカを盗みだした。そしてしたたかに酔ったころ、その声々は聞えはじめた。

裏切りものがある！

おれたちのことをたれこんだやつが！

そいつをつかまえろ！

いきなりにおれの室がひらかれ、中年男が飛び込んできた。——こいつ、酒呑んでる！——営業から金貰いやがって！

かれらはいっきに事務所へとなだれ込み、管理人をどやしつけた。やがて本社の連中が大慌てでやってきて、かれらに金1万円がだされた。おれはただみてるしかなかった。雨はさらに激しくなった。おれはでるしおを喪い、酒を呑んだが、いっこうに酔わせてもらえなかった。しかたなく鞆を手に入れにいった。5千円のがただになった。翌日の朝、月曜日に営業の、ほかの男が室をあけようとした。おれは鍵をかけてた。覗き窓から男が声をだす。——なんでいるんだ！——おれは寝台に横になってそれを眺めた。けっこうな眺望だ。まるい眼の男はわめく。

きのうまでだっていったろうが！

なんでいるんだ？

雨が降ってたんですよ。

そんなの関係ない。

でもあれじゃあ、でられない。

関係ない！

おれは金だつてないんだからな。どうしようもないんだ。

とにかくここをでろよ。

おれは芥葛を冷蔵庫に隠しておもてへでた。1階の階段のうらへ立ってたら、やつは芥袋を持って降りてて来た。

よう、とおれはいった。

どういうつもりなんや、おどれは。

こんなことしやがつて。

怒りたいのは、——とおれはいった。おれのほうだと。

きのうのやつらみたいにながらえと思つてんのか？

貰うんじゃねえ。対価を払えつてんだよ、くそ。

あのな、寮費でおまえのはぜんぶ消えたんや。

おれは芥葛を冷蔵庫に隠しておもてへでた。1階の階段のうらへ立つてたら、やつは芥袋を持って降りて来た。よう、とおれはいった。やつは怒つて携帯電話を握つた。——はよう、いねや！——イネ？——どういう意味だ？——田舎ものめ。「とにかく失せろ、警察呼ぶぞ」——やつが携帯電話に手を展ばした。おれは逃げた。おれに千円をやった、営業にでくわした。やつのつらは涼しげだった。

いまからでるのか？——ええ、そうです。

なんとかなりそうか？

さあ、わかりません。

でも若いんだからな。大丈夫だ。

おれは終始笑顔で答えた。やつはきつとおなじような科白を携えて、また千円で追いたてにいくところなんだろう。けちくさいくそやろうどもだ。そのうち、やつらの本社がみえ、女子社員がでていくのがみえた。なかなかわるくない。おれは声をかけた。——おい！——女は蔑みきつた眼でおれをみた。

おれはさつきまであんたところの飯場にいたんだ。

それがなにか？——なにかだって？——おれは金も貰えずに追いだされたんだぞ！——なるほど。きのうの騒ぎに喰いっぱぐれたひとね。——おれにも1万くれよ。——ばかね、終わったの、ぜんぶ。——でもおれのなかでは終わっちゃいねえんだ。——どうしろつていうの？——いまさらうえに掛け合つてももむだ。あんただって若いんだからすぐに仕事なん

て見つかるって。――宿なしでもか。もう小銭しかないんだ。――あら、そう。――おれは次第に距離をちぢめ、かの女の横になった。――どうしてくれるんだ、おれの人生を。生活を。日常を。

お似合いじゃないの？――あんたのようなひとはどこへいったっておなじ。

流れもののくせに口だけは達者、死ねばいい。

おれはかの女を社屋の脇にある、くらがりに誘い込んだ。急に劣情を催した。いや、欲望に優劣をつけるべきではない。聖なる欲望でかの女に懇願した。

あんたみたいなきれいな、

若い女にくそみにされたい。

実際、かの女はそう若くもなかったし、きれいでもなかった。しかし、そのほか科白はおもいつかなかった。少しばかり喜んだようだった。――だめだって！――こんなところじゃあ。

でもおれはとまらないんだ、お願いだ。

ふたりの顔が火照ってて。勝ったもおなじだ。おれはかの女のストッキングから、かの女の女陰を味わった。いいお味だ。つぎに上半身をまさぐり、胸に顔をうずめる。おれたちは服を皺だらけにしながら息を荒くした。上出来だ！抱き合ってしばらくかの女が顔をそむけた。

はなして。

やっぱりだめ。

その顔はもとどおり、冷たい。ああ、まただめなんだ。

あんたとじゃできない。

かの女の両手がおれを突き飛ばした。うしろには側溝がある。浅い流れを眺めながらおれをそこへ背中から落ちてた。かの女のあざけりが聞える。なにをいつてるのか、ほとんど聞えてこなかった。やがてさいごの笑い声がながくひびき、かの女はいなくなった。汚濁が背中や足へ染む。おれは10分間、そのままにしてた。うごけなくなってたのだ。

日の光りがいまいました。公園の便所にいつてシャツを洗い、ズボンをタオルで拭いた。そして作業服に着替え、夜を待つ。腹のぐあいがわるくなつてた。上腹部が脹れてるようさわりがある。残った金でポカリスエットを買い、呑んだ。なんにもよくならなかった。夜になって、おれは量販店へでむいた。酒は呑めそうになから、ダンボールをもらうことにした。

やや混み気味の列に、空身のまんまくわる。店員のげんな両の眼にさらされながら、おれは順番を待ってた。するとおれの手前の客が店員に突っ込み始めた。対応に問題があるらしい。客は食器片手に相手をどやつける。みんな、怒るのが好きなんだ。ほんとうはどこかでだれかをやつつきたいとおもってる、おれだってそうだ。やがて憎悪が客へとふくらみはじめたとき、助け舟がきた。ボスらしいのがやろうを別室に連れ込んでいった。

おもてのダンボールをひとつ欲しいんですが。

それは購入されたお客さまのためのものでして。

お願いします。どうしてもいまいるんで。

ちょっと聞いてきます。

店員は去って、うしろの列がおれを見つめてる。しばらくしてもどってきた店員は、いちまいかぎりを条件に赦してくれた。さっそくおれは手にいつていちまい、しかしでかそうなやつを撰んだ。公園のベンチに腰をおろす。さいわい仕切りはない。『三文オペラ』をひらく、盗賊は釈放された。物語は終わった。そのつづきは現実のなかで探すでしょう。おれは陸

をひき、作業着をかぶった。

明けてすぐおれはスポニチを買った。求人欄のためだ。ちかくに3軒の飯場を見つけた。そのひとつにむかった。しかし1日でくびになった。事務所へ自己紹介する時間をまちがえてしまった。おれはもうひとつのやつにひっかった。場所はアスホールから、まったくはなれてなかった。おれは水を呑んだ。はらわたが温くてしかたがない。そして息も苦しい。寮夫妻はやさしいひとたちだ。食堂でラーメンを喰いながら話をする。

きみはまだ若いんだ。こんな仕事はさっさとやめたほうがいい。

金ができたらまともな職に就くんた。

そうよ、まだいくらだって可能性はあるわよ。

そのとき、妙な生きものが床を走るのをみた。なんだこれは？ そいつはくそ忙しく走り回ってじぶんの餌場を見つけた。齧歯類の1種らしい。おれはむかつきを覚え、寮母にいった。――すみません、胃薬ありませんか？

散薬をもらい、すぐに流し込む。まだ夕方だったが、横になりになった。よくないことばかりだ。はらわたが温い。水を机においた。テレビジョンは病院から払い下げられたもので作りが変わってた。画面が異様に小さく、音を聞くのに手間がかかる。しばらくして眠ることができた。しかし夜中になってそれはまわってきた。痛みだ。鳩尾と背中がいつぱんに痛み、締めあげられたかのようだ。どっちにからだをむけても痛みはやわらがない。それでどころか、どんどんふくれていった。慌てておれはノートを破くと、簡単な遺書を書いた。このままでは死ぬとおもったのだ。――《父、母へ、葬式はやらないでください。書きものはみな棄ててください》。

死を待つにしても苦しみは過大すぎた。おれは階下へ降り、おもてへでる。病院をさがしはじめた。幸いにしてちかくそれを見つけた。夜間救急窓口、そいつが開くのを待った。老婦人がふたり、おれをけげんにみた。おれは見返さなかった。

ただなにもかもが過ぎ去って消えてしまえることのみが望みのように感じられてしかたがない。何時分かが過ぎて、ようやくなかへ通された。おれは免許証をだし、文なしと告げた。ロビーには灯りがなかった。おれの顔には脂汗がしたたり、坐っているのもむずかしかった。

あの子、ぜったい盲腸よ。――あんなに脂汗流して。

老婦人たちがささやく。さらに1時間待つてようやくおれの診察になった。血やレントゲンなんかをこなしてついた病名は、急性脾臓炎といった。まるで始めて聞く代物だ。1ヶ月の絶飲絶食。すぐに寝台が用意され、点滴がはじまった。痛み止めがよく効いた。ふたたび眠りに落ち、明日がやってきた。痛みは2日めがいちばんひどい。さらに機械へとつながれ、全身コードだらけになった。夜、意識が混濁するなか、父がやってきた。そとづらだけはいい男だ。

遺書があったって聞いているから、どうせ妙な薬でも呑んだんでしよう。

勝手なことをいいやがって。浮浪者として入ればよかった。7、8日経って一般病棟に移された。痛みはまだひどい。しかし1日じゅう、なんども痛み止めを求めるほどではない。コードもはずされて身軽になったおれは毎日、障碍用の、ひろくてきれいな便所で、灯りもつけないまんまみずからをなぐさめた。喰ってなくともでるものはでたし、あいかわらず空想のなかの女らはいかしてた。つらいのは空腹だった。おれは病室にもどると、すぐに料理を喰い、女らと語らう光景を思う浮かべた。1ヶ月経って外出がゆるされるようになった。おれは本を手に入れ、読み始めた。『燃えつきた地図』はいまひとつだ。『ライ麦パンのうえのハム』はまあまあだ。『ありきたりの狂気の物語』は最高だ。ある夜、医者がおれを呼びだした。若い看護婦をひきつれて、別室で横にならせた。

これから股の毛を剃ろうとおもう。

医者も若かった。こんなことしたくないだろう？

ズボンとパンツを降ろして欲しいんだ。

ここですか？

おれは看護婦をみた。両方を降ろしておれの陰部があらわになった。看護婦が陰毛の1部をそぎ、そこへ点滴針を突き刺した。——これで1日に何度も刺したりせずに済むだろう。——陰部、そして仮性包茎をみられた恥ずかしさで便所に駆けこんだ。あたらしいネタで2発抜いた。もう退院だということになって飯が来るようになった。質素なものだった。米と汁と漬物。それでもおれには豪勢だった。毎日の楽しみが飯だけになった。ある夜、またしても親父がやってきた。

「おまえ、これからどうするつもりなんだ？」——どうって？——この入院費だ！——払えないよ、またべつのところにいつて稼ぐまでだ。——おまえなんか、いったいどこが使うんだ？——求人欄をみて、ぶつつくだけさ。——それでどうやって生きていくんだ？——姉は大学院までいってIBMだっていうのにおまえには野心がないんだ。——だからどこにいったって首になる！

黙ってやつが叫び、なじるのを聞いてた。おれは病院からどう逃げだすかを考えてた。また数日経って、ようやくまたぐらの点滴がはずされた。おれは荷物を整理しだした。飯場へもいっておいてきぼりの鞆をとりに行った。——若いのに死のうだとおもうな！——そう叱られた。そしてまたモールで酒をくすねた。もうなんともなかった。翌日、置手紙を書いて病院をでた。なけなしの金で電車に乗り、中心街をめざした。そこではじめて盗みがばれてしまった。おれは監視員の中年女にひきずりこまれ、警官どもを呼ばれた。

この鯨泥棒め！

警官たちは威嚇したが、それは連行されず終わった。かれらはおれをおきざりにした。鯨を買い取ったからだ。おれは商店街の入口に腰を据え、眠りに入った。作業着入りの手提げ鞆を枕に、本やなんかの入った鞆をそのままにして。夜明けま

えに起きると鞆はなかった。おれはどっかに落ちてないか、棄てられてないかを探った。どこにもない。バーボンを手に入れ、そいつを呑んだ。朝がやってきた。またしても求人めくった。ひとつ、よさそうなのが あった。公衆電話にかけ、手配師を呼ぶ。公衆電話を切る。金がほんとうになくなった。

ほんとうに若いな。——こういう仕事は？ 経験は？——まえにアシスト・パワーという飯場にいましてね。——おれんともその系列だよ。営業とでもけんかしたのかい？——ええ、そうです。そんなところです。——どうやら大阪で軽作業を仕切ってるのはアシスト・パワーらしかった。なまえはちがってどれもがやつらの系列ということだ。これじゃあ、どうにもならない。——いちど訊いてみるよ。男は電話をかけ、おれのことを照会しはじめた。しずまりはすぐにやんだ。

わるいな、兄ちゃん。——だめだとさ。

たったそれきりで車はでてしまい、おれにはもう頼るものがない。おれは知っていた。それだけだ。世間で通じるひとびとはみな、どちらかの椅子に坐っていて、物事を色分けしたり、なまえをつけたり、指をさしてあざ笑える人種だということだ。セオドアとかいう詩人のいったとおり、おれも《行列をする犬を笑えない》のだ。はじめさを味わい、それを掴みとったものは、どんな犬もどんなきちがいも、それを視とめるのみだ。さもなくば怒ってその腕かいなをふるだけだ。そんなときには上も下も、右も左も、醜美も突き破られる。ひとを虚仮しているやつらには一生、わかりようなどあるまい。歩いているうちに日は天井に来了。おれはどや街にむかって歩いている。そこならいくらだって手配師はいるだろうからだ。とにかく居場所が要る。寝食と職が要る。そうしてなにがしかのもの、あるいはあらかじめ喪われているものを手に、おもしろおかしく生きて死にたい。だれかおれにいつてくれ、まだ間に合うと。もう正后過ぎだ。

みずから書き、みずから滅びるってこと。(Reprise)

万人の共通コードは好悪の感情のみである。好きだ、嫌いだ以上に説得力を持った言葉を私は知らない。とにかくものを伝える以前に不要なコードが多すぎる(『ロッキング・オン』岩見吉朗、1988)

茹で蛙の梅肉ソース和え

懐かしい映画をいくつか観た、『ゼイリヴ』とか『スペース・ヴァンパイア』とか『ロボコップ』だ。そしてわたしはレイザー七〇四の要望で、あたらしくできた、宇宙食のデイスカウト専門店へいった。かの女はそういった喰いものが好きだったし、わたしもおなじだった。どういうわけか、スクラップ寸前のかの女と出会ってもう数年になる。かの女は働かない、かつては殺し屋だった。わたしも働いていない、かつては詩人だった。種族はちがっても無職同志の冷たい友情が芽生えた。毎晩かの女の昔話を聞いてやるのがわたしの日課となっている。わたしは店の棚を端っこから見つめた。冷凍粉碎の飛蝗、ブリーズドライの茹で蛙を買った。あとはハラル食品店で、海老のペーストや、細胞分岐なしのレトルト・マトンやなんかを買った。もちろん梅肉ソースも。いつも通り、大安亭市場で。わたしは最近ずっと自伝的長篇を考えていた。でもなかなか体験と自己を引っ剥がすのは楽じゃない。行為と記述の乖離に呻いてしまう。短篇集と並行しながら、作業中だ。

まずは独白の初稿を書き、次に場所と行為の第2稿を、3つめになにがあるか、という具合だ。きょうはとりあえず、「茹で蛙の梅肉ソース和え」のレシピを以下に紹介するから、みんな美味くつくってくれよな！

*

どうしてこんなありさまになってるんだ、とおもうときがある。わたしは32歳。7月で33になってしまふ。織田作の死んだ齡だ。齡を重ねるということについて、すでにうんざりしているし、けっきょく現象の増減と反復でしかないのではと考える。もちろんその反面、なにかもよくなっているという実感も、確かにある。作品が金に変わり、ひとがわたしを正直に見えくれるようになった。これはいままでの人生ではなかったことだ。いつでも誤解と疎外と偏見が蔓り、身うごきさえとれなかったのだから。

出版局をようやく本物にできた。3年もかかってだ。フリーマガジンだってそうだ、おなじぐらいかかっている。ひとを集めるにはなによりも、ひとに好かれなければならなかった。わたしを囲む問題だってそうだ。それがなんなのかを識るのに時間がかかった。否、かかり過ぎてしまった。わたし自身の精神障碍に26年、薬物療法を断ち切るのに5年、愛着障碍であると理解し、安定を迎えるまでに32年がかかった。躰のことだってそうだ。7歳での台車事故によって、後年は成長すること、腰、首、頭、胸の痛みに苦しめられ、満足に治療も受けられず、ひどい生活を送った。それが癒えるまでやはり、それなりの年月がかかった。

いちばん厄介なのは対人関係、対話能力の問題で、わたしは言語の発達が遅く、話したいことが話せず、誤解や嘲笑の的だった。理解できない化けものだった。わたしにできるのは絵を描くこと、森林を歩くことだけだった。幼少時代の友人な

どひとりもない。親しいひとはだれない。かれらかの女らはわたしをあくまで下位の存在として許容できはしたが、わたしの知性も感情も赦さなかった。ふた親とも関係はない。姉や妹たちもいたが、いまではどこに棲んでいるかもわからない。まさしくわたしは鼻つまみものだった。父からの打擲と過干渉から、母の無関心から遁れ、物理的な居場所を手に入れるのに27年もかかった。

わたしは29のとき、赤十字病院に入院していた。6月。馴染みの急性膵炎でだ。古本で買った恋愛ものを読んでいるとき、好きだった女たちに逢いたいとおもった。3人のなまえを懐^{おも}いだしたが、そのうち2人とは連絡のしようがなかった。わたしは初恋であるひとになんとしてでも再会したかった。高校入学直後、駅ビルでかの女から話しかけられたことがおもいだされた。そのとき、かの女がわたしに暴力をふるっていた男とならんで歩いていたのも。

ほったらかしにしていたSNSのアカウントを更新して、手当たり次第に小学校時代の連中に承認を乞うた。かの女と共通の友人がいなければ、かの女にはリクエストを送れないからだ。けっきょくは送ったものの反応はなかった。わたしはいろんな同級生にかの女のこと好きだったとうち明けた。断っておくが、わたしは過古もいまもかの女との交際や浪漫なんか想像もしたことはない。かの女にも家庭がすであって、なにかもが無意味だとも知っていた。子供ができたことだ。それでも青年期、いつか再会して、今度こそふつうに会話をと願いながら、冥府みたいな歳月をさまよったのはつらかったし、それが叶わないまま中年に達してしまったのはむごたらしいの1語に尽きる。

11月の終わり。わたしはかの女に託けを送った。これでだめなら死ぬしかない、そうおもった。1発め、明るく好感のある返事、ふたつめ、わたしの希死念慮を批判する厳しく冷たい返事。「命を粗末にするひとはきらいです」――まさに不意打ちだった。慌ててとりつくろい、さらにはかの女の男友だちをからめて非難した。かつてわたしを侮辱の対象にしたと。子供っぽく拗ねた。

「好きとか嫌いとか軽蔑するのではなく、あなたの存在に困惑しています」——それで終わってしまった。つづく1年、わたしはかの女の沈黙のなかで詩集『38wの紙片』をだし、幾許かの金を手にした。けれど充たされはしなかった。わたしはかつての仇——そうはいっても子供時代である——を攻撃し、非難した。ある女を責め立てたあと、その男友だち——初恋のひとの親戚でもある——から「友だちを虐めるな」とメッセージが来た。わたしは答えた。「友だちだって？——ただの記号だろ？」——自身の行為が正しかったとはまったくおもわない。ただ、わたしの見解を訊かずにいきなり「いじめるな」とはなんだろう？——女のほうだってわたしに謝ったではないか。いじめを責めるのはいじめなのか。わたしはただ過古にされた行為に対してずっと悩まされてきたし、それを責めただけだ。執拗であったのは確かだ。けれどわたしだけがわるいのか？——こういった違和感が何度も沸き起こった。わたしはひどい沼地に嵌って、怒りと恨みを撒き散らしていた。いつもアルコールと精神薬がそこにあった。発言すること自体、わたしには怖れであったけれど、他者の反応を識る、それそのものが幻惑であったけれど、かの女からの返答がないなか、過古に復讐するほかにやれることはなかった。女たちはおもてむき謝り、男たちはなにも応えなかった。

'14年の12月23日の夜、突然かの女からメッセージが入ってきた。「ひとを傷つけるひとはきらい！」。反応する間もなくブロックだ。わたしは狂った。まさにブコウスキー曰く『はじめの火傷がいちばん堪える』のだ。そいつに尽きる。それから、だれもかもがわたしを避けた。大きなきっかけは、わたしがかの女を実名で書いたことや、タイムラインに憎悪を垂れ流しつづけたこと、そして'15年の4月ごろ、みずからの傷害事件と、執行猶予判決を曝露したからだだった。ほとんどのひとがわたしをブロックし、黙殺した。何度かメッセージを交わし、愉しく話していたひとびともですらも。わかりきった話だ、わたしには気づかってくれるひともない。もしほんとうに友人がいたなら、わたしのひどい発言を戒めてくれただろうし、わたしになにが起って豹変してしまったかを、怒りの理由を聞いてくれたはずだ。でも、そんなやつはひとりだっていやしな

かった。たしかに中学校とちがって、小学校は新興住宅地に在って、ひどい虐めはなかったのかも知れない。ブチブルやろうどもは、鼻を垂らしてただけだともいえる。しかし、まちがいなくわたしのうちっかわで燻りつづけていた。ようすにかれらかの女らにとって、わたしは異物であり、捌け口でしかなかった。

'00年4月に出会ったかの女的笑顔、わたしを名字ではなく、なまえで呼んだ声、いつかは、なにもかもおもいだせなくなる。「20歳になったら校庭のタイムカプセルをみんな掘り起こそう！」だとよ。——うそっぱちもいいところだ。わたしは呼ばれなかったし、アカの教師によって作文さえも入れさせてもらえなかった。最近になってわたしのほかにも呼ばれなかったもののいることを知って気が済んだ。一昨年の12月は呼びかけ人の実家へ抗議と内容証明を送る旨を書いて葉書をだすほど、この挿話を気に病んでいたから。その女はけつきよく呼びかけ人じゃなかった。やつの担任から電話がかかってきた、「怖がってる」と。けれどもやつが呼びかけ人だといったのもその担任だった。あほらしい限りだ。

去年の暮れ、ようやく発見した。わたしのやらかしてしまった行為の数多は、岡田尊司が『愛着障害 子ども時代を引きずる人々』のなかですべて書いているものだった。心理学者のなかではすでにパターン化された言動でしかないと知ったときの悲しさといったらない。もし発刊当初にこれを読んでいたら、なにも問題は起きなかったかも知れない。初恋を破壊するなんてありえないことだった。この世界でのいちばんの秘密、それがかの女へのおもいだったのに。もうなにかも手遅れだ。生きようが、死のうがなんの意味もない。だれも児童心理なんかに興味なんかない。あるとすれば傷ついた人間と、それを診る側であって、わたしがいまさらどんな手段を採っても、だれもふりむかない。ほとんどのひとは正しい設問と正しい答えが存在すると盲信しながら生きるものであって、根本を問いたださずとも気持ちのよくなれるからだ。そんななかにあつてわたしの懷疑と反省は、瘋癲のいいわけだ。

'15年の夏だった。かの女らしいひとが、初恋のひとらしいのが、インターネットの座談記事にでていた。わたしがよく

閲覧していたニュース・サイトだった。手元にコピーなんかないから、記憶を辿って書く。司会はたしかドワンゴのどれかで、出演は、評論家のT、ネット掲示板のN、実業家のH、藝術家のM、——そしてM村Y子。はなしをまとめれば、M村女史はじぶんを好きだという小中時代の同級生に困らされている。作品を送りつけられたり、facebookでメッセージを送られたり。かれはかの女が好きというが、自身は既婚者だ。かれは世界的な藝術家で詩や絵、音楽の才能がある。かれが「来年の4月に個展をやる」と書き込みをした途端、あらゆるところからコメントを求められ、それは職場にも来たという。なかにはかれを極端に擁護するものもあったという。かの女の旧姓はムラカミで、かれの母方の祖父の遠い親戚だということ。いちばん迷惑なのはネットに実名をだされていること。Tは「それがどうして困る?」といい、Nは「そういう迷惑な行為をするひとは無視すればいい」といい、Hはマスコミとの個人的な体験と確執を語り、Mはただただ場違いのようだった。かの女は最後に「かれは自閉症スペクトラムなんですよ、このままじゃかわいそう」と発言していた。わたしは半信半疑ながらも、かの女へひどい迷惑をかけたことを知り、書き込みのいくらかを消した。わたしのことを擁護しながら、かの女を責める人物がいるというのにも驚いた。なぜ金にもならない落書きやろうが「世界的な藝術家」に飛躍しているのか、わからないまま海外との接触はやめ、逃げるように過ごした。そんなときだ、イレイザー七〇四と出会ったのは。

この出来事がほんとうだったのか、いまでもわからない。アタマもイカれていたし、くそ暑いなかで、直後に血を吐き、熱中症で入院するはめになったぐらいだ。真夏の白昼夢、まさにそんなところってやつだ。それでもしばらくすると怒りが湧いてきた。かの女が被害を訴えることではなく、登場した場所、鼎談の出演者たちだった。なぜよりによってあんな山師どもと一緒なんだ。声がでかいだけのT、倫理不在なうえに違法行為をうまく逃げ切っただけのNと収監されたH、Mについてはよく知らない。いえるのはかれの『芸術家起業論』は実践の参考にはならない、くその役にも立たないということだけだ。たやすくいえば過古のひとびとだった。かの女の悩みはもつともで、なにもかもおれがわるい。けれど、できればも

つと品のある場所で、品のあるひとびとと話して欲しかった。どこをどうしたら、あんないんちき連中にかどわかされてしまうんだ？——毎年、大量生産される聞き書きのくだらない本で小銭稼ぎしてる日本の実業家や評論家なんて、わたしはとも信頼できない。かの女はわたしについて詳しいけれど、でもわたしはかの女をまったく知らない。過古のなまえと姿だけだ。今年の正月、小中時代の知人に会いにいった。かれとは小学校、中学校、合わせて2度一緒だった。わたしの漫画のはじめての読者だ。そんなかれでもけっきょくは「なぜあまり遊んだこともないおれのところに来るんだ？」という。悪意がないのはわかってる。でも、わたしは駅に送ってもらったとき、「じゃあな」としかいわなかった。かれの「またな」に返事はできなかった。

*

夜間高校に入学してまもなく、昼間の女生徒に声をかけられた。中学でいっしょだったTという女で、わたしをしつこくからかっていて不愉快だった。あの笑顔、あの声。もしかしたらMのときだっておなじかも知れない。珍獣を発見した昂奮であり、嬌声だ。しょせんおれは気持ちのわるいやろうでしかない。わたしはメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』を連想する。なまえない怪物の話を聴き、心を傾けてくれたのは、たったひとりの盲人であったのを懐いだす。おなじように顔も知らないひとびとが、わたしの作品や発言を読んで、少なからず支持してくれるようになって来た。特にスロヴェニアの日本人女性は画材や金を送ってくれる。わたしのような人種は表現なしで生きられないだろう。もしわたしが「喪失」と「憧憬」というふたつのものから脱却できたのなら、かの女との再会が叶い、ふつうの会話ができるのなら、わたしにも家族できれば、もはや言語行為は必要はないかも知れない。絵だけを描いているかも知れない。けれどそんなものは虚

妄だ。ほとんどのひとは「再評価」などというものはしない。うちなるハイエナを手懐けるよりも、屍肉を与えるほうをみな撰ぶのだ。わたしがどんなに普遍性を求め、反省し、立ち直ろうと足掻き、職業訓練や仕事に就いても、作品を売っても、かれらかの女らは絶対に認めたりはしない。水平的人間、政治的人間、あるいは演技する人間たちは、それを無意識に恥辱と見做すからだ。

いまもかの女が好きなのかと問われると正直わからない。ごくごくたまに夢のなかでかの女のことを見るくらいだ。かつてのような感情が死んでしまったにしろ、会って話がしたいのはたしかだった。ただし会ってしまえば、なにかが喪われるのも確かだ。もう日曜日、競馬だ。バーテンの給与もでたし、いい馬に当たっていい女性と巡り逢いたい。少なくとも、情熱のあるひとにだ。でも、そのまえに5ヶ月まえの体重にもどすこった。なにもかもおもくなってる。こいつはどうかしなきゃなるまい。

おれというペスト

このまえは自身の来歴やおもいについて料理のレシピを交えながら語ってみた。きょうはそのつづきを書くとしよう。どこにも求められてない文章を書くというわけだ。それでもこいつは長篇小説のための訓練みたいなものだと考えている。使えるものはなんだって使うことさ。わたし自身はシオランの追従者ではないが、かれの人間ざらいと自殺の肯定、多数派への共犯を拒絶するといったおもいには諸手を挙げてやる。さっさと退場したくてならない。先週は、Yという、中央大卒で「自由市民党」党首とひと悶着。きっかけは文章の校正依頼で、わたしの考える手法とかれのとはちがっていたということ。そしてかれが救いがたい莫迦であったことだ。在宅勤務で「出版及び電子書籍のための文藝作品編輯」と掲げたはず

が、政治パンフレットの校閲をするはめになってしまった。しかもデータの形式はワードで、文章はでたらめ。体をなしてない。《中卒！きちがい！詐欺師！ラーメン屋にでもいつて修行しろ！関西の弁護士に訴える！》というありがたきメッセージを頂いたので、お返しに《学歴差別に精神障害者差別、職業差別——いったいどんな弁護士に依頼する気だ？》と返信をさしあげた。さらに《中央大学の惹句は行動する知性だそうだが、あんたはまるで行動する反知性だね》とも書き送った。たかが校閲をめぐってその投げ合いなんざごめんだぜ、ベイビーってなわけだ。収入を求めて火あぶりに処されている。できれば眼鏡のレンズを交換して——またしても視力がさがった——来月のあたまには映画『シベールの日曜日』をかの女と見に行くぜ。もちろん、かの女とは、おれの左手のことだ！

『苦渋の三段論法』でシオランが書いてるように《三十代になったら、ひとはもはや世間の事件に興味を持つべきはない。天文学者が巷の噂話に興味を持つべきないように》だ。然り。どれほどの人間が好事家になることと教養人なることを履き違え、自身を苛んでいるか。だからわたしはニュースを読まない。人生の浪費だ。批評だってそうだ。もう批評なんか懲り懲りだ。素人同士でがやがやと褒めたり、腐したりだ。一切やるなどとはいわない、だがいつもやるものではない。わたしを見てみれば納得がいくだろう。対人感覚が麻痺し、世の光りへとでていくのが億劫になってしまった。批評なんか才能ないものに任せればいい。自作について能弁な書き手には警戒したほうがいい。自身がそうなってしまわないためにも、語りにはつづまりがあるんだ。ネットワーク上での表現に充足してしまう危険については、さんざ自身で体験してきたので、いまさらそれをひとに伝える意味があるのかはわからない。ひとや世代によつてはネット上での自己完結こそ至高なひともいるし、そんな場所でおれが発言する、助言するのは滑稽か否か。ネットでは新しい投稿サイトができあがった。わたしは気に入らなかつたが、ふたりの人物に恩義があつて投稿するはめになった。久しぶりに新しい詩を書き、投げ入れた。澤あづ

さは、本人のいうところ酷評をされていたが、なんのことはない。「昔しはよかった」ということだ。一介の作家志望として、6年もまえの作品を絶賛されてもあまり感じるところがない。それにかの女が仰るほどに《小説としては問題がありすぎるほど詩的》とか《でたらめなくらい大胆に飛躍》していたとはおもえない。素直にじぶんの好きな世界を書いただけといまでもおもっている。過古に喜ばれた作品の焼き直しなんかできない。でもわたしだって過古の賞賛が忘れられない。改稿してコメント欄に投げた。反応はなかった。だれも見向きもしやしない。べつのサイトでは、「初稿で涙を流した」という女性から、不満のメッセージが来た。「初稿をもっと大事にしてください」といわれた。そうとも。いっぽうでは救いたいコメントもあった。たとえば不評であれ、あたらしくいたい。

ブrossの下着

だれかおれを連れ去って欲しい

たとえばそのだれかが

きみであっても

それはとても素敵なことで

長い孤立からきつと

救ってくれる

人生に勝ちめなんかないのは知ってるとも

まちがいがあまりに多く
ただしいものがあまりに少なくとも
語りかけてみたい
すべてを

女を知らないやつがこんなものを書いてるんだ
嗤いたければそうするがいいさ

平日のマーケットで

金色の星を浴み

ブラームスの2番を聴きながら

ブロスの下着を撰びたい

そしてアパートに帰って

シュトラウスのドン・キホーテをかけながら

かの女がくそをしたあとの、

便所の水のながれをずっと聴いてたい

ずっと聴いてたいんだ

それはきつと

美しいにちがない

日曜日も、この2ヶ月もけっきょく競馬はできなかった。わたしはひどく酔っていた。あちこちでウイスキーの水割りを呑んだ。浪費以外のなにものでもない。競馬予想クラブへ加入料が痛々しい。けっきょく仕事で獲た2万3千500円も、軍用コートの支払いや、衝動買いした古本——セリーヌの『死体派』やなんかで、ほとんどなくなり、わたしはできあがったデモ音源を聴かせようと、三田市は相野くんだりまでいった。正気の沙汰ではなかった。わたしは焦りすぎていた。三田までの移動手段を考えていると、もう夜に近かった。

『茹で蛙のレシピ』はまったく受けない。イレイザー七〇四は慰めてくれた。15年来の知人が、記事をシェアしてくれてはいたがはつきりした感想もない。わたしは酔って電話をかけた。もと同級生で近所だった男にである。いまは宝石や装飾品の修理、リメイクをしている。金持ちの息子で、美的センスのかけらもなく、ものを知らない有閑マダムとも相手に商売している、侏儒のやろう。わたしは敬語で話しかけた。むこうはというと、畿内訛を穢く、横柄に使い、「おまえと話してんは時間のムダや」といって切った。あまりにも予想通りで、ありきたりの答え。オイル・サーディンでも持ってやつのお店までいってやろうかとおもったが、やめにした。西宮は苦楽園とはいえ、時間と金のむだであるのにちがいはなかった。売れる文章になるのならべつだが。

バスに乗った。さらに三田駅から相野まで。冬の道を歩く。高校時代の先輩がやっている喫茶店を見つけるまでに20分はかかった。馬糞の臭気をさまよい、暗い歩道で立ち小便をした。ローソンの隣りに店はあった。灯りはなかった。2階と勝手口には燈火がある。けれど扉を叩こうが、来訪を大声で伝えようが、だれも現れなかった。わたしは持ってきた最初の詩

集を郵便受けに突っ込み、悪態を尽きながら、相野駅まで引き返した。もっと早く来ていれば高校生のころ、好きだった女の現在を聞けたかも知れない。途中、線路際の小道に降り、歩いているうちに泣いた。17歳のころの、古い歌をおもう。eastern youth『静寂が燃える』の一節をおもう。《あゝ、この静けさに堪えかねて嗚咽を漏らしているのはだれだ?》。それは、この負け犬だ。おもうに初恋のかの女は要領のよく、品も知性もへったくれもない男たちが好きなんだろう。かの女の友だちの一覧をおもいだして気づいた。ごろつきのようなやつらばかりじゃないか。最後に会ったとき、一緒に歩いてた男だったその類だ。弱いものや、劣っているものへの仕打ちの数多。暴力と嘲笑。わたしは憶えている。宝石修理の小男だったそうだったかの女の親戚だという小汚いやつも。どうしてあんな男たちに嫉妬するのか。自身を軽蔑したことも、人生に疑いを持ったこともない。環境のよさに胡座をかいて、弁舌のよさに陶醉しているだけだ。中身はからっぽで、はったりしかない。本物なんざひとりだっていやしない。かの女が鼎談した人物たちもそうだ。だれもかれも虚業を誇ってる、最低のやろうども。たしかに知名度は高い、だがそれがどうしたっていうんだ?

「一見うんさくさいひとだけど発言は正しい」なんていうやつらがいる。医療や福祉に自己責任を叫んだ、長谷川豊にだって賛同者はいらる、高城剛や山本一郎なんかをありがたがるひとびとだっている。わたしだってモーリー・ロバートソンや高橋ヨシキはきらいではないし、頷くことだってある。それでもおもうのは《一見うんさくさいひとだけど、やっぱり発言だって胡散臭い》ということだ。

わたしが勝手に美化してただけだ。かの女に落ち度もない。醜いものを傷つけるのは正しく、じぶんたちを傷つけるのは絶対悪ってわけだ。くさった共同体幻想の成れの果て。《命を粗末にするひとはきらいです》だって?——わたしがなにをやるうとも考えようとも、きらいはきらいなんだ。ヘリウムによって自裁を遂げたところで、かの女たちはなんともおもうわないだろう。19歳で自裁したという、もと同窓生の女性だったきみたちには助けを求めなかったわけだろう?

口先だけのおそまつな連中に怒りと悲しさと羞ずかしさが溢れそうだった。三田市から750円かけてわが町へと帰った。わたしはまだ無意味な劣等感、ひとびとがみなじぶんよりも優れているという幻想を棄てられないのか？——イレイザー七〇四はいった、——あなたって執念深いよね。その執念は創作だけにしてさっさと眠るのよ。わたしもそうしてるし。

*

おとついは火曜日で可燃ごみの日、もちろんそいつも忘れ、いっぱいになった袋が玄関に転がってる。医者にいきそびれ、痛みと不安のなか、太陽は元氣だ。寒さも全裸でなれば気にすることもない。イレイザー七〇四はいつも裸で過してる。わたしは古い毫れてしまうばかりだ。ようやくきのうになって詩集とフリーマガジンを発注した。前者については、出版コードこそ記載したが、バーコードについては不安があったから、いちど業者にでもまかせてみるしかない。それでもって絵葉書のこと。まずは絵のサンプルファイルをふたたびつくらなければならなかった。去年の3月、錯乱してたわたしはファイルを高架下においてきてしまった。だれかがおれを殺しに来る。——そんなふうにかれてた。昼頃になって1軒のみ、開いてるのを見つけ、高尿酸血症——つまり痛風の薬を処方してもらった。

術後の経過は芳しくない。それでも金のために働く。午前0時、終わって室に帰れば、もはや声もでない。金のほかに獲るものがないわけじゃない。けれどあまりにも躰がやわになってた。抜糸も忘れたまんまで、どおりで痛いわけだった。どうにか近場に外科を見つけた。開くのは午後4時である。どうにもこうにも朝がひどい。おもに左の脇腹や背中が痛む。術後の生活がわるいらしい。焦って仕事にもどってしまったうえに、薬も満足に吞んじゃなかった。

きょうは金曜日で可燃ごみの日、もちろんそいつも忘れ、回収車が去ったあと、いっぱいになった袋だけを通りへ棄てた。

棄てるはずだった段ボールも木板も室にそのままだ。舐の痛みはあいかわらず、ひどい。朝はなににもかもだめだ。金はない。水曜日に使い果たしてしまった。なにへ消えたかは知らない。大きな買いものもしないまま1万2千がなくなった。またしても酔ってた。絵は描いてない、小説もだ。他人の発言の洪水にやられてる。そいつを掻き分けて、伝える意思が弱すぎる。本だってひらいてない。遠い狼煙や醜聞の数多、どうだっていい過古のひとつと、同級生ども、教職員ども、親というならずもの。かれらかの女らの行為や発言の数々をいまでも懐いだす。だしたくないときにいつもだ。終わった羞恥と屈辱の多重露光と来た。撲られ、嗤われ、盗られ、辱められ、そして見棄てられてしまった。わたしだけではなく、多くの醜いひとびとが。できることはあるのだろうか。ひとまず考えてみよう。きょうは印刷屋から本が納入された。これもまたひどい。表紙の裁断にまちがいがある。「足し塗りアリ」の設定がよくなかったか。やってしまった。これでは売りものにはならない。いっぽうでM氏からの依頼は突貫工事で完成だ。「火星移住希望者」を募るためのポスター・アートらしい。わたしは宇宙にも空想科学にも疎かった。それでもなんか、というわけだ。4千円也。もっと仕事が必要、もっと共犯者が必要。

*

いつかだったか、酔ったわたしは電話魔になってひとりの女と話した。またも同級生。おなじ齡だというのに、最後までわたしは敬語。かの女は丁寧な話を聴いてくれた。はるか南国の女ボスといったところの、落ち着きのある喋りだった。写真スタジオをやっていることのほか知らない。29歳のときにSNSで話し、誤植の多い詩集を送った。いつとき、わたしはかの女へひどい迷惑をかけたうえに、逆恨みさえしてしまった。それもまたあのひとのことだ。まえにもいったようにわたしはひどい火傷で、気が狂ってた。自身の醜さにのたうちまわってた。わたしは自身の不始末について詫びを入れ、

これまで「謝り方がわからなかった」といった。実際、何年も対話方法を試行錯誤しながら、けっきょくは失墜し、さまざまところに毒を残してしまっていた。まさしくわたしはペストだった。いまだって、わるいおもいに絡められやすい。じぶんでじぶんを承認できていないのだろう。場当たりで、破滅へ突っ込むみたいなマネをやってしまう。臆病な少年みたいな喋りで語って電話を切った。かの女から「またね」といわれて、またしても戸惑った。決まりきった挨拶や社交辞令にさえ、考えてしまう自身が果てしなく滑稽だった。

言語行為に染まったことがわるいのか、いいのかはわからない。表現活動に夢中になったり、ひとびとの、言葉にはしない態度や考えに怒ったり、そのときそのとき、ふりまわされる。あいもかわらず、伝わる、伝わらないということに過敏でいるし、臆病なほどに第1声が遅く、みじかい。わたしのことを欺瞞だというひとも多いだろう。それは事実だ。現在午後4時45分。もう仕事の時間になってしまった。きょうの昼はジョン・ルーリーのTwitterからブロックされた。かれの使っている画材について尋ねた。そのあとがよくなかった。かれに《blood》と答えられたわたしはからかわれているとおもい、冗談めかしたことを書いた。するとすぐに拒絶だ。有名人にからむ小穢い東洋人、そいつがわたしだ。謝罪のために別のアカウトまでつくって発言したものの、《70%は水彩、あと油彩、そしていくらかのインク》という返信が来たくらいで、赦してはくれないかも知れない。作品よりも作者のほうがずっとおぞましくて、鼻持ちがならないといった作家がいたっけ。

——仰る通りです。そもそもSNSでいいことなんかありやしないじゃないか。この6年、まさに災禍を招き果てた。身のほど知らずもいいところ。自身を宣伝するという行為も、見ず知らずのだれかと交流するという行為にも「だからどうした？それがなんになる？」としかいいようがない。イレイザー七〇四が笑った、——いつもそうじゃないの！

わたしは、新しくはないが別の認識に乗って、山麓道路をくだり、やがて職場にたどり着くというわけだ。近頃、さまざまなことを懐い、書いて来て、出てきた結論がそれだ。敵も味方もない、かつてにもどる日は来るのだろうかとおもいなが

ら、わたしは短距離飛行の無人バスへと乗り込んだ。空調がよく効いている。上着を脱ぐ必要もなかった。坐席には、それぞれ感知器があつて、それがあるものを温め、あるものを冷やしているからだ。加納町交差点の上空はあいかわらず公僕どもがいた。密集する犯罪組織^{アウトフィット}の動向を諜^{スパイ}っていたが、いつもいつも三文芝居みたいな佇^{たたず}まいで、なにも起らずに終日監視がつづいている。わたしはフラワー通りの終点、ネオ・フィネスト三ノ宮の屋上から、老いた女とともに地上へ降りて、それぞれの方角へと去った。あの老女にも、かつて片思いというものがあつたのだ。わたしは通称・北^{ノーチッヒ}の光（独逸語らしかった）と呼ばれる闇市場で、大勢の黒人たちと夕食を喰い、またしても見習いのバーテンへともどつた。

じゃあ、——「またね。」

馬は美し、ひとは醜し

ジョン・ルーリーはおれを赦してくれたようだ。だったらどうだって？——もういい。駄^だべりの好きな、口の巧いひとびとがなんとも目障りになり、おれはまたひとつのゲームから降りることになった。もちろん多くのものと袂^{たもと}別しなければならぬ。どこかしら通底するところのあつてつながっていたひととも。おれは疲れた、憑^よかれてゐる。潔く去るしかない。日曜日、職場のオーナーである未亡人からの誘いで、横尾忠則現代美術館へいくはずも携帯電話がない。見つからない。おもいだすかぎり、先週の水曜日に触つたのを最後にして行方知れずだ。室を掻きまわし、問い合わせの電話を入れるもつながらず、店に出向いた。曰く利用停止を申請した電話をGPSによつて探すことはできない、という答えだった。おれは入院と療養中の滞納分を払えなかった。ふた月分である。分割はできなかった。それでというわけで金が貯まるまで待つてもらえるようにしたのだが、こうなつてしまった。おれは金については要注意人物で、すでにリストに載せられているから、

新しい契約をほかで結ぶこともできない。ほんとうのところ、携帯電話なんざ好きではない。それでも連絡に差し障りがあるというのは居心地がわるかった。そもそも水曜日、おれはなにをやっていたのか。昼に出かけてから、いちど帰って映画を観、ふたたび出かけた。くそまずい牡蠣丼を喰い、そのあまりの不味さに気分がわるくなって、どっかの便所でぜんぶ吐いた。それからの記憶がない。

それから今週の水曜日。救急外来の世話になったが、肝心な問題はわからないまま。頓服をもらって帰った。そしてそいつが効かないこと、みずからの死が近づいてるのを感じとった。ひどい寝起きだ。おれたちのそれぞれの軍隊をなだめながら、いまはこいつを書いている。もしかしたら、また入院になるかも知れない。望みはある、ただ躰がまったくついてこない。死ぬのはかまわない。ただ痛み、極みのなかで、みずからの意思とはかわりなく死にたくはない。それならイグジット・バッグをかぶってバルーン・タイムの栓をひらいたほうがずっといい。バルーン・タイムならすでに買っている。命を粗末するひとはきらいだって？——しかしきみのその科白と、きみの行動はまったく持って一致してないではないか。おれに死んで欲しいのか、欲しくないのかすら不明じゃないか。世界が砂に埋まれるのか、アイス・ナインがすべての水を氷に変えてしまうのかはわからない。ただいえるのは、ものごとはすべて異口同音で、おなじ現象の反復と増減でしかないということだ。いまさらジタバタしたって、古今和歌の時代から、まったくちがうおもいを吐きだすのだってできやしない。かれらには素直さがあった。素直さ、いまではただの世辞でしかない。単調で、浅いやつらにいう科白だ。多くのひとは、じぶんにとってわるくない女を抱いて、わるくない文化に触れるくらいが関の山だ。

木曜日にもおなじ病院へいった。それから近所の内科へ。いちばん強い鎮痛剤を2種類だ。ともかく痛みで寝起きもままならなくなっていた。左半身がどうしようもなく痛む。鳩尾、脇腹、下腹部、背中と、動くとも動かざるを問わずに。参ってしまった。金欠のときほど、わるいことは起きる。弱りめに祟りめ。しかたなくおれは内容証明をつくって、未払いの

賃金について問い合わせた。相手のことは以前、短篇のなかでも書いていて、大阪の門真にその寮がある。うまくいけば、3万ちかくはかたいはずだ。悪足掻きとはわかっていても、なにかをせずにはいられないのだ。それが愚かものの証しである。

*

日曜日。馬はだめだった。馬というよりもおれ自身がだめだった。電話は見つかった。ちょうど機種変更の話をしているところへ発見の報せと来た。もし携帯電話がなければ、酒場への本採用も消えてしまうところだった。おれは滞納金をオーナーに借りることにして室に帰った。

月曜日。オーナーはおれの携帯電話の支払いのために金を貸してくれ、おまけに家電のためにボーナスを前払いしてくれという。前者はともかく後者には少し怖気づいてしまった。おれはそこまでのやろうじゃないというわけだ。それでもともかく話をまとめた。おれは「ひとに誉められたい」というだけの、ちっぽけで、からっぽな人間でしかないからだ。シオランはそういった欲望を《これほど恥ずかしい弱さを公然とさらけ出すよりは、冒瀆のありったけを犯した方がずっと名誉なことであるから》と、だれもそいつを打ち明けない理由を語っている。そこいらの人間とおなじくおれだってなんにもわかつちやいないくそばかだとしても、おれはそういった弱さや疚しさを正直に語りたい。ほかの連中が涼しい顔を決めているれば猶のことである。おれは生来から多数派の人生を嫌悪していたし、事実それとはちがった人生を送っている。おかしいやつとおもわれるのは癩だが、それはしかたがない。それこそおれが望んでいたことだから。それでも多くの期待は失望に、好意は悪意に成り果てたのが、この30年余りだった。絶えまなく、傷つけて来し、傷ついて来た。多くのひとがおれから去

っていった。それでも残されたもののために書いている。

火曜日。午前7時。きのうになってようやく詩集に添付する絵葉書を印刷した。ぜんぶで、4種8枚。まあ、こんなものだろう。イラストレーションの報酬も入るし、まあまあな月末だ。おれには確かな才能がある。ただ、その行使がうまくない。いつも躰とおもいが一致しない。傷は完治してない。肝臓の数値があがってる。それでも、きっと来年はマリブ・ビーチあたりで大笑いしていることだろう。若死にしたいという欲望はある。負けの美学ってやつなのかはわからない。死んでしまいたいというおもいはある。だが、それはいま行使すべきではない。おれは恋がしたい。最後の可能性に賭けて、最愛ってものに出逢いたい。この齢いになって、ほんとうにひとを好きになるのはむづかしい。「人生で恋ができるのは3度まで」なんてことを伊丹十三が孫引きしてた。12歳、16歳、23歳——とづくに3度を過ぎていた。よっぽど頻繁に会わないかぎり、他者に対してつよいおもいを抱けない。おれはすぐにひとのなまえだって忘れてしまい、度々非礼をやらかしてしまふ。どんなに好みの女性をまえにしたところで、熱くなれなくなってしまう。それでも恋がしたい。おれはふたりのひとをおもい浮かべ、かの女たちの顔や、声、交わした会話を反芻し、熱い茶を淹れた。——そうとも、恋がしたい。わるい記憶をすべて塗り替え、呼吸法を新しく学習するんだ、ペスト（迷惑な人物）なおれとはオサラバを決める。近頃、ふたりの女のこと気がなっている。ただ好きといえるほどじゃない。

バーテンダーの職は手段であって目的ではない。賃仕事は、しょせん他人のための、他人がつくった、他人の仕事だ。おれはおれ自身の仕事を確かなものになりたい。そのために金がいるからやっているだけだ。用済みになれば、やめてしまえばいい。30を過ぎて、充たされず、なにかもが夢のままで、ひとに使われるなんざおぞましいかぎりだ。いつまでも人生を切り売りして暮らすわけにはいかない。そんな暇はない。おれはなにひとつ諦めていない。できることをぜんぶやりたい。

水曜日。つくづくいまの職場でいやなのは、業務とは直接関係ない物事をとにかくいわれることだ。その夜、おれは本を

持って来ていた。筋力トレーニングについての指南書なのだが、それをオーナーの未亡人が見つけ、「あたしもHくんも自己啓発本なんかきらいなんだよ、そんなもん読んだ時点で終わってるッ!」——そういった。いったいなにが終わるのか? 人生?——世界?——業務スーパールの営業時間?——かつておれに「おまえの人生、終わってる」と放言した醜女の同級生がいた。休みの時間、かの女はいきなりふり返ってそういった。なんのために?——名塩グリーンハイツにかの女の実家があるから、もしかしたら理由がわかるかも知れない。

ともかくオーナーの口ぶりが不愉快だった。それにH氏のふるまいもいけ好かなかった。かれはいつもじぶんがなにがきらいかを繰り返して、捲し立てている、SNSをやる人間、電子メールを送る人間、バッド・エンドの映画、藝術気取りの映画、日本映画、あれをやる人間、それを好む人間、だれそれ、そのほか。笑顔でそういったざれごとを曰う。女客相手には「恋人なんかいらない」とか「血筋を絶やしてやる」とか、ひたすら自身の孤独について明るくいつているが、そういった言辞が反動的なものでしかないのはあきらかだった。むきだしの嫌悪や諦観は、匿された恐れと不安でしかない。それはおれ自身、憶えがあった。かれが明るく話せば話すほど、おれは白々しく、苦いものを感じる。好きだ、きらいだ、おなじ話を1日に幾度も聞かされているうちに、だんだんと、かれ、かの女やH氏の虚栄が透けて見えてしまった。他人の人生観や価値観が、そこから生まれる指摘が、なんの役にも立たないのはよく知っている。真に受けて、失敗したところでだれも責任なんかとらない。口が巧く、立場がいいからといって、おれの人生や価値観にまで手を出さないくれ。そいつは職務とはなんのかかわりもない。ひとに雇われるということは、こういったざれごとを捌く必要がどうしてもでてくる。なにもかも金のためだ。おれは微笑みを浮かべて、毒を浴びるしかあるまい。きょうは木曜日だ。ようやく詩集を発送できる。売れたのはたった3冊だ。仕方ない、なにせ3年もまえのやつの新装版だ。前回みたいに40部も売れるはずもない。それでもこの詩集には大きな意味があったし、いまも存りつづける。図書コード申請できてよかったとおれはおもっている。夏頃には個

展もやる。画廊ではなく無料のアート・スペースを借りることにした。長篇小説はしばらくお預けだ。ひさしぶりにおれは絵と写真を学びたい。画集も限定で販売し、版画にも挑みたい。とにかく新しい経験が、まったく新しい関係性が要だ。

そういえば未明、黒人街でちょっとした騒ぎがあった。どうやらジャイナ教のモスクまえで組織の三下が揉めごとをやらかし、それに怒ったトルコ系神戸人が襲撃を仕掛けて逃走、アフリカ系神戸人たちに助けを求めたところ、黒人街にはすでに組織の連中が張っていて、襲撃犯の引き渡しを要求、それを拒絶した2者のあいだで戦いが起き、双方、18人が負傷ということらしい。人間の憎悪はとどまるところを知らない。いまさらどんなものに神を見出そうとも、われわれは救われない。そんなことを訓^{おし}えられる。そのいっぽう華僑系神戸人はどちらにつけば利益になるか、算盤を弾いているさなかだ。低空飛行する警察車輛の群れ、おれはそいつを眺めながらセンター街まで歩き、地下のイタリア料理屋で、アボガードと生ハムのリングイネを喰い、シチリア系神戸人の女の子たちを眺めた。かの女たちは美しかったが、ナンパでもしようものならマフィア出身の父親か親戚に半殺しは免れまい。おれにできることはなにもなかった。

おまえはなにを見てるんだ？

料理人のひとりがカウンターから身を乗りだしてきた。——しまった、見つかった。

なにも見ちゃいないさ。しいていえば天然の美だね。

ふざけるな、すけべやろう。

おまえの噂は有名だ、いつだってやらしい眼つきで女を見る。じぶんの右手とヤツてろよ。——生憎、おれは左利きだ。料理人は怒り顔で電話に左手を伸ばし、なにごとかを喚いた。右手でナイフを、もういっぽんの右手で電針銃を握っている。おれが逃げだそうと尻を動かした一瞬、さっきまで知らないふりを決めていた女の子のひとりが、おれの腕を掴む。太陽みたいだった。

いい加減にやめて、ルイーン！

なにをいつてるんだ、コロンバ！

とにかくやめるのよ、使用人！

きみの父上にいいつけてやるぞ！

薄汚い、男根主義者の卑怯者！

かの女は、コロンバは、おれをそとへ連れだした。レザー製の、黒いレギンスがたまらねえ。おれたちは黙ったまま地上へあがり、連絡先を交換した。これからなにが起るのか、まったく読めない。別れ際に軽い抱擁と口づけをし、おれはしばらくかの女のうしろ姿に見惚れていた。33歳をまえにしてようやく人生がまわりだした。恋の終列車に乗って、いったいどこへむかうのか。イレイザー七〇四は妬くだろうか。

現在、午前11時58分。これでお終い。おれはみずから書き、やがてみずから減じる。あたりまえのことだ。それでも書かずにはいられない。自滅しか待つものがないとしても、もはやそれをやめることはできないだろう。失墜しつづけることの快楽と愉悦。勝ちめのないのをわかっていても、おれは書く。これから郵便局への小旅行だ。書かずにいられる人生ならもっと幸せだったのもわかる。でも、いまさら嘆いたところでなにも変わりはない。愉しむしかない。きのう注文した下着がもう届いた。ブロス——ではなく、安いグンゼのが。それを穿いて丘を降ろう。インターネットの自称詩人たち、紙媒体の自称詩人たち、空疎な受賞歴、お偉方、他人の人生におかまを掘るやつら、おれのような男にやさしくしてくれる女性たち、おれやおれの作品に興味を示してくれている女性たち、かつて片思いを抱いた女性たち、青い木立ち、非加熱の曇ビール、サニーデイ・サービス——無意味ナンセンスのちからを信じたいんだ。——わかるかい？

オイルサーディンによって書かれた詩論

*

窓からそとを見る。どうしてあんなところに大型トラックが停まっているのかとおもう。これぞ詩だ。いまさらいうべきことなんかない。わたしが詩というものを書いてきて、もはや15年になる。年数はどうだっていい。どうして詩などという、おそらくこの世でもっともあやふやでいかがわしいものなんぞに身を襲ってきたのか。まったくもっておぞましいばかりだ。あいもかわらず、『ユリイカ』や『現代詩手帖』には採用されない。かつていちどだけ『詩と思想』に載ったことはあるが、どうにも時数の規定に合う詩が書けない。もはやスタイルはできあがってしまい、あとはそれをぶち毀すほか、できることはないと来る。わたしには行き場がないんだ。いまは石牟礼道子の全詩集を読んでいる。かの女の散文は手に余りすぎるから。

そもそも日本には詩などというものは存在しない、まねごとに過ぎない、小谷野敦はそう宣っていた。だったらわたしの15年はなんだったのか。ひたすら散文から逃げ、主張することを避け、憐憫に浸っていただけだというのか。わたしはもう若くもない。でも死ぬだろう齢にはずいぶんと遠い。というわけでいまさら社会活動とやらで作業所で半端仕事なんぞやっている。なによりもじぶんの魂しいにふさわしい生き方をしたいものだ。それがどうしたことやら、虚名と物質にまみれ、なにも考えられない。なにも行動できない。見えないピケがあちらこちらを囲っているありさま。考えるまえに、行動するまでに立ちはだかっているものが多すぎる。それはあるひとにとっては階級であるかも知れない、あるひとにとっては障碍

かも知れない、またあるひとにとって単純に容姿の問題かも知れない。

詩の世界は小さな馴れあいの世界だ。刺激的なものなんかなにもない。今年はいろいろ投稿した。特に短歌の新人賞には力を入れた。なんども推敲を重ね、森忠明から駄目だしを喰らいつづけ、それでも結晶のようになった歌篇はたった2首しか入らなかった。たぶん、けっきょくは結社やらなにやらでも入らないといけない世界なんだ。いつだったか留置場で、おれは新聞を読んでいた。K氏が詩集の批評を書いていた。ふたつは思潮社、ひとつは書肆山田である。さもありなん。お仲間同士でけつの営め合いかい？——そいつは気分がいいのかい？——ちくしょう、そんな仕組みのなかでできることなんかなにもない。そしてわたしは神戸の町で孤立しきっている。自身の存在がさむぎむしい。町を歩き、女たちを見る。1日に数度はおそろしいほどの理想の女がいる。神戸には美人が多い。多すぎるんだ。わたしだって恋や愛に溺れてみたい。こうして醜い文章を書く醜い男だとしてもだ。表現なんか、好きでやっているわけじゃない。ただそのほかに選択肢がなかっただけだ。かりに表現がなければ、ひとを殺していたかも知れない。もし表現と引き替えに恋や愛が手に入るなら、わたしは進んで明け渡す。こんな迷妄のなかでもものをつづり、本をつくるのはあまりにも淋しい営みだ。

だからといって詩壇の歯車にはなれないという理由から、ネット詩の道化役になるつもりもない。ネット詩は終わったとってかまわない。B-PREVIEW が引導を渡してくれた。かれらの愚かさには感謝しかない。主宰人のたわけた循環論法を見るがいい。あんなものに係わるならば死ぬほうがたやすい。わたしはもう他人の書いたものにうだうだ批判やら助言やら書くのに厭いてしまったんだ。ほとんどの人間は主要な近代詩（啄木、藤村、中也、賢治）すら読んでない、ことばの響きと、うもの疎く、冗長で凝縮を知らず、視覚的美質をまったく養っていない。はつきいって書かれている内容以前の問題だ。これではブックが「スタイル」という詩でいったように《大勢の人間のなかでたったひとりでいること》はできないだろう。スタイルを確かなものにするということは決して自然には身につかない。わたしが怠惰だったただけなのかも知れないが、け

つきよくネット詩からもわたしは孤立するしかない。もしこの地上にわたしのようなひとがいたら声を掛け合おうじゃないか。どうせことばなんか救われない身の、魂しいの発露に過ぎないんだから。これからしばらくは文藝そのものから遠ざかっていくだろう。絵を描きたいし、音楽もやりたい、写真も当然。長篇小説も中篇小説もいいところまで書けた。あとはつくった本をしかるべきところへ送りだすだけだ。

先月、この15年の未収録作品を1冊にまとめた。300頁を超えるものになった。表紙は'03年、行われた詩の朗読会『地団駄ライブ！朗読ビート！』のパンフレットからの借用だ。絵はもちろんわたしが描いたものだ。わたしはこの詩集を主催人Ⅱ荒木田義人に捧げることにした。この数年で過古のほとんどの作品が喪われてしまったが、嘆くよりも喜ぶべきことである。詩はわたしにとって不運として存りつづけるのだから。あるいは災厄としてわたしが存るのだから。もちろんのこと、表現によって時代や社会を表現したいという欲望もある。けれどもいまのわたしにはせいぜいじぶんのことで手いっぱい、ほかのひとびとのことなんか及びもつかない暮らしをしている。優れた作品にはその時代精神がいくらかでも反映されている。わたしだってそこに加わりたいが、そのの世界にまなざしをむけるにはひとり遊びが長すぎた。あまりにも長くひとりきりでいたために他者というものが、まったく詩のなかにも存在しないんだ。一人称の世界。わたしはけつきよくケネス・レックスロスのいうところの《見棄てられた田舎者》でしかない。愚劣な競争に疲れ切った痩せ馬だ。

これを好んで読んでいる人間がどれほどいるのか、またどれほど興味を持って読んでいるのかはわからないが、もしなにかしら共鳴するものがあつたら、そこからなにかしら派生させたいとわたしはおもっている。もちろん感傷だと非難されることは眼に見えている。無粋なロマン主義とおもわれかも知れない。それでもわたしはこう書かずにはいられない。だれか、どこかに生きてるものはいないのか！——わたしからすれば多くのものが生きながら死んでいる。Kのなにがいい、Hのなにがいい。どれもこれもくだらない。詩壇のシステムの生みだした歯車の権化ではないか。わたしは少なくともかれら

かの女らから見いだせるのはフリーズなフレーズでしかない。かくもいまましい現代死人たちが築きあげたものをいったいどうやってぶち毀すのか。いまのわたしにはおもい計ることもできない。言語の海をいくら泳いでも陸地は見えない。それを肯定するのか、否定するのもわからない。わたしにはけつきよくはぐれものがふさわしいのかも知れない。わたしの書いたものをいいとするひとびとはいったいなにをわたしに見いだしたのだろうかともう。なにをやらかし、なにをまちがったのか。わたしは多くのひとを裏切ってきたし、期待を砕いてきた。いまさら、どうしようもないことに悩む。わたしはいったいなにをすればいい、いったいなにを読めばいい?——注釈だらけのキャントーズ?——カールス・ウィリアム?——カミングス?——それとも西行?——はたまた現代思想?——支離滅裂なポストモダンの難解派?——右派のオピニオン誌?——左派のオピニオン誌?——苔米地博士の著作?

けつきよくのところ、好きにやるしかないということだ。他人を追いかけてもしかたがない。わたしについて蝗のいっきが宣っていた、曰く「かれに深みを感じない。かれの書くものよりおれの作品のほうが読むのに必要な知識がある。かれはオタクな快樂主義でポストモダンのだ。おれにはかまわないが、つまらない」。蝗にはなまえはない。必要ないからだ。蝗がいったいどういった読書と来歴を経てきたのか、かれは極々まれに断片をつぶやくのみで、まったく見えない。わたしはかつて金庫破りのヤンが気がいびエロを避けたようにかれのことをずっと避けている。ひどい悪臭がするからだ。それもナルシズムの臭気だ。かれはじぶんの知に溺れてる、あるいはじぶんの知を溺愛している。そして口さがない。かれの作品についておもうことはほとんどないといっている。うまい暗喩を使って、かれは時代を表現したがっている、それだけのことだ。わるいのはかれの啓蒙的な言動で、現れては他人の無知を面罵して、じぶんこそと知者とふるまう。そしてじぶんこそ至上という態度で終始しているんだ。まったく見られたものじゃない。まるでソクラテスが批判したソフィストではないか。わたしは無知であり、これからも無知でありつつづけるだろう。ひとに説教してまわるような、嘔いた唾をふたたび

嘔くなんてことも、わたしはしたくない。かつて、いくらかやったかも知れないが。

まあ、今度は日本詩人会にでも投稿したほうがいいじゃないかという気もする。どこもかしこもくだらない寄り合いだという事実を前提にしてものを見るなら、個人的営為に終わったほうがいいという気もする。いずれせよ、わたしには学ぶべきことが多すぎるほどあった。たぶん、わたしは病んでいるのだろう。すべてを手に入れたとおもっている。興味をそそのめるものすべてをこの手のなかに収めたいと願ってもいる、ぞっとする欲望だ。最低のホラー・ショーはけっきょくわたしの自作自演によって上演されることだろう。けつに虫の涌いたばかどもが、きょうも痴れごとをやっている。そしてわたしは切れ痔だ。蝗のことはもういい、それは拒否された。願わくば最期の幕間にうつくしい娘と喃語を交わしたい。そして手を繋いだまま死にたい。だれか、わたしを連れてってくれ、世界をめぐるダンスのために、あるいは世界の果ての動物園のために。

むかいの養老院ではデイケアの手配車があいかわらず、やかましくアイドリングしている。そして職員たちは通勤して来る。駐車場にはいつもマツトブラックでEクラスのメルセデスが停まっている。わたしの人生は幸福でまったくそがない、という偽りをいうほどには魂しいにゆとりがある。きょうもB型作業所だ。午前8時58分。10時にはセンタープラザ西館へいく。たぶんまた商品画像の新規登録作業だろう。ドラッグストアの商品だ。わたしはおもう。少なくともわたしが読みたいものは作者の存在を感じられるものだ。有限をまるで無限のように魅せつける作家たちのことをおもう。かれらの女性の挑戦のうえにわたしは歩くだけだ。まだ死ぬまでに待ち時間がある。そのあいだに酒でないものをやりつづけるしかない。太陽は元気いっぱい、たわごとにあふれた町を照らしている。けっきょく自身にうち勝つしかやりようはない。金の問題、酒の問題、理性のいたずら、考えはつきないがまずは目のまえを照らすことでなんとか、しっかり歩けるようになるはずだ。どんなやつかいごとが待っているか、見てみようじゃないか？

わたしはずっとあなたを待っていた。ゴドーを待つみたいに。それこそ永遠のような時間にやられ、深い悲しみや怒りから、あるいはそれまで書いてきたものがそっくり消滅してしまっても。わたしは余計な作為なしにやりたい。素直に、ただそれだけだ。多くのものごとがあまりにも早く過ぎ去っていく。書く行為によってあなたはなにを得たのか、失ったのか。わたしはいくらか文章の技術を得た。そして人生を失った。あなたは愉しんで書くのか、苦しんで書くのか。かつて探偵のフィリップ・マローはいつた、「苦勞に才能の代理は務まらない」と。われわれは鏡を見ながら書くべきなんだろう、きっと。そうすれば滑稽なものを真剣に書く滑稽な人物が見えて来るはずだ。みずからを笑い、みずからをからかえ。それが才能だ。

あなたから送られるいまだ存在しない手紙をわたしは毎晩読み耽る。それこそわたしの待っているものだからだ。わたしのなかでヘンリー・ミラーが微笑む。――《ともかくこれからともになにかが始まろうというのだ》と。陽はもう高い。朝餉にファルファツレと玉葱のトマトスープを喰い、わたしはでかける。もしわたしにできることがあるなら、どうか伝えて欲しい。

じゃあ、また会おう。

*

パンケーキの墓

*

森からぬけでる。するとぼくらはいつも腹をすかし、手持ちはまるでなかった。ちいさなさまよいを味わい、土埃をまきあげる。それは雨の日であつてもおろそかにしない。廃屋のなかや水のない涸れた貯水槽のうえでたびたび誓つたことだつた。ぼくらは未踏の道を拓くつもりで来る日もくる日も踏み歩いた。しかし野苺の季節が過古に収まってしまふと、口は淋しく、草笛——ぼくはできない——も長くはつづかなかつた。夜の訪れを戸口にそれぞれ家路に就くときにはあたらしい企みが肩に覗いてはいたが、とにかくやりきれない気分だつた。

あんまり腹がすくのでぼくらはたがいにだしあつて食うものを手に入れることにした。森奥や真夜中の兵糧となるものを探す。その小金を得るためにちよいとばかしいやなこともした。たとえば古長靴に黄の花を植えたり、納屋に長らく眠つていた遺影たちを起こして回つたり、落ちている車からタイヤを抜いてまわつたり、草芽吹く鉛管を欲しいやつに売りつけたりもした。

ある日曜の朝、台所からふたりの声が聞えてきた。そんなに大きくはない。しかし両者ともに言葉を尖らし、発声するたびにテーブルを揺らした。やがて父が溜め息をついてでていく。母が溜め息をつき、ほんのみじかいあいま洩する。ガレー

ジのほうから父のグライNDERの金属を削ぐおとが高くなる。姉が2階から降りてきて母に気づく。けれどなにもいわない。ぼくは寝たふりをしたまま耳をすませる。しばらく妹たちが起きてきて、まだ寝ているとぼくを冷やかすころには母はもう平然と朝餉の支度をしていた。ぼくはスープを啜りながら母の顔を盗み見る。泪らしい跡はない。姉妹はかの女たちの世界をしっかりと守りながらおしゃべりし、そこにたびおたび母もくわえる。そうしてさっさと遊びに興じる。なにもいわずぼくは食べ終え、父のいいつけがかからないうちに森のほうへ歩いていく。

ぼくらは森からもっともちかい店を撰んでいた。そこは古ぼけたパン屋でいつも客はなかった。窓はくもっていて主でさえもカウンタのむこうに蔭がちらつくのみで正体がわからず、よっぽど注目しなくては切れかけの電燈があらわす、影絵にしか思えない。そこからそっとわれわれは品定めした。展示ケースのなかに大きさも値段もおあつらえなパンケーキを見つけた。そいつに決めてぼくらはなかにはいる。長年にわたって染みついた埃と油の臭いが鼻を突き、胸のなかを期待が脹れあがる。ふるえるような足どりでカウンタに体を寄せた。どっちが声をかければいい？ ぼくがいうと相棒は唇ちをとがらせて答える。どっちだっていいだろ？ ぼくらがぐずぐずしていると、音もなく男が入ってきた。このへんでは見かけないやつで、細身に背広を着て小ぶりの旅行鞆を提げている。さきをこされてはなるまい。ぼくはあわてて声をかけた。このパンケーキをください！

カウンタの向こうはからっぽでなんの気配もない。いったいどうなっているんだろう。思っていたすきまに小さな声が、新しく焼くから待っていなさいと答えた。男なのか女なのかわからない、皺の多く高い声だ。ふたりしてうしろへさがる。長椅子にそろってかける。男が黙ったまま前へでる。やつはポケットから紙切れをだし、そいつを厨房へ投げ込んだ。しば

らくすると包みがカウンタに現れて、やつは支払いもせずに去っていった。ぼくは主に声をかける。ねえ、さっきのひと金を払わなかったよ。——いいんだよ、あれは。なにがいいのかわからないままにぼくらは待った。そのうち窓のなかで雨が弾け、葉っぱが泣き、暮れがちくなってもパンケーキは焼きあがらなかった。ぼくらは腹をすかせ、たがいに睨みあった。なんだってこんなところに来てしまったのか。

そこへまたドアがひらき、入ってきたのは女で、それはごみ集積所に生まれた精霊といった趣きの皺くちゃなやつで、罅割れたレンガや雨に降られる、打ち捨てられたガットギターにも見えた。女は茶色い布を外套がわりに巻きつけていて、そこから汚れを吸った滴が床に筋をつくった。灯りのともった怪談屋敷で仕事の終わったもののけを見るようにぼくらはただじつと見つめた。まさに古い時代の西洋おぼけそのものだった。女はぼくらが見えないようにふるまい、商品棚をあさると、おき去られて硬くなっている食パンを2斤とってでていった。扉のそとでもう日は暮れていた。

ついていこうぜ。相棒がぼくの肩を叩く。かれはぼくよりも勇敢で好奇心があった。ぼくはうなずいてドアをひらく。パンケーキは焼きあがりそうになかった。ぼくはこわがりな気丈を隠し、落ち葉まみれの暗い道を跳ぶ。えい、やっと！ そのむこうに精霊兼ガットギターも見える。ふたりして足早にたどっていけばやつの罅がどんなものか拝めるぞ。ゆっくりと静かに土を進み、径をひらく。あたらしい拠点ができる気がして、よろこばしい思いに浸っていると女がふり返った。なんの表情もない。それは顔が削げ落ちたみたいだった。ぼくらは足をとめ、沈黙にこころをかためる。女はゆっくりと仕掛けの狂った人形みたいに近づいてきた。それは年季のいった骨が音を発てるようにして、濡れた両の手が広がり、ぼくらを包もうとする。そのときになつてはじめてぼくは逃げようと思う。でも遅かった。そうしてぼくらは捕まって3年半が過ぎた。

そのあいだぼくらは互いの見分けがつかなくなった。

*

帰ってきててもまだパンケーキは焼きあがっていなかった。ある夜ぼくらは女の死を看取ってささやかな弔いをした。かの女の正体はまるでなかった。小さな絵手紙が宛名のないまま散らばっているだけで、かの女がどんな人生を生きてきたのかはなかった。くたびれた屋敷をでて、救急に連絡すると足をパン屋に向けた。主はまたも姿をみせない。ふたりは待つだけだった。手のひらには写真がいちまいあるだけだ。それは怪談屋敷で拾ったもので写っているのはおそらくあの女だ。14、5の娘がレンガの壁にもたれ、微笑みもせずにカメラを見据えている。立っているあしもとに猫がいつびき尻をむけている。

ぼくらは墓をいつか立ててやるつもりになっていた。けれど時間は遅く、家や森に残してきた古い遊びや、やらずじまいのたくらみごとが急に気にかかりだした。パンケーキのことなど忘れて、ふりだしへ戻ろうとするところが湧きだしてきたときだった。ふたたび音のないしかたでドアがひらき、ギターケースを抱えた青年が入ってきた。そいつは倒れこむようだった。青白い顔に汗をしたたらせ、唇を震わせながら小銭をカウンタに寄こした。すぐになにかがあらわれて差しだした手に消えた。ぼくらはまたついていくことにした。目の合図ひとつでだ。そとへですぐにかれはふたりに気づいた。――きみたち、なにをしているんだ？　まるでぼくらがかれを狙う殺し屋でもあるかのように声がうわずっている。ぼくらはくすくすしたいのをおさえて、さあね――ポケットのなかで両手をぐりぐりさせた。かれは恥ずかしそうに顔をゆがめ、おれはおかしいものじゃない、たしかにこの土地ははじめてだが――かれは発見された諜報部員のようにばつの悪い表情で、ポ

ケットからさっき買ったらしいホットドッグをだし、ぼくらにすすめた。――町へでる、だれも通らない道を教えてくれな
いか？ かれがすぎるようにいう。これはおもしろい、こいつはきつとなにかとんでもないのをどつかでぶちかましたんだ。
ぼくらはこの青年が追っ手に捕まる場面と、ぼくらは首尾よく逃がしてやる場面を空想した。そして目を合わせた。とりあ
えず、後者を採って貯水池からはじまる登山道へ案内することにした。そこをいけばこの高原地帯から、だれにも遇うこと
なく、小さな町へでられる。かれと連れだって灯りのない、坂を下りていく。これがまちがいだった。貯水池とお不動さま
の、小さな社が見えてくる。――お参りしていかない？ ぼくが軽い気分でそういうと、ギター青年は首をぶんぶんふり、
一言。――そういうの、怖いんだ。かれにはお不動さまが追っ手と同じに見えるらしい。穴のあいたフェンスをくぐって橋
のうえに立ったときだった。大きな灯りがふたつ坂をおりてきて、3人を照らしつくし、まごついているぼくらを車に押し
こんでどこかへ連れ去っていった。

着けば遠い町の演芸場で、青年の正体は逃げだした楽隊の1員だった。かれはぼくらが逃亡を手助けしたと、飼主にいい
ふらし、ぼくら壁のすきまをふさぐために5年を過ごさなければならなかった。2年経ったある冬の日、かれは河のなかで
死体になった。

*

ふたたび戻ってきててもパンケーキは焼きあがっていなかった。ぼくらはもういらなないといったが、主はできないと告げた。
もうそのころには野苺が来ていて、ぼくらはそっちのほうが欲しかったが、待つほかはなかった。またも日が暮れかけて気

を焦らせる。ぼくらが窓を見ていたら、でぶでぶよろな老人が名札のついた年月をぶらさげて、音もなくあらわれた。かれはふところから曲尺をだしと、そこらじゅうを測り始めた。カウンタの低さ、ショーケースの狭さ、電燈の笠の半径を測り、薄汚れた壁から過去の亡霊をひっぱがして隠しに突っ込んだ。そして床の陰を集める。なにをしている？——かれはいきなりぼくたちをみた。少しばかり驚いた。だれがですか？——きみらだよ。パンケーキを待っているんだ。それは時間がかかるのかい？——ああ、うんとかかっているよ。老人は帽子をとってくるくる回しはじめた。どうだい、いい仕事がある、ついてこないか？——わかった、いくよ。でもすぐ戻るだろうね。ぼくらはなにせ時間にかかるパンケーキを待っているのだ。かれがすぐにすむとあったから三人でもってへでた。そこには散歩中の霊柩車のような、黒く巨きな車があって、ぼくらが乗り込むと灰を吹きながら、森や貯水池や、このあたりでもっとも美しい製材所を越え、工業地帯に着いた。老人はぼくらを小ぶりの倉庫に案内した。——さっそくはじめてもらいたくいと老人は作業着を支給して、ぼくらにひと通り構内をみせた。それから測定室とかかれた広い部屋に立たせた。なかには長椅子と机、体重計、身体測定器、巻尺が置いてあった。そして記入用紙、筆記用具、クリップボード。老人の合図でひとがはいってきた。ひらいた扉から長い列を組んで女の子たちが入ってくる。かの女らは裸だ。そのあらわになった背中や踝をぼくらは測ることになった。かの女らがなんなのかをぼくらは知らない。昼も夜もそこにはなかった。ひっきりなしに人間どもがやってきた。終わってしまうとたいへんな疲労で、砂浜に埋められる魚のように動けなくなった。老人はぼくらにはやさしかったが、女の子たちにはすこぶるきびしくて、なにかをちよつとでもまちがえたりすれば頭を小突いた。たぶん傷になっても見えないようにするためだ。かれは女になめられるということを異常に怖がっているふうに見えた。

季節が変わるころ、ぼくらは女の子の何人かと秘密の交際をもったが、いつもふたりでひとりを愛した。かの女たちはな

ぜかと訊く。安全だからだと決まって答えた。いったいなにが安全だったのか、いまもってわからない。ぼくらはたがいの心の区別がつかなくなった。

*

もどってくれば20歳の冬だった。灰茶緑の外套に両の手を入れ、雲をかきまわしていた。窓のなかで雪がステップを刻み、道がみるみる失われ、おまけに暮れが近づいている。パンケーキはまだ焼きあがってはいなかった。ぼくらは店に来るまえにそっと眺めた、我が家について語り合っていた。知らない子供や大人たちが這ったり歩いたりしながら生活していた。赤い車がのつとられ、気持ちがいたい排ガスをふるい、放熱器を温くさせていた。家具はどれも薄黒くなった中古で、グラスはどれもほかない炭酸酒にあわ立っていた。——そんなとき入ってきたのは警官みたいな、3人の男たちだった。それぞれ脂に黄ばんだかげを曳き、勝手に売れ残りのパンをむしゃむしゃとやりだした。食べながら莚をふかし、ポケット壘に口をつける。そして太った、ぶっかこうな万年筆で、なにかを手帖に書きつけた。——店主はいないのか。ひとりがいいながらカウンタを越え、厨房にはいていく。だれもいないらしい。首をふって戻ってくるや、ここはもぬけの殻だ。そうつぶやいてまた手帖に書きつける。ゆっくりとぼくらは気づかれないように出ていこうとした。なぜだかまずいような気がしたからだ。しかしこれもまちがいだった。ドアをあけて夜風に襟をなびかせようとしたとき、三人の男はぼくらに掴みかかった。それまでふたりにかまいもしなければ、いないようにふるまっていたのに。——おまえら、ふたりも客か？ そうです、なにか御用ですか。なにか注文があるのかね？ パンケーキを待っていたのですが——パンケーキ？ そいつはなんの隠語だ？ 隠語とはどういう意味ですか？

なにもわからないままかれらはパトカーによく似た車へぼくらを押し込めた。どういう嫌疑があつて捕まえるのかを質してみる。男のひとりは誓いを破つたからだといい、もうひとりはパンケーキを注文したからだといい、残りのひとりは気に喰わないからだと言へた。

奥行きのない町の書割、大小の非常口、ひと殺しを探す検問を過ぎ、海辺に降ろされた。砂浜に建つ黒い小屋に連れられ、警官もどきの男たちが宣言する。通告があるまでこの小屋のなかで暮らせ。それだけいうとそのまま去っていった。質問はいつさい許されないとつけくわえたうえでだ。ぼくらはなにもいわず、椅子に腰をおろした。長い時間を肋骨に感じた。ひとりだけ若く給仕のようなやつが食事のときだけやってきて、ぼくらと一緒に食した。かれは一言も話さず、きまぐれに本やレコードをぼくらに提供した。小屋に窓はなく、前はシャッターになっていて昼間のみ開放が許された。そのそとは竹の囲いがみじめつたらしく周りを囲っていた。ほとんどが無人の海辺、夏にやってきたひとたちは表情のない顔でぼくらを眺め、ぼくらも同じ仕方で見つめた。

ここは年中薄暗いし、ひと気もなく、冷めた空気が流れている。冬といわず、夏といわず、波がきびしい。なにもかもがまことにささいながら失意を抱えている。昼はあいたシャッターのそとで砂を踏む。それがなによりの生のたしかさだ。夜は波音を聞くしかない。通告はひと月たったところでもなかった。給士のようなやつはぼくらの問いかけに答えず、ただやつと睨めっこをしただけだ。かれはがまんしたように口もとをかたくし、時折腹や肩やうなじを小さな動作で、こそこそと掻いたり、なぞったりしてぼくらを黙らした。この拘留の正体やら出口をあきらめたぼくらはとうとう砂遊びに夢中に

なったり、かぜに流れてくるひとの声に物語をつけたしたり、カレンダーにありもしない予定を立てて空想したり、一見気のふれたような仕方でも時間を殺してまわった。そのままのかたちでひと月は1年になり、がまんの断ち切れたように給士もどきはぼくらに楽器を与えた。かれとしては狂っていくぼくらに歯止めをかけたかったのかも知れない。楽器はほとんど週替わりで、小さなピアノだったり、笛だったり、ギターやベース、民族楽器であったりした。はじめはおもちゃだったり、粗悪な品だったのが、回を追うごとにようになっていった。なにもわからないまま毎日鳴らしては通りがかったひとびとに聞かせた。するとかれらはもののけにあったかのように身をすくませたり、棒立ちになって聴き、おれはなんともないだといふふうの顔をして過ぎていった。しばらくふたりともどれだけおかしい音が出せるか、競い合っていた。

あれについてもここで話さなければならぬだろう。真夜中になればかならず一度ぼくらはますをかけた。ひとりづつ便所にこもり、できるだけ時間をかけて一発おみまいする。思い浮かべるのはかつて交際した娘たち、あるいはまだ交際していない娘たち、浜辺に見た娘たち、天使、女神、サキユパス。

あたらしい記憶をでっちあげ、ふたりとの恋人の関係に酔う。あたまのなかで裸になった娘たちの身体をたしかめる。ことばははじまりとおわりだけにあって、なんの感情もないように装っている。あるときそれがふいにくずれる。ぼくらふたりにびつたりなのが、順番にくわる。ぼくらは目を瞠る。かの女の頬がゆるみ、視線がやわらかくなっていき、安堵して光る。そしてどんどん近づいてくる。ぼくらは彼女の手をとって測定代にのせ、巻尺をひっぱりだす。勤めに入るまえの、おびえているような肌を軽くさすってやったりしながら測り終え、たがいに小さな合図を送る。老人を出し抜くのにぼくらは何ヶ月もかかった。無言のまま語りかける方法を少しづつ掴み取った。眉を見えない腕のようにもちあげ、笑いかけるよ

うに踵を鳴らす。するとかの女たちは裏階段をのぼってくる。仕事のふけたあとにぼくらの寮へ足音を鳴らす。あとは室のなかさ。室のなかはいつも散らかっていた。寝台にも便所にも机にも本があった。どれも表紙の黄ばんだ古本で、物語であったり、詩であったり、時事評論であったりもした。かすかな葎のくさみがそれらにかぶさって隠し味をつとめる。ぼくらはつねにちがう時代の物事やひとについて思い、話し合った。冷たい床板が歩きたびにきいきい鳴いて女たちはふるえる。そいつを抱きとめてぼくらは夕食にかかり、寝台に倒れ掛かる。もう1度あれを演じたい。そう思いながら発射した。――午前2時ふたたび眠りに落ちる。

5年目の夏になった。もう楽器はどれも手になじみ、それらしく弾けるようになった。本のなかにいくつか教本も混じっていたんだ。給仕もどきにささやかに感謝だ。うらさみしい浜辺にも観衆は増えつつあり、水遊びの娘たちがぼくらに声をなげかけてくる。あなたたちはどうしてそんなところに閉じこめられてるの？ ぼくらは素直に答える。警察みたいなへんなのに捕まってるんだ。かの女たちはとりあわない。どうせ娯楽番組の企画ね。残念なことにテレビと現実の区別がつかないのだ。通告はいつまでたっても来ないし、そんなものあがることをぼくらは信じていなかった。かれらはきつとどこかでこの小屋を眺めて酒でも呑んでいるんだろう。娘たちはどこかへ去っていき、男たちがひやかしをいう。ぼくらの奏でる音だけが取り残され、捨てられた黄色い西瓜にまじって、いまいましく落ちている。ぼくらは苛立ちをふかめ、お互いにいがみあうことが多くなった。そして給仕もどきにも牙をむけた。かれをひっぱったり、ゆすったり、ねじったりしてみたが悲鳴すら聞えてこなかった。

おとつい冬の兆しがきて時化にそなえていたら、ひとりの娘が柵越しに声をかけてきた。いくどか演奏を聴きにきていた

娘だ。かの女はぼくらの話を信じるといってくれた。そこからでたくないの？ できればね。だしてあげようと思うの。――
――どうして？

かの女は答えにつまる。なんだってそんないじわるなことを聴いてしまったのだろう。おたがいにもごつき沈黙が溝を流れる。ぼくらはぼくらの目的をとうに失い、脱出などどうもうでもいいことのようにしか聞えなかったのだ。どうやってぬけるのさ？ 囲いを切れればいいのよ、簡単なことじゃないの。――そうだろうね、でもこっちだってそうおもっていたんだ。かの女は声を高くした。ならどうしてやらないの？ 面倒だからさ。――ほんとうはちがう。かっこよく抜けられる機会をいつも探しているんだ。でもいつだってそれはのくさく、やぼったい。ましてや女の子に助けられるなんて正直な話、目を覆いたかった。ぼくらはかの女に礼をいって別れようとする。貴重な申し出をありがとう。もうすぐ給士みたいなのがやってくるし、シャッターを降ろして夕食だ。――それなら真夜中にやってくるわ。天候がよくないからもっと晴れた日にしないか？ 今夜じゃなければだめ！ かの女はそれだけいて駈けていった。勝手な娘だ。

しかたなくかの女の好きにさせることにした。シャッターを降ろし、夕食の支度だ。給仕もどきは運んできたものを温めなおす。われわれは死んだ鯨を囲んで葡萄酒を呑んだ。食事をすませ、給仕もどきが帰るとき、かれははじめて口を利いた。きみたち逃げだす気だろ？――ぼくたちは顔をしろくさせて立ち止まる。そんなんじゃないさ、風にあたりたいだけさ。――そういうことなら、とやつは隠しから鍵をだしてぼくに渡した。シャッターの鍵を渡しておくよ。ありがとうとぼくらはいった。かれは閉まったドアの向こうで、どうなっても知らないからなといった。いつだってかれはものごとのそとにいるというのにだ。寝台に入り、波音を黙って聴いた。そこから給仕もどきの自動車が去る音が聞える。ぼくらは声もださずに

さよならを告げた。

午前1時をまわってぼくらは起き上がった。そして荷をまとめる。しかしなにもないのだ。ただ外套を着て、靴を履く。シャッターをあげ、海の風を吸い込んだ。鼻いっぱいに。雨はまだふっていない。かの女はすでに来ていて、柵を毀しかかっていた。かの女はのっぺらぼうのように表情のない顔でこちらを見、唐突に笑った。ぼくらが黙ったままだいると、不審そうにどうしたのと訊く。ぼくらはかの女の言葉を信じていなかった。素直にそいつを詫びた。かの女はとりつかれたように作業にかかり、鋸とボールで柵はたやすく開いてしまった。かの女はうちがわに入ってきて訊いた。どうしていままでしようとしなかったの？ 囚人の自主性ってやつを見せたかったんだ。つまりお伶俐さんだつてところを。思ってもいないことをいい、かの女をあきれさせ、浜に足をおろす。夜風がつよく吹きつけて雨を予感させた。黒い雲がうずを巻いて空にべっとりくっついていて。波が柵の根元にまでかかってくる。――楽器はもっていかないの？ 看守がもって帰ったんだ。残念、もっていたら、ふたりが演奏できるところだって探すのに。――ここで伝わるように看守とやつのことをいったのがなにか悪いような、気の毒なような気がした。

かの女に導かれて浜をのぼり、町のあるらしいほうへ急ぐ。風にかしいだ電信柱をよけ、交番や死の臭う民芸品店をさけ、表通りにでる。そこは上り坂になっていて、これを山のほうへたぐっていくと駅に着くらしい。歩きだしてすぐ、うしろからあのパトカーそっくりの車が猛烈な勢いでやってきた。警官みたいなのやつらは、まえにあったときとちっともかわらず、窓から顔や銃みたいなのを突きだしてなにやら一心に呶鳴っている。そして拳銃みたいなのので静かに狙いをつけていた。まず一発目は街灯を撥ね、つぎは窓を砕き、さらにシネマのネオンをやっつけ、そして女の子に当たった。かの女は倒れ、

ぼくらは走りつづけた。やつらのうしろから、ほんものの警察が現れたからだ。そのまま改札を抜け、赤電に飛び乗った。

もどつてくると春がちかくに来ていた。森林のその多くが切り拓かれ、死者のいない、あたらしい家がならぶ。道はどれもまっすぐにのびて、かげもぬかるみもない。ぼくらの家なんか、とつくになくなっていて、知らないひとたちの世界だけが見てくれもよく、そろえられていた。ただあのパン屋だけが吹きだまった落ち葉のなかで隠れるようにあった。疲れ切った身体で扉をおす。ぼくらはもう食べる気力もなかったから、主が今できたところだよといったとき、石でも投げつけたみたいにとても狼狽してしまったんだ。代金は払ってあるし、しかたなく受け取った。どこへいくあてもなく、そのまま歩きだした。放浪を楽しんだところはもうあとかたもない。山茄子も煙きのこだ。けつきよくは公園にいき、そのもつとも昏いところにパンケーキを運び入れ、そして穴を掘り、包みのままで埋葬した。ぼくらは草笛——ぼくもできるようになった——を吹き、鎮魂歌を奏でて土を降った。雨が降りだしていた。ぼくらは旅の愚痴からおたがいを罵り、それきり別れてしまい、いまはどこにいるかもおたがいに知らない。日々は糸くずのようにふきだまり、過古の戸口をぬけてはもつともうつろな空を産む。ぼくらはいまもそこにある。ぼくらの天国なのだ。

*



エセ詩學の半ダース・パツク

*

おれの短歌がイッた。歌集のための前準備が終わったということだ。あとは15年分の作品を撰んで本にするということだ。撰はわが師に任せるとして、おれは来週から装丁のためにラフに手を着けることにした。金曜の長い午後のことだ。おれはもう2年、まともに絵を描いてない。絵を描かない画家もどきだ。せいぜいのところ、年賀状のために描いたくらいで、ほかにないもしてない。暗がりのなかでひとりわが身を慰めるだけだ。蠅が飛ぶ。また蠅が飛ぶ。かれらの呻りにはぞっとしてしまふ。ちらかった室のなかで、なにか熱くなれるものはないかとねだる。せいぜいのところ、Spotifyで音楽を聴いてるのが関の山だ。

ひとりの男としても、あるいはなにかの才能を持った人間としても、おれはまったく要なしのくずだ。絶えまない猜疑心のなかで過古を憾み、未来をも唾棄する。もはや、だれにもかまってくれないというだけの事実。なにをどういつてもつづきがない、終わりしかないということ。もはや35にもなつてどこにもいくところがない。もう10日も働いてない。港湾労働にもついていけず、また求人を捲つてた。倉庫内作業、あたまにあるのはそいつだけだった。縋るおもいで応募する。いまのところ、返事はたったひとつだけ。あとの連中はこの週末、けつさえ動かさなかったというわけだ。おれはじぶんについてるだろう値札をおもい、うつろな気分になる。これではどうしようもない。

6月の終わりからスリップしてしまった。つまり禁酒をやぶってしまったということだ。救いようもなくまずい安酒に酔

って金を失った。気づいたときには誕生日が過ぎてた。35年。おれは所詮は残りもの、あまりものでしかない。なにものかになろうとするもののうずき。あるいは諦観とか、憬れだとか、出世欲だとか、そんなものが頭をもたげる。過古はうつくしかった、——ちがう。ただいまよりも少し可能性があったと推測されるだけのことだ。蠅が飛ぶ。蜘蛛が這う。おれは書く。教室の片隅で生きた淋しさ、冷たい家庭のなかから逃亡を繰り返した夜々のこと、定時制時代に好きだった女の子のこと。おれはけっきょく何者でもない。詩人でも、絵描きでも、写真家でもない。断片的で利己的な営為に溺れ、さ迷ってきただけの男だった。詩や付随する行為たちが、おれを慰めることはない。むしろ追いつめていくんだ、——早く見返してやれと。だが、そうはいってもおれにはけっきょくにも残っちゃない。おれはかれらかの女らをおもいながら、短歌のかたわらに詩を書いていたんだ、そうとも。

35年。——おれは同時代人の饗宴や祝福や立身から零れてきた。とつくに遅れてしまった。若さにはなんの意味もないということをおもい知らされる。いまもむかしも要領のわるいばかりものでしかない。世界にむかって肛門を突きつける痴れものでしかないということの悲しみをこれを読むだろう、紳士淑女たちにわからせてやりたい。虚勢を張るのはよそう。最近おれが詩と称して書き散らしたものはみな、それらしい語句をそれらしい語句に繋いだだけの工作物でしかない。そこになにか意味があるような、風景があるような書き方をしただけのものだ。そしてマイクロ単位でレイ・カーヴァーを模倣してる。ひどい代物だ。こんなもののために死んでいくなんておれは認めたくはない。——最低だ。どうしてもっと詩誌に投稿しなかったのだろう。どうしてもっと売れるもの書かなかったのだろう。それはけっきょくおれに堪え性がなく、安易な解決をいつもしてきたからだ。ほんとうにじぶんを救うために書いてたら、こんなことにはならなかった。じぶんの問題から眼をそらしつづけ、ほとんどなにもして来なかったからだ。

35年。去年よりは幾らかマシな人生。仕事だってやったし、貯金だってしてる。去年のように万引きで捕まったり、初恋

の女の実家へ行ってわめき、警察を呼ばれた挙げ句、ストーカーとして処理されたことをおもえば上出来だ。でも、だからなんだっていうんだ。すべてはアルコールに魅入られたなかでのことだ。ただそれだけの事実だ。アルコール、おまえはおれをどうするつもりなんだ？ おれからわるいものを抽出して蒸留し、世界中にばらまくことか。でも、おまえとはこれっきりだ。ほんとうに。いまのおれはウィルキンソンを呑みながらタイプするだけの存在。ほとんど受け身で他人を眺めてるだけの存在。あいもかわらず、じぶんの問題から逃げつづけてる。そんなおれを笑ってるやつがいる、イレイザー七〇四だ。かの女についてはまえにも言及した。かの女の存在についてはあまりおれを責めないで欲しい。お願いだ。

「今夜は珍しく書くのね？」とかの女はいった。「まるで、いいわけみたいに書いてるのね」

「わかるだろ？」おれはふり向いた。かの女は本棚のまえに立っておれを見ている。少し蔑みの色があつた。

「わかるだろ？——もうずっと外界との接触もなしなんだ、気がどうにかなるね。だれもおれなんかに関心なんぞ持たないってことがよくわかりすぎてつらいんだ、おい」

「ぜんぶ、いいわけよ。いいわけの塊。あなたはずっと繰り返してる《おれは悲惨で無様だから赦されるべきだ》って」そのとき、おれのなかでなにかが毀れた。おれは立ちあがって、ウィルキンソンを手にとった。そいつを呑み干し、坐ってた折りたたみの椅子を、かの女にむかって投げた。かの女はコンロ台まで吹っ飛んだ。悲鳴さえあげない。だって人間じゃないからな。でも、それまでだった。イレイザー七〇四がおれに突進したからだ。床に叩きつけられる。腰が砕けそうになる。背中にエフェクターやアンプが喰い込む。悲鳴をあげるおれをかの女は足踏みして遊ぶ。

「ああ！」おれは叫んだ。祈った。「わるかった！」

「大事なことを忘れているわ」

「なんだよ、ウウウウ」

「あんたの師匠のいったことよ、《女を敵に回して生きてけない》ってね」

おれの背中でダイナコンプのスイッチが入った。どうやら激しい夜になりそうだ。立ちあがってじぶんの血を眺めた。背中に手をまわして、その色を確認めた。青じゃなかった。

「そのとおりだよ、ベイブ」

「これ以上ふざけないで」

かの女の瞳が紫から赤に変わった。もうおれにはどうにもできない。というわけでこの文章はここいらで切りあげることしよう。そうしよう。うしろから声がする。いや、まえからだ。イレイザー七〇四がおれをじっと見つめてる。

「このヌケサク、さっさとしな！」立ちあがって、おれは灯りを消した。

*

ということがあったわけだ。べつにどうだっていいけれど、お寒い自己観察をどっかで終わらせるにはイレイザー七〇四ぐらいの怒りがあればいいということらしい。そういえば文藝なんぞをやったじぶんというのもあったわけ。いま書いているのはそんなものとは関係ない日常のあれこれだ。同時代の、同世代の活躍なんかどうだっていい。同時代の人間に評価されることなんかどうだっていい。地に足をつけることだ。そうでなくてはなにも成就しない。わかつてはいる。では、なにおたおたやってるのか。それはけっきょく自尊心を擽るからだ。だれのなまえもだしたくはないが、それでもかれらかの女らに反発とうしろめたさを感じる。たしかにおれはじぶんのどうしようもなさを自慢してる。それでどこかで免罪符を得ようとしてるんだ。最近ブログの読者も増え、読み手は存在してるにちがいない。それでも作品を買うとなれば話はべつ

だ。買うやつなんかいやしない。退屈だ。ソクラテスなら「魂への配慮」とかいいながら、どっかへ歩いていってしまったら。でも、これはおれの作品なんだ。永遠にアマチュアで、半端ものの世界。そしてはやまっとうな生き方、普通の社会で暮らしていくことの難しさをおもう。

あたらしい仕事を見つけること、マックを買うこと、歌集をだすこと、いまのおれにあるのはそれだけだ。港湾労働にいても、いちばんきつい仕事をやらされ、軽い仕事をやってるやろうの愚痴を聞かされるはめになるだけだ。やつは40過ぎで、中卒。おれは高卒だというのに5階のバナナとアボガドの検品でなく、べつの地上の冷蔵倉庫でケースのバナナ10段積みハイ・スピードでと来る。帰りの地下鉄で、おれはやろうと話す。けっきょくおれは逃げるか、やり通すかのどちらかだ。やるときはやり抜く。でなきゃ、はじめからやめておく。おれも所長にあの仕事はできないといってやればいいものを、それができない。けっきょく今月はずっと貯金を切り崩す生活だ。だれだってつらいのはわかってるつもりでも、おれは嘔きだしてしまう。

35年。いつだったか、宝石商の、もと同級生に詩集を送った。たぶんまた酒に酔ってたんだ。やつは届いたら電話するといったきり。なにもない。実社会で生きることのできない人間なんかだれも相手にはしないということだ。詩を読める人間というのはけっきょく幼年期のまま、ことばが社会と個人、空想と現実に分化されないうまま育ってしまったものだけだ。そしてそれがかれらかの女らの無益な特権なのだ。おれはもう他人の書くものを読まなくなった。どれもが耐えられない。たとえ『ユリイカ』や『手帖』の作品であっても読んでいられない。やつらはいったいなにを書いてるんだ？

「そもそも本屋に在庫がないでしょ？」

またしてもイレイザー七〇四だ。

「おれの作品に入って来ないでくれるかな？」

かの女は少し笑って足を組んだ。わるい足じゃない。決してわるくない。めずらしく服を着ていた。緑色の上着に黒のスカートで決めてた。いつもは**全裸**なのに。

「いまさら社会に迎合するの？ それとも惨めなりとも歴史を残すの？」

「おい、そんな設問、答えようがないじゃねえか」

「どこがよ」

「だってそうだろ？——社会との繋がりがなければ作品は売りようがないし、生計も立てられない。歴史がどう判断するかはそれを書く人間たちの勝手なたわごとであって、運命でも、決定でもないじゃないか。おれは生きなければならぬ、少なくとも死ぬまで愉しくやりたいよ。結婚だってしたい」

「結婚？——頭大丈夫？」かの女は笑った。シニカルな笑いを笑った。

「おれだってしたいよ！」

35年。だれにも赦されなかったおれという存在を受け入れてくれる夢魔のような女が現れて欲しいとおもう。だが、それだつてもはや忘れかけてる夢だったと気づく。情熱は存在しない。あるのは虚妄と畏れだけだ。おれはだれにもやさしくなれない。おれは黙って室をでた。午後23時。こんな時間にこんなものを読むやつはいない。いつものコンビニでウィルキンソンを買い、生田川の上流まで歩いた。静かな夏だ。なによりも静かで毒気もないが、決してだれも癒やさない夏だ。長距離バスの発着場から河を見た。それから新神戸駅の2階へあがって、小さな本屋をみた。スノビズムの見本市としかいえないよな。かつてはだれもが美しかった、なんてわけがない。ずっとまえから、おれとおなじ階層の人間たちは確実に存在し、その作品とともにして消え去る運命なんだ。おれが帰ったとき、イレイザー七〇四はいなかった。葉書に小さく、なにか書かれてあった。おれはそれを読む。そして泣いた。

《さよなら どうか、忘れて》

それはまるで毛布のなかの両の手みたいで

*

みじかい階段をあがって入出庫のホームを歩き、その半ばにあるエレヴェータにみんなと乗った。ぼく、フロア主任、香水の臭う長身の男、年増女、そしてかの女と。2階での持ち場に就いて、まずは棚づけを始める。室いっぱい棚が並び、そこには照明器具の部品がある。どの商品を、どこに置けばいいのかわからない。棚番はめちゃくちゃだ。もちろん先出し、後出しもある。棚に入らないものは床に置くしかない。主任は急かす。早くしろ、早くしろ、早くしろ。午後ちかくになって今度は伝票が来るのを待った。出庫作業だ。ぼくはパレットを降ろし、ハンドリフトに通した。やがて主任が伝票を持ってきて、机にひろげる。そして割り振りをした。主任のぶん、壮年のぶん、ぼくのぶん、かの女のぶんだ。それぞれリフトを引きながら、ピッキングをはじめた。もうここへ来てひと月半にもなるのに、商品の場所はまったくのたらいで、伝票の棚番通りにはまったくいきはしない。困ったときは年増女に訊く。それでもないときがある。いつも商品が完全に揃うまでに定時を過ぎ、残業がはじまる。ぼくは昼餉に大盛りのスパゲッティを平らげ、ビールを呑んで職場にもどった。そして休憩室で本をひらき、かの女の声聞く。聞き耳を立てるのだ。

高校卒業してキャディーの仕事を始めたんです。

それでこっちに来て。

ほんとは専門学校にいきたかったけど、

お父さんに「あほか！」っていわれて。

キャデイの寮はわたしとおなじ九州の子が多くて。

かの女は、ほかのフロアの40男と愉しように話をしてる。かの女の身の上ばなしだ。ぼくだってかの女と、ああいう話をしてみたい。そうおもいながらずっと聞いてた。

高校時代はバンドやってて、

わたしベースもギターも弾くんですよ。

いまでも楽器は持ってるんですけど、

いまはゲームばかりしてて。

ぼくもギターをやってる、そういいたかった。それでもかの女はぼくが立ち入れないような聖域みたいな気がする。やがてかの女は女子用の休憩室に入り、40男は去って、ぼくはひとりになった。『裏切りの国』というイギリスの冒険小説を読みながら、時間が経つのを、そしてまたかの女と仕事することをおもった。時間になり、倉庫にもどって、残りの伝票を見た。きょうも残業だ。半分も終わっちゃいない。やがてみんながもどって仕事が始まった。主任が笑みを浮かべていう、

なに喰った？

スパゲッティです。

おまえ、よう喰うなあ。

たしかにそうだった。ぼくはすっかりデブだった。23歳になるまでのこの1年、太りすぎてしまった。主任はぼくの腹を叩き、やがて気味のわるい笑みを、冷たい、無表情に変えて持ち場にもどった。気分がわるい。むかむかしてた。気づくと、品番のちがう商品をパレットに積みあげてしまってた。けっきょく仕事は7時までつづき、ぼくはせつせとトラック別にわ

けたパレットを階下のホームへ持ってった。運転手たちにパレットを渡し、また2階へあがる。ふとかの女を見た。つらそうなふたつの眼がみじかい髪の毛のなかで一瞬光る。ようやく仕事が終われば、ぼくはかの女に挨拶をするために駐輪場で待った。そして叶えてから、酒を買いにいった。バーボンをいっぽん。ひとくち味見してみると、男が寄ってきた。若い男だ。ぼくとそうかわらない。背広を着てる。その口元はだらしくひくつき、なにかを求めている。でもなにかを得るにはまずは冷や水に頭から突っ込んで、自己認識ってやつを重層化する必要があるみたいにおもわれた。あるいは脳味噌にシラタキをぶち込む必要があった。

つまるところ、やつはまともじゃなかった。わるい色が一色、その心を占領しちまってるにちがいなかったんだ。やつはぼくのそばまで来て、もぞもぞしたうごきを何度か繰り返した。ぼくにつよい蔑みをむける。そしていった。

吞ませて欲しいんや。

ふざけるな。

おまえ、おれのこと知つとうやろ？

いいや、おまえなんか知らない。

小学校でも、中学でも一緒やったろ？——おまえ、太ったな。

いいや、おまえなんか知らない。

おまえはいつも絵を描いてた、絵え巧かったなあ。

いいや、おまえなんか知らない。

おいっ、ちよつとでもええから吞ませてくれや！

おまえはだれだ？

友だちや。

タイムカプセルはどうした？

タイムカプセル？

おまえ、呼ばれなかったか？

おれは黙ってやつに壇を差しだした。ふたくちほど吞まれて壇はもどってきた。どうだっていい。これで気が済んだか？

まあな。——おれんちに来いや。

いいや、おまえなんか知らない。

おれは知ってるんやで、おまえのことなんか。

じゃあ、いってみろ。

おまえは勉強できへんから、みんなにばかにされてた、

おまえはユカのこと好きやったけど、ユカにはきらわれとった。

ユカのこと、修学旅行で追い回し、カメラで撮ろうとした、

おまえはユカからもらった自己紹介のカードにふざけたことを書いて先生に取りあげられてた、

おまえは議論の授業でいつもとんちんかんで場違いな発言をしてまわりをしらせさせた、

おまえは中学1年、おなじクラスのやつをナイフで刺した、そいつは孤児で転校してもた、

おまえはだんだん学校に来なくなつて、3年は1回しかいってなかった、

おまえはアリマの定時制にいつて、おれらとはそれっきりや。

おまえは、——とやつはまたいいかけて、ぼくが遮った。聴くに堪えなかった。ぼくは折れた。それでやつの家に行くことになった。ニケツして丘をあがり、小学校のある区域へとのぼった。やつの家は公園のてまえだった。森のむこうから高速道路の灯りがちらちらしてる。ハイソを氣どつたらしい白い家にやつが誘った。

なにがあるんだ、家には？

ビールならあるで。

ほかには？

ないで。

内装は白で統一されてる。薄汚れた白だ。壁紙の隅に黒黴が生えてる。なにか腐ったみたいな臭いがしてた。やつと台所へいった。そして木目のテーブルにかけてビールを待つ。やつが国産を4本持つて来る。ぼくはそいつをチェイサーに、安いバーボンを呑みはじめた。

残念ながら、——とぼくはいった。

おまえのことはおもいだせないんだ。たぶん、おもいだしたとたん、ぶん殴ってるだろうけどな。

できるわけないやんけ、おまえにひとは殴れへん。

おれは1年まえ、親父を殴った、他人だっておなじことだ。

家族との仲もわるいんやな。

家族との仲が、だ。

そやけどおまえ、おれたちのだれともつきあいはあらへんやんか？

それが友だちという科白なのか？

友だちねえ、あれは巻き餌みたいなもんや。

おまえに友だちはおらへんて。

ぼくは黙り込んだ。いったい、なにが愉しくて友だちでもないやつを家に誘う？ ビールをだす？ やつから眼をそらし、室のなかを観察した。汚れた扇風機、かつてはハイ・センスだったはずのガス・コンロ、ひどい花の絵が描かれたポット、冷蔵庫に貼られたメモ、そこに書かれた文字、「牛乳がない」、「調味料が切れてる」、「あけたら閉める!」。ひらかれたガラス戸のむこうにある居間。板床に散らばった婦人雑誌、テレビ、ゲーム機、経済新聞、洋服ダンス、小さな染みみたいに見えるなにか、テーブルと、そのうえの請求書たち、コーヒーの臭い、菫の臭い、老人の臭い。なにかもがいけ好かないし、なにかもが剥きだしのなにかに見える。それにしてもかれの両親はどこにいるのか。もう7時も過ぎているのに、だれもない。なにか、正体のわからない空気が漂ってる。

おまえの家族はどこだ？

でかけてる。

どこに？

夜勤やで。

やつはにやりと笑い、一瞬腰を浮かすと、うしろむきのまんまおなじところへ坐った。ぼくはかれの後頭部にむかって話をするはめになってしまった。いったい、どういうつもりだ。

なるほど。——それでつまみはないのか？

冷蔵庫にシメサバがあるわ。

とつとどしな。

おれに命令すんなや！

それでもやつはシメサバのバックをだしてきて、皿に盛った。おれは指で切り身を摘まんで喰いながら酒を呑んだ。いまのところはハーフ・ロックにしといた。これからなにが始まるのかがわからないからだ。こいつの腹づもりがどんなものか、様子を確かめたかった。——なにか話をしろよ。

話？——そうやな。——おまえ、童貞やろ？
だったら？

女、欲しくないんか？

欲しいよ、そりゃ。

でも、なにもしてないんやろ？——おれはちゃんとやることやったで、大学の新歓で手に入れたで。

でも、おまえはなにもできへんのやろお？

生憎、万策尽き果ててね。

うそ吐くな、努力しなかったんやろ？

ハンデが大きすぎるんだ、生まれた星が好くないのかもな。

ごまかすなや。

なにも。

おれはずっと手のうちをあかしてる、ごまかしてるのはおまえのほうだ。

おまえの目的はなんだ？

いまなにをしてる？

それを訊いてどうする？

それを話さないでどうすんねん？

倉庫作業員、照明器具のな。

おれは営業や。

くそみたいな仕事や、——でも、おまえは楽やな、人間じゃなくて品物相手の仕事なんやから。女がいるんだろ、文句はいえないよ。

女なんてトラブルの一種やで。

あーだ、こーだ、うるさいわりにろくなことにならへんし。

あんなもん、おまえにやるわ。

じゃあ、なんで童貞だなんて持ちだすんだ？

新歓なんてほざくんだ？

おれはわざわざこんなところまで来て、どうして知らないやつのお痴を聞くんだ？

おまえはおれを知ろう！

「いいや、おまえなんか知らない」——そのとき、やつはこっちをむいた、上半身をひねり、それから下半身も向きを変えた。焦ったおもづらでぼくを見つめ、すがりつくようにこっちに乗りだした。

ちょっと待ってくれや、

少しでもいいから懐いだしてくれへんか。

無理だよ。

お互い遠い過去なんだ。

憶えてていいことじゃない。

むかし、おれたちのあいだでなにかがあったのかも知れない。

でもそれは終わったことだ、つまりはジョン・ウェインが勝ったってことなんだよ。

おまえはきつとかつて憐れなこのおれが、いまでも憐れに酒を呑んでるからって声をかけたんだろ？

からかってやろうって腹づもりなのはとくにわかってるんだ、でもそんなことに意味なんかない。

やつはしばらく黙ってビールを啜ってた。ぼくはバーボンの、ベの1杯を呑むところだった。こんなところには長居は無用だ。早く、早く離れなくちゃならない。あしたも仕事。主任の青白く、冷たい顔が浮かぶ。眼鏡のなかの、決して笑わない眼が浮かぶ。それからかの女のうつくしい顔が浮かぶ。おれはいかなくてはならない。

おまえの書いてる詩、ネットでぜんぶ読んだんや。

それで興味が湧いてな、

おまえがどんな暮らししてるか、それでなんとなくわかった。——おまえには夢がある。
なるほどな、——でも話すことなんかないだろ？

いや、おまえに会いたがってる女がおんねん、おまえとおなじクラスやった子が！

きょうは疲れてるんだ、それにこんな太った姿は女に見られたくない。

いまから呼んでくる、待ってるよお！

やつは勝手に飛びだしていった。ガレージから自転車をだす音がする。沈黙。ぼくは待った。ビールはまだ2本ある。バーボンを鞆にしまって、それをちびりと始めた。もう夜の8時だ。木枯らしが鳴る。箒にすがりつくようなかぜの音がする。

1本めをやって30分、2本めをやって20分、もういちどバーボンをだして啜った。もしかしたらまたぞろ、くだらないのがやって来ておれを嘲りに来るのかも知れない。そんな羞恥に耐えられるかどうか。けれど、どこかで期待してしまうところもある。女の子がおれを待ってるのかも知れない。そう考えると、なんだかわるい気もしないではない。その場の勢いやらで1発できてしまうかも知れない。どうせ、かの女とは発展なんかないし、このままじゃ童貞で人生が終わってしまうんじゃないか。そんなことを考えて1時間半。

ぼくは家をでた。そしてジョルノに跨がり、発進する。やがて公園脇の林道にひとの姿があつた。倒れた男の姿が。やつだ。ぼくは降りて確かめる。首に打撲痕がある。倒れた拍子に傷つけたのか、左頬に血が滲んでる。死んでるわけじゃない。冷たい夜だ。ふたたびジョルノに跨がって発進した。夜の森が黒々とあたりを被い、暴力の気配を滲ませてる。田舎町は退屈と狂気にまみれてる。それを救ってやれるのはぼくだけだ。けれど、それはぼくの錯覚だ。どこを走っても、このあたりに公衆電話はない。そして携帯電話をぼくはいまだに持ってない。だれかに報せたほうがいいのはわかる。でも、けっきょく帰ることにした。面倒はごめんだ。もしかしたらとは、おもう、やつとほんとうに友だちになれたかも知れないと。つぎの瞬間ぼくはそのおもいを嘔き棄てた。ひどい味がしたからだ。あんなやろうは好きなら凍えてればいい。

*

欠勤した。午の2時まで眠って、それから酒を買いにいった。ほとんどの金が酒で喪われていく。ぼくは週ふつか欠勤する。あの子もだ。室に帰って音楽をかけ、両切りに火をつける。完璧だった。きょうはスコッチを仕入れた。シングル・モルトの。4千円もした。ネットを見る。相も変わらず、ぼくの作品に反応はない。書くことの意味を見失いそうになる。詩

誌のほうでも掲載の連絡なしと来た。日常の、ありふれた奇跡、そんなものすらここにはない。3年まえのことをおもいだす。ホテルで見失ったかの女がどうしてるのかをおもうとき、いやな汗を掻いてしまう。それでも酔いがまわり、そんなことは忘れる。妹たちの声が階段や廊下に響く。かの女たちは自由だ。ぼくはといえば父の使用人みたいなものだ。

ふかく酔わないうちに手淫を済ませた。ぼくはどうやってでも、早く世にでなければならなかった。だって仕事のうだつはあがらないし、またじぶんから辞めてしまいうだろう。いまのところはかの女が存在がつかえ棒になってるけど、かの女がいなくなればもうあそこで働いていられないだろう。このまま歳をとりたくはない。いまずぐにでもデビューして、かつてぼくを蔑んだやつら、からかったやつらを見返したかった。さもなくば死ぬしかない。25歳まで、あと2年しかない。ぼくは早熟というものにいちばんのあこがれがあった。でも、けっきょくいつものように酔いどれて眠り、次の朝に容赦なくぶち吞めされるんだ。いつもの棚づけが待ってる。入庫数がいかれてる。

早く、

早くして、

早くやって！

フロア主任がぼくはきらいだ。ねちねちとひとの陰口を叩き、つまらないギャグをやって笑いをせがむ。ぼくはつくり笑いで凌ぐ。やつは早く、早くと仕事を急かす。仕事は終わらない。個数が揃ってなかったり、品番がまちがってたり、いつもなにかがあった。家で呑む量は増えてった。ロッカーにも酒を置き、休憩時間の気つけ薬にした。年があけて1月、いつものように量販店で酒を見てた。当然。おれはなにをやっているのかとおもった。もうずっとなにも書いてはない。詩も小説も絵もなにかもが遠くにやられ、いまでは展ばすはずの手を酒瓶にやってる。もう書けないのかとおもう。だいたい、ぼくに情熱も真剣さもないんだ。ぼくよりも若いやつらが次々とデビューを果たし、いつまでもぼくは遅れてる。2年まえ、

作家の弟子になったというのになにも進展がない。かれはぼくを褒めてはくれる。ただし、それまでだ。

冷たい家で、あたらしい酒を連れて室へいく。カーテンもない窓のむこうで父がまた作業してる。つよい灯りを焚いてだ。めざわりでしかない。P Cの画面越しに世界を眺め、じぶんとはなんの繋がりもない話題に笑ったり、怒ったりしながら夜が更ける。水割りはハーフロックになり、それはやがてロックになって、やがてストレートに変わった。乾いた咽に即席ラーメンをぶち込むと、あとは昏倒して、気がつけば朝だ。壇に残った酒をあけ、ジョルノに乗る。倉庫街のかぜは痛いほど、鋭かった。ぼくはいつになれば身を立てられるのか。いつまでもなんの成長にもならない単純な仕事に身を窶すのか。あまりにも不安な朝だ。いつもみたいに2階へいき、仕事を始める。かの女は休み。そんなときだった。

あの子、辞めるみたいやね？

年増女が口を切り、30男の主任が答える。

残業についていけへんのやろ。

そのときになってようやくぼくはかの女に惚れてるってことがわかった。かの女のみじかい髪、白い肌、愁いを含んだまなざし——もちろん、こんな表現は陳腐だし、仮に読者がいたら眼を背けてしまうだろう。でも、たえられずにぼくは倉庫の奥でしばらくのあいだ、かの女へのおもいをぶちまけてた。だれもいないところで。かの女はあした来るのか、来ないのか。そうもおもった。それはまるで毛布のなかの両手みたいで、覆い隠されたおもいだ。

けつきよく、かの女は来た。雑談をした。かの女はぼくとおなじ歳で、おなじ町に棲んでるのがわかった。そしてどういうわけか、かの女とぼくは腕相撲をした。主任にやらされてた。かの女が手袋を脱ごうとする。ぼくはそれをとめる。かの女の、裸の手、それをぼくが汚すわけにはいかなかった。ぼくはかの女に勝ちを譲って、仕事にもどった。どうやら、月の終わりに辞めてしまいうらしかった。でも、ぼくはなにもいえなかった。こんな醜いでぶやろうが、かの女に近づいたってろ

くでもない。夜、かの女をおもって1篇の詩を書いた。そいつに『太った聖者』となまえをつけた。深夜まで父が作業をしてる。眠れやしない。こっちも音楽をかけ、酒を呷った。

うるさい！

その変な音楽消せ！

知るか、くそつたれ！

父が室に入ってきた。ぼくは父に殴りかかった。拳がテンプルに決まった。父はフックを用意してる。でも、母が2階から降りてきて、わって入った。そして、あしたカーテンを買うからといって泣いた。泣きながら2階へあがってった。父は作業場の灯りを消し、ぼくは眠ることにした。かの女はあした来るだろうかとおもいながら。

かの女は来なかった。ぼくは宿酔いでどうしようもなかった。入庫品を隠れて毀しまくった。踏んづけて、蹴飛ばした。かの女がやめるまであと1日しかない。この3ヶ月、なにもできなかった。その日、早退した。当然、主任は怒った。でも、それ以外にどうしようもなかった。かの女にできることはないだろうか、ぼくはそう考えつづけた。長い坂道を上りながら、どうやっておもいを伝えられるだろうかと考える。けっきょく、それまでの作品をまとめることにした。水彩画と写真、そして詩歌。なるべく量を抑えて、クリップで留める。そのページの最後に「好きでした」と書いた。これを渡そう。

朝、エレヴェータにかの女がいた。どうしようもなくうれしかったが、あしたでかの女とはお別れだ。できるだけ話そう、話しかけようと考えた。かの女と眼があった。——おはよう。——かの女が応える。——おはよう。

きのう、ぜんぜん寝てなくてね。

わたしも、ずっとゲームしてた。

おれはギター弾いてた。

かの女は悦んだ。じぶんもまえにバンドをやってたといい、いまもギターとベースが室にあるといった。いまはゲームでぜんぜん触ってないことも。——それはみんないままで立ち聞きしてたことだった。

ドアーズってバンドの曲をやってた。

洋楽？

うん。

むつかしそう。

その日はずっとかの女の仕事を楽にできないかと立ち回った。でも、大したことにはならなかった。なんだか話かけただけだ。残業を終えて、服を着替えた。みんながかの女に話しかけてるあいだに駐輪場へ降り、かの女を待った。長いこと待った。よほど帰ろうかとおもったとき、かの女が降りてきた。フェイク・ファアのついた紫色のダウンと、カーキ色のズボンを穿いてる。かの女が笑顔がたまらなかった。

きょうで終わりだって？

うん、そう。

お疲れさまだったね。

ほんと、しんどかった。

ところで——といってぼくは鞆から作品をとりだした。——こんど、本を出すんだけど、よかったら読んでよ。

えー、凄いね。

咽がからからで声がでずらい。もつとなにかいいたいことがあるはずなのにいえなかった。かの女はぼくに手をふって、じゃあ、またね。

たしかにそういった。そんなこと、あるはずもないのに。ぼくはかの女が林道を下って消えてゆくのを確かめ、ジョルノのエンジンをかけた。もう2月だ。また単調で、退屈な仕事が続いてる。ぼくから人間らしさを奪う仕事が続いてるんだ。ぼくはまた酒を買いに走った。きょうはとびきりの酒にしよう。やがて酒を手に入れ、バス停のまえで停まった。精神病院へとつづく暗い坂が植木のなかで延びている。無人のバス亭でなぜ呑んだ。どうしてかはわからない。泥酔の果て、だれかがやって来た。そしてなにごとかを囁きながら、ぼくの上着を剥いだ。ぼくはそれをどうすることもできない。なにもしない。なにもわからない。気がつくと、シャツ1枚で隧道を歩いてた。引き返してみる。ジョルノだけは無事だった。ぼくはそいつに跨がり、上着が落ちてないか探った。河床に引っ掛かった。

かの女が辞めた翌日、おれは休み、クビになった。もうどうだっていい。それから飯場に潜り込み、あるいはスーパーの屑入れに潜り込み、あるいは医薬品の倉庫や、冷蔵倉庫にもいったりした。家にはいられなかった。父との折り合いはどうやってもつかないからだ。日銭稼ぎの、当てのない日がつづくなか、なにかが蝕まれていった。夜は公園で眠り、午は働く。あるいはその反対だってある。薄汚れたわが身を繕う、そんなゆとりもない。週に何度かはネット屋のシャワーを使ったりもしたけど、それも回数が減っていった。仕事がなくなってきたからだ。とにかくどうしようもない。仕事はなくとも酒はやめられなかった。いつもの店で、酒を買い、公園で呑んだ。暗がりのなかのベンチに坐り、昔から抱いてる多くの空想とともにして呑む。気づいたときにはだれかの室にいた。ぼくは起きあがってあたりを見る。

やっと、氣いついたか？

ずいぶんまえに見たことのある顔だった。できれば見たくない顔だった。おそろしく退屈で、冗漫で、怠惰で、笑えもしないし、泣けもしない、もはや怒りの湧いて来ない顔だ。感情らしいものを見いだすのも億劫になる顔。そして鼻。

おれのこと、懐いだしたか？

ぼくはいった。

いいや、おまえなんか知らない。

ビールがまだあるでえ。

いいや、こんなところにはいたくないよ。

まあ、そういうなや、ほら、まえにいった子お、連れてくるから。

わかったよ、さっさと連れて来いよ。

ああ、いま電話したるわ。

やつは臀のポケットから電話をだしてすぐにかけた。幽かに女の声がしてる。ぼくはしばらく我慢することにして、酒壇をとった。何度か、それを叩いて、深い呼吸を繰り返す。もう泥酔もいいところにちがいない。やがて電話は終わって、やつが怪しい笑みを浮かべてぼくを見た。

すぐ来るそうやで。

そうか。

それで、そいつは美人か？

ああ、きれいやで。

やがて階段を昇る音がした。不定形の女が室に侵入して来る。定型に収めるにはどうしたらいいのか？——ぼくは慌てて酒壇を、そいつの顔にたたき込む。悲鳴がする。そのまんま立ちあがって、廊下まででると、階段を駆け降りた。やつが追って来る。なんだってこんなところにいるんだ！——まるでパラノイアみたいにぼくを追いかけるかげ。玄関にたどり着き、扉をあける。やつがぼくの肩に手をかける。一瞬ふり返る。でも、その顔は見えない。やがて照明倉庫の出庫口まで来る。

エレヴェーターに乗って、2階へあがった。急ぐ。もういなくなったかの女に与える辞を探しながら。もうじき去ってしまうかの女に伝える辞を探しながら焦る。倉庫は照明器具を扱ってる、かの女はそこでぼくと働いてたんだ。フロア・リーダーのアズマがぼくを怒鳴る。そして追いかける。ぼくは走る。やがて暗がりのなかでピッキングのリストがちばらり、鬱病の男がぼくを掴まえていう、きみはぼくの息子にそっくりだっていう。突き放してフロアの奥へ走る、主任は気味のわるい、口のわるい、品のない男で、あんなやつになんか負けたくない。でもおとついぼくはかの女にわかれをいって、そして翌日、ふけたんだ。それでクビにされた。でも、いまはかの女は映画のなか、もっと若いころのかの女が映画にでてる、スクリーンの裏手まで、ぼくはいった。5階の男がさえぎる、キンジョウさんがなにかいってる、ケイシンや、もりか運輸、信州名鉄AとBやなんかのトラックがいっぱいで、なにも見えなくなる、それでもぼくはかの女のなまえを呼ぶ。

ナカクボさん！

おなじ町に棲んでたあの子、おなじ歳だったかの女、バンドをやってたあの子、みじかい髪が愛おしくなるようなあの子、ミヤザキからきたかの女、かの女が笑みを浮かべて立ってる。倉庫の制服を着てる。けれども、そこで眼が醒めた。ベンチは暗いまんまだ。けつきよく次の朝が来るまで呑むことにした。朝になって口入れ屋に電話する。あしたの仕事がないかを聞く。けつきよく、そんなものはない。パンを喰いながら、時間を潰す。おなじ状態がずっとつづくみたいな感覚だ。やがて日が暮れて、夜になって、ぼくはジョルノに跨がる。わずかがソリンを気かけながら。——いったい、おれはなにをやってるんだろう。仕事もできず、家にもいられず、孤立してて、それが恢復する気配もない。金はあと、3千円ばかりしかない。望みがない。望みがなくて、なにかを始めようって気分にもなれない。問題があまりにも山積みで、どっかで手をだせばいいのが、まるでわからないと来る。アルコール、アルコール、アルコール、——ただそれだけをおれの脳なづきが呼びつづけてる。タイヤ専門店の裏に段ボール置き場を見つけた。そこでぼくは身体を丸め、浅い眠りを眠った。翌日、ようやく

く仕事が入った。それも10日契約。鹿ノ子台の医薬品倉庫で仕分け作業。おもわず、小躍りしちまいそうになった。

ぼくはふとかの女が棲んでいるだろう場所を探して走った。もちろん、見つかりはしない。けっきょく丘のうえにあるスーパーで酒を仕込むことにした。残り少ない金でだ。洋酒は大して置いてない。ズブロッカの壇をみつけてレジに行く。そのとき、紫色のダウンが見えた。まちがいない。会計を済ませ、そのあとを追った。どうか、かの女が気づいてくれますようにと願いながら、近づく。ぼくはかの女の声を待っていたんだ。かの女が通りを渡り、公園に入る。そのままぼくも着いていく。かの女はふりむかない。ふりむいたところで、かの女はどうおもうだろうか。いままでにぼくをふった女たちをおもい浮かべた。くだらないことだ。かの女はふりむかない。ぼくはベンチに坐って酒をあけた。かの女はふりむかない。やがてそのうしろ姿も見えなくなつて、気づくとじぶんでも知らないうちに泣いてた。

そのあと、ぼくは丘をくだつて灯りの乏しい田舎道を歩いた。中古車ディーラーが点々としてる。あとはスタンドぐらい。車がぼくを、ぼくの人生を、そしてぼくの死をも追い越していく。まるで馬みたいに。雲がかぜに流され、それまで見えなかった月が姿を現した。まさしく、グレープフルーツ・ムーンだ。その光りのなかに一瞬立ち止まり、交差点を進む。ひとかげが浮かぶ。なにかがぶつかる音がしてる。中学生らしい少年たちが車道にむかつてオレンジを投げつづけているのを見た。オレンジは道で弾け、あるいは轢かれて爆発し、果肉と汁を撒き散らした。

なにやってるの？

これ、黴が生えちゃったんだよ。

ダウン・パーカーを来た少年がいじわるそうな笑みを浮かべていった。いい眼をしてる。

で、投げてるのか。

そうだよ。

うれしい？

うれしいよ。

なるほどな。

おれも仲間に入れてくれ。

ぼくはかれらにそういった。かれらは笑った。そしてオレンジをしっかりと掴んで、車道を走る車にむかってみんなで投げつけた。それは貨物トラックのフロントグラスに当たり、運転手はハンドルを誤った。こっちへむかってくる。そしていま、少年たちが逃げ惑うなかで、ぼくは「広告募集」の看板のしたで、ただ立ってるだけだ。かの女がふりむかなかったみたい
に、この世界がぼくにふりむかないのなら、——どうにでもなっちまえ！

*

光りに焼かれつつける、うち棄てられた冷蔵庫のブルーズ

8月のこと。ちいさな建屋の、自動車修理解体工場のまえ、うづたかくされたもののあいまをぬうようにしてかれは冷やされた緑の、その露をなめてる。とにかく舌が乾いた。うしろになにかが立ってる。ふるい冷蔵庫で、あけはなたれたとびらをむこうにふるい、ダイヤル回転式の黒いやつ。受話器を手にとってかれは話しをしてみる。

やあ、おれだよ。

うん、そうだよ。

ああ、そうさ、でかいやまをあてたんだ。

いまに好きなことができるぜ。

えっ？

サツだって？

それはないね、おれのこととはだれも知らない。

ああ、それは聞いている。

でももんだいはない。わかってる。

お願いだ、きょうは1日じゅう、赤いのを着てくれ。

じゃあ、頼むよ。――また遭おうぜ。

しばらく潜んなきゃ。

じゃあ。

そのまま切って倉庫へ引き返した。れもんの若木が子供をもぎとられた女になってる。集まってくる男たちはみな、かれに冷たかった。

逃げたんじゃねえかとおもったね。

拷つてたんですよ。

神を信じてんのか？

いえなにも。

じゃあ、なにに拷る？

この朝に。

ふざけるなよ。

おまえのせいで豚にされるのはいやだからな。

支度を終えて4人は車へ乗りこんだ。商品広告を載せたラッピングの白いバン、みな黙り、せかせかしたようすで莨を取りだす。いっせいに吸いだした。車庫の脇に植わった木が風で泣き、飼われてる犬が眼を醒ましはじめた。臆病な空気がそのへんに立ち込め、あるものは鼻を覆った。

おい、大丈夫だろうな？

助手席に坐った老人が青年へいった。ビーディーを吸い、うつろなまなざしを朝日にむけていた。唇が分厚い。いちばん

年少の27だ。——もちろん、だいじょうぶです。——その声は昏く、にぶいひびきがある。老人はなにかものを呑みこんだつらで、それを聞き、出発の合図をした。——どうなってもみんな一緒だ。

信じなかった。いつもみんな先にどこかへいつてしまう。5月の終わり、じぶんのもとに届いた郵便をおもう。なかに詩の雑誌と入選を知らせる紙片が封入されていた。それを救貧院の事務室で受け取って、その場であけた。選評にはこう書かれてあった。

《カポーティの短篇小説を読んだことがありますか？ その一節を描いたような魅力的な作品。特に第2連め。「汚れ」も、ある特定の精神に触れ言葉になれば、美しさ変わる、そんなことを思わずにはいられなかった》

カポーティを読んだことがない。その来歴と写真を見たに過ぎない。作家はかれの生まれた年に死んでいた。かれと同じくアルコールを呑みすぎていた。かれの知能指数は100にも満たなかったが、作家のそれは250あった。

いくつかの作品についてあらすじを調べた。じぶんの棲むところとの遠い距離を感じ、当惑を憶えた。楽しめそうには思えない。かれは1年も職に就いておらず、ほとんどのものから孤立してた。

発進する車、そのゆさぶりを慈しみながら、おれはこんなものごとくもやがて美しさに変えてしまうのだろうかと思った。なにも書かずにすむのなら、それがいちばんの救いのはずだ。書いてしまうことで本来、きれいだったものを醜く、穢れきったものを美しくかざりたててしまうのだ。

モグラびとたちはいごろ、どうしてるだろうか。またあの臭気のなかで眠りをむさぼってるだろう。こうなってしまうば、おれだってそうしたい。きっかけは町にいるときだった。声をかけてきたのは老人のほうで、かれはやせぎずで、乱れきつ

た髪をハンチングで隠しきれないまでに隠そうとしてた。しろいもみあげがいたいたしくみえる。

ここに棲んでるのか？

はい、あそこの施設にです。

いい仕事があるんだが来ないか？

無理ですよ、門限がありますから。

何時までに？

8時までです。朝は6時半から。

そっか。でも考えてくれよな。実入りはとにかくいいし、若いのがいるんだ。

かれのなまえや実家について訊きだすと、老人はスーパーを越えてどや街のほうへ入っていった。歩道の柵に洗濯物がかかっているとをかれはみる。しばらく日に焼かれながら。それが去年の秋口だった。春になってかれはアパートメントの1室を与えられた。居宅生活訓練といい、生活保護に値するかをみるものだった。条件はひとつ、酒を呑まないこと。呑めば1発で実家送りだ。室はふるい色町のなかにあった。戸口をひらけた屋が何軒もならば、坐った女のひとの隣りで、年寄りのが客引きをしていた。——おにいさん！ いかが！——日に渡される千円ではそんなところにはいけない。なにかわるいことをしたようにいつも声を通りすぎてた。

かれがそこを追われたのは、電話のせいだった。その日は朝から呑んで吐きちらかすてまえにきてた。ゆうぐれどき、ほんのおもいつきでダイアルに手をかける。師匠である、童話作家にだ。その声は冷め切ってた。

で、——なに？

作品、送ったのですが。

ああ、届いてるよ

どうでしたか？

少しあいだがあった。それから堰を切る、そのものだった。

どうでしたかじゃないよ。

あんたはおれに破門してくれって書いてきたんだぜ？

そんなやつがどうでしたか、なんてよくいえるな！

あんなきたならしい詩なんか送ってきやがって！

あんたはどうしてそう品がないんだ？

詩なんか猫かぶりでいいんだ！

あんたは酒に溺れてどんどん品がなくなってる。

あんたそれが自分でもわかってるだろ？

それをなんだ、3流雑誌に載って、

へんな女からわけのわかんない評がついたくらいで調子に乗るなよ！

あんたはみんなに迷惑かけてるんだ、

おやじさんにもおふくろさんにも姉さんにも妹たちにも施設のひとにも！

あんたは本当に家へ詫び状送ったのか？

あんたうそつきだからな、あんたの書いたことなんてひとつも信じられない！

あんたは姉や妹たちが嫁げなくなるようなものを書いて平気なのかよ、

だったらいますぐに死んじまえよ！

おれは品のないろくでなしでうそつきだとかれはおもった。はじめからからねじくれてる。かつておれに品があったとはおもえない。ただ化けのかわがはがれてきたのだ。飯場を転々としたり、空き家の車庫で寝たり、公園で暮らすようなことがなければ、もう少し品があるように装いつづけることができたかも知れない。でも遅かった。だから黙って聞く。

あんたをおれを老いぼれって書いたけどな。

酒なんか呑んでるあんたよりも、

おれのほうがよっぽど脳は若いんだからな！

おれはいま中国の詩人の研究をしてるんだよ。

あいつらはな、ちよつとでもまずいこと書いたら殺されちまうんだぜ！

あんたなんか、本当ならもうおしまいなんだよ。

あんた、なんであんなことを書いたんだ？

あんたはおれに褒めてもらいたくて詩を書いて送ってきたのか？

ええ、そうです。

甘えていました。

そうだろう。甘ったれてただろう。

あんたがおれについてとやかくいうのは許すよ。

それは許しますよ。

けどな、あんたが先生についてくだらないこと書いてみるよ、

おれはあんたのことを探しだして殺しにいくからな！

作家とはじめてあったときのことを思いだしてた。老作家はいった。詩人は品のいいやくざだと。かれには義理も人情もない。じぶんを突き放す度胸もなかった。

詩人はしゃべりまくり、とんでもない勢いで言葉を放った。おれにはとてもそんなことはできない。おれが憶えたのはけつきよく言葉の模造品だ。本と映画と音楽によって育まれたつくりものに過ぎない。ひととの交わりのなかで培い、養ってきた人間に敵うはずはない。ただ聞いているしかなかった。

おれはあんたをいったん破門するよ。

あんたがもしも先生について、

あなたにしか書けないようなやつを本1冊分書いたら許すよ。

できなかったらそのままお互いに忘れましょう。

電話を切って、罐チューハイを干した。できることはなにもない。そのままかれは救貧院にいった。よく憶えていないが、夕食の予約を入れてたから、それをいかないとすれば怪しまれるとおもい、さらには、あまり酔ってはないとおもってた。あつというまに酒酔いがあらわになって、かれはその夕べのライス・カレーも、千円の支給もとめられ、すぐに実家へと送還された。それは山のとっぺんにあつて、高原と呼ばれ、まわりにはなにもない。バスも列車も、商店も、自動販売機も、浮浪者も、娼婦も狂人もなかった。日課といえど寝てるところを父にけられることだけだ。そしてたまに金を手に入れては酒を麓の町まで買いにでかけることだった。

ある夜、とんでもなく酔ってた。かれは母に怨みごとをぶっつけ、いちばんしたの妹を撲りつけ、木椅子で祖母の仏壇をはでに鳴らした。それから電気で死のうとおもいたって、どうやるかを考えてるうちに眠ってしまった。嘔きだしたものの

うちでだ。つぎの朝、夜勤から帰ってきた父にこっぴどくやられた。荷物をすべて燃やされ、かれが密造してた口嚙酒が室のそこらじゅうにばらまかれた。それはかれ自身にも注がれた。

その夜電話があった。老人からだ。

生きてるか？

死んでるほうがましでしょうね。

金儲けはすぐそこにある。ついてこいよ。

のったよ、じいさん。

その調子だ、兄ちゃん。

つぎの朝にはもう町へでてた。父の金をくすねて追い放たれたところへ。かれはまず、もぐらびとたちの巣へ招かれた。戦前からある地下道で、もとは水が流れていたらしいところだった。かれらはそこで暮らしてた。小舟のようなねぐらをなべ、ときおり流れてくる、不法投棄に備えてる。浅い汚濁のながれと豚のようなねずみが、あたりを飾って、かれは鼻を覆って耳をすます。老人が声をかけずとも、7人の男たちは舟を降りてきた。みないちように表情がない。くらい両の眼がぼくを見てた。——こいつだよ、トビタに棲んでたっていうのは。

若いくせに保護かよ。とんだくそやろうだな。

聞いたことあるぜ、いまじゃあ、将来性のあるやつを受けるって。

でも若いからってさきがあるとはかぎらねえ。

男なんてせいぜい10代のうちに底が見えてら。

少なくともこいつには、ないだろうな。

そう突つつくなよ。せつかくのやつなんだからな。

せつかくやつがこわされねえようにしねえとな。

わらいのないわらいを聞いた。ややあって老人は全員の名まえのみを明らかにした。しかしかれは自身の来歴について証言しなければならなかった。産まれ土地から、学校や集まりへの遠ざかり、倉庫や飯場での流れようなんかをだ。

どもりがあるな。すこしだが。

ええ、そうなんです。

そうなんです、だとよ。

まあ、よしとしよう。

そうだ、よしだ。おれと似てるらしい。

よかったな、きみ。

老人の手が背中にかかる。その日は老人の知り合いの家へ泊まった。自動車修理解体場で、中心街からはずいぶんと遠い。列車に揺られながら、おもてをみる。灯しはすでにまばらになってた。

挨拶も控えめにかれらへあたまをさげた。30代の夫妻だ。夫は肥えすぎで、妻のほうはといえばやせすぎだ。ほとんど肉を感じさせない。眼が鋭い。でも美しさと品はあった。

食卓におかれた作業手袋を棚へはらってから、妻は料理をならべだした。かの女は午、修理を請け負い、夜には女房にもどった。看板はない、広告もださない解体と修理、ここには車体のほかにもきずを持ったひとたちがくるらしいと察することができた。具の乏しい汁ものを妻は好み、夫は肉と脂を噛み砕いてる。そうしながらかれの来歴を聞く。老人がそれを飾って、ことさら信用のある人物にみせかける。

あんたは広告貼りの格好してそこらをぶらついてくれたらいい。

わしはビラ配りのふりをしてたっているから。

車が着たらまずは警備員をよく見ろ。

やつらが金の入った鞆をだしたら、

おまえは糊のデッキブラシをそのつらにぶちこめ、

おれは鞆を奪う、

それで一緒に車に乗るんだ。

どつかで聞いた場面だなと思った。おもいだしてみるとそれは映画だった。不良少年とフランソワ・オランのはったヤマ。映画はいまいちだったが、ジョゼの原作はよかった。吹きだしそうになりながら喰ってた。あまりにばかばかしかった。でも、それがいいのかも知れない。

7人でやるには多すぎるとおもいますが。

これから削ってくんだよ。

あの全員が使えるとおもうか？

それでいつやるんです？

再来週の金曜日、その午后だ。

ふたりして倉庫の屋根裏に寝ころがった。23時、夜が長いとおもえば、もう酒のないことにふるえるような温さがみえた。

それでももうじき、火曜日になる。

翌日からずっと工場の片づけをやらされた。草刈からはじめて機械の配置換えや、車体の移動にあくせくする。肩がわれ

るようになってるのを主人はなにもみえないようにふるまい、溶接機やら薬液の罐やらを転がすように運んでった。仕事が終わって湯を浴みてると、夫人が来て扉越しに声をかけてきた。

たいへんでしたでしょう？

ええ、こたえますね。

主人にはああすることしかできないのよ。

そうなんですか。

「ええ、わたし脱出したい。どこでもいいから——してしまえばどうです？——無理なことよ。——それきり声はなく、かれはシャワーをかけつつけた。すると工場から声がした。それは犬の叫びに近い声だ。——おい、いいかげんに湯をとめろ！ むだづかいするな！——食卓にいった。きのうとおなじものがそっくりでてきた。

どうしたの？——そんな顔して。

こいつには根性つてものがないんだ。だから少し動いただけで青ざめる。

主人は肉をとって頬張った。かれには与えてはくれない。

どうした？ 文句でもあるのか？

いいえ、なにも。

気に入らないつらだ。

あいつはなんでおまえのようなやつを釣ったんだか。

わかりません。

いいか、わかりたいのはおれなんだ。

おまえじゃない。

おれの考えに入るな。

すみません。

たやすくあやまりやがって。

さっさと喰って失せろ。

衣服に染みこんだ、草や油の匂いをそのままにして寝床へ坐った。灯りの絞ったランプに本をひらき、てきとうにめくる。

——おれに言わせりゃ、おまえはしゃれた女たらしってとこだ、とレネハンが言った。

このやまがもしもうまくいったらまずは女を買いにでかけよう。あの色町にいつて垢を落としてやるんだ。童貞という垢をだ。電気式の後光によって照らされる女たち、客引きの老婦人ども、遊び人のくだらない連中を思いながら、からだがつぐに眠りを欲した。

夜が明けて老人が顔をだしてきた。車の手配が完了したという。裏庭にワゴンが運び込まれた。楡の木のもとをとうに廃車になったのが停まる。——こいつを直して塗装してくれ。真っ白にな。頼むよ。——主人は黙ってうなずき、車体を片手で撫ぜる。そうやって車の心音を確かめるかのようだ。——修理代と黙秘は前払いだ。

計画はどうなってるんです？

何人かを実際の広告や配布で働かせる、それで実行班の参考にするんだ。

ぼくはそれまでここに？

いいや、ちよいとやつてもらいたいことがあるんだ。

まだいいないが。

それきりだ。老人は去り、またも重労働に狩りだされた。ワゴンを工場に運び入れ、まずは清掃だ。そのさきは主人の指導で道具や部品を手渡しでいった。はたからみていてかれはあまり乗り気でないようだった。そしてまたおなじ夕餉。かれは酒が呑みたかった。

ちよつと買ひものへいきたいのですが。

なぜだ？

呑みものを少し。

それくらいここにもある。

いえ、酒を。

酒だって？

ふざけるな！

ばかたれが！

おれが呑まないんだからおまえも呑むな！

じゃあ、ジンジャーエールとパンだけでも。

金を寄こせ、妻が買いに行く。

ぼくは逃げませんよ。

どうだろうな。

くそに毛の生えた臆病ものにしか見えないがな。

そのあとは黙りこくって汁を啜り、サラダを喰った。きざまれたアンチヨビだけが唯一の肉だ。夫人はじぶんのぶんを済

ませてから買いものへでかけてった。眠りに就くまえにそれらを口にしながら、いったいじぶんがどこにいるのかを考えつづけた。しかしこの土地のなまえすらわからず、いったいじぶんがどの役をやっているのかさえ不明だった。翌日、3人のもぐらどもそれぞれ面接にでかけたらしい。つらのましなのが選ばれて襟を正した。しかし当たりはでなかった。つらはましも歳を喰ってて、職歴もあいまいだったからだ。

つぎにふたりの男が面接を受けた。若づくりを施し、職歴を磨きあげていった。ひとりが採用されたものの、初日になつてうそが暴かれ、戒告を受けた。そいつは腐ってやめちまった。そうやって、もぐらたちはすがたを消しつづけ、ふたりだけが残った。かれらは変装と身なりをととのえ、どやで待機に入った。

そしてかれは作業員として暮らしつづけていた。夕餉のとき、主人がいう。

おまえ、うちで棲みこみにならないか？

え？

あんなじいさんのいつてるおたわごとなんぞで人生をむだにすることはないぞ。

あんなの、昔から最低の客だ、おやじの代からのな。

でもいまさら断れませんよ。金ももらっていますし。

それぐらい働いて返せるだろうが。

おれはあんなやろうのために捕まるのはごめんだね。

おまえはちからがないがまじめにやってる。

どうだ？

考えさせてください。

まあ、いい。

どうせ帰ってくるさ。

喰いおえると皿を洗い、寢床へあがった。冷たい蒲団のうえで胡坐をかき、本をひらく。しかしもはやなにもあたまへ入って来なかった。捕まってしまうえば執行猶予はないだろう。重犯罪者として顔が国じゅうにまわされる。おぼろげだった不安が難い現実へとすりかわっていくのをじっと見つめた。——それからまた走り出せば、ほどなくベガスだ。——だれかが戸を叩いた。

「電話よ、じいさんから」——子機を差しだす夫人の手が廊下の燈で光ってた。しばらくみていたかったが、あきらめて耳をあてる。——おまえさんにも仕事をやらせる。——なんですか？——あの奥さんとの仲をとりもってほしい。——え？——どうやって？——にぶいやつだな。ふたりきりにしてほしいんだよ。

わかりましたよ。

なんとかやってみます。

終わった通話を反芻しながら、かれは夫人の顔をみた。どうしたらいいのかが、まるでわからない。やせぎすが美しい女、かれはそう名づけてからおもいなおして削除した。ばからしいものだ。なんだってこんなことをしなければならぬのか。木曜の午、主人はでかけてった。かれは電話で老人を呼びだし、夫人を居間に呼んだ。あとは知らん顔を決め、廊下に立つ。やがてふたりが話しはじめた。それをぢっして聞く。それくらいしかできなかった。

「なあ、奥さん。あなたはダイエットのし過ぎだよ」——ええ、わかってます。でももう粗食になれてしまつて。いまさら返られないのよ。——まえにいったよな、こっからでたいつて。——その望み叶えてやれるよ、もうじき。明日だ。——期待できません。——そんなこたあない！——あとにはえんえんと老人の講釈がつづく。かれは壁越しに聞きながら、手

錠の重さについてめぐらしてた。

*

金曜の明け方だった。うづたかくされた車体のあいまを縫うようにしてぼくは冷やされた緑の、その露をなめてた。とにかく舌が乾く。うしろになにかが立ってる。ふるい冷蔵庫で、あけはなたれたとびらには、ふるい、ダイヤル回転式の黒いやつ。受話器を手にとって話しをしてみる。

どなた？

やあ、おれだよ。

おれさんね？ 元気にしてるの？

うん、そうだよ。

いまどこに棲んでるの？ お金は持ってるの？ それとも盗みでもやってる？

ああ、そうさ、でかいやまをあてたんた。

いまに好きなことができるぜ。

無駄なあらがいよ、すぐに捕まるって。

えっ？

警察だって。

サツだって？

決まってるじゃない。

それはないね、おれのこととはだれも知らない。

裏切りものだってでてくる。

ああ、それは聞いている。

じゃあ、さっさと逃げて。

でももんだいはない。ぜんぶわかってる。

なにがぜんぶよ。わかってない。

お願いだ、きょうは1日じゅう、赤いのを着ててくれ。

——わかった。

じゃあ、頼むよ。——また遭おうぜ。

しばらく潜んなきゃ。

じゃあ。

ぜったいに捕まるって。

切って倉庫へ引き返した。れもんの若木が子供をもぎとられた女になってる。集まってくる男たちはみな、ぼくに冷たかった。

逃げたんじゃねえかとおもったね。

拷問してたんですよ。

神を信じてんのか？

いえなにも。

じゃあ、なにに拷る？

この朝に。

ふざけるなよ。

おまえのせいで豚にされるのはいやだからな。

車が走り出して30分が過ぎた。まず右後輪のタイヤがおかしくなりだした。煙がでたなとおもううち、車内へ強烈な臭いが発ちこめ、みな顔が覆う。ぼくが片手で窓をあけてるま、車首はぶるぶるふるえだし、何台もの対向車から警笛を喰らった挙句、路肩にぶつかった。あとは静かなものだった。みな車を囲んで、無言のまま見つめていた。老人だけは怒り狂って手がつけられないありさまだった。安物の背広をしわだらけにしながら車体に蹴りを入れていた。やがてそれもおとなしくなった。息を切らし、空を見た。ぼくは莚を吸いたいのを堪え、じっと手を組んだ。朝の忙しい往来のなかに何人か、好みの女を見つけ、あたまのうちに留める。じぶんが真剣にものごとをうけとめられないことを笑いそうになった。あわてて打ち消し、状況に眼をやる。時間はあまりなかった。

ここで車を奪おう

老人がいった。男たちは静かにうなづいて歩道を歩き出した。その先にコンビニエンス・ストアがある。それがはっきり見える。陽を浴みて白い。

だめだ、もう。

男のひとりが頭をふった。つよくふったから、そのままあたまがはずれてしまいそうにみえた。ひとりひとりがばらばらになって失せ、ぼくは老人とバスに乗って工場へともどった。主人はいない。どうやらしばらく潜るつもりらしい。妻は車

庫で車を磨いてた。57年式のサルトガ。黒い車体をよりいっそう黒くしながら、かの女の腿が昏らがりの中でひらめく。布切れには血みたいのがついていた。血のような血だった。

だめでしたよ、まったくだめでした。

そうでしょうね。

わかってたわ。——主人はいま、いないのよ。

しかしぼくは仕事にとりかかった。鉄くず運びにただただ汗を流す。午が来て、それもやがてかなただ。夕餉を済ませてからふたりで寝室にいったとき、ぼくはじぶんの靴をかの女の寝台のしたへおいた。夜は傷みだした、鱈の臭いがする。とてもかんたんに篩いにかけられてたのだ。なにに？

どうせなら、着飾ってくださいよ、きれいに。

めんどうだわ。

でもそのほうが楽しめそうだ。

女には肉らしいのがなかったから注文した。すこしでもいいから他人のからだを感じたい。ぼくには裸なんてなにもおもしろくもなかった。めんどうにおもいながらもかの女は盛装してくれた。夏物のドレスにみじかい手袋をつけて、ストッキングとハイヒール。薄化粧に装身具、そして帽子。ぼくはかの女をうえにしてしっかりとかまえた。たがいの微笑みが工場からのグラインダーの音にぶつかる。老人がなにかやってるらしい。やがてそれも失せ、足音が廊下を伝わった。

そこまでだ。

そうやつがいう。

いますぐにここをあけろ！

あけるんだ！

戸口のむこうからいつまでも声がしてる。いつまでも青年は笑ってた。笑いながら腰をふりふりして、かの女を愛していた。老人の叫びもやまない。やつの手にはつくったばかりの兇器が握られているのだ。おそらくは。

おれの役割なんだぞ！

そいつは！

*



中田満帆／'84年7月3日生まれ。神戸市出身、在住。詩集『38wの紙片』、『終夜営業—Open 24 Hours—発送受付』、詩画集『世界の果ての駅舎』。歌集『星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso』。出版局『a missing person's press』主宰、発行人。

"Though the way of a journey is beautiful, and a traveler is goodness..." and other stories

©2011, 2012, 2013, 2016, 2017, 2018 2019 by Mitzho Nakata

旅路は美しく、旅人は善良だということに

ISBN:978-4-9909502-1-7 C0093

2024年6月15日・改訂第2版発行

装丁・写真・著作・発行人：中田満帆

発行所：a missing person's press

〒651-0092 兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

[Tel] 078-200-6874 [Mail] mitzho84@gmail.com

Printed in Japan

Made in Kobe